家庭教育歴史讀本

卯花月夜

小中村義象
落合直文 合著

博文館藏版

74
277

家庭教育歴史讀本 卯花月夜目次

上の巻

一 名古曾の關 源義家の事蹟……一
二 宇治川 佐々木高綱の事蹟……三五
三 屋島浦 那須與一の事蹟……六〇

中の巻

一 小松の雪 平重盛の事蹟……七一
二 鬼界ヶ島 俊寛僧都の事蹟……一二三

下の巻

家庭教育
歴史讀本

卯花月夜

小中村義象
落合直文 合著

上の巻

一　名古曾の關　源義家の事蹟

吹く風をなこその關とおもへども
　みちもせに散る山さくら花

八幡太郎義家、陸奥へ赴くとて、この關にかゝられしが、折しも春も半過きて、咲きそろひたる花どもの、空に知られぬ雪と散り亂れて、馬の蹄も埋るゝばかりなれば、おのつから、かくはよみ出られしなり。英雄の名吟、千歳の下、猶人をして、そそろに、そのかみを忍ひ出さしむ。この句ありて、關の名遠長に

一　鳥羽の戀塚　袈裟御前の事蹟……一五
二　鶴岡　靜御前の事蹟……一八〇
三　館の血烟　細川忠興夫人の事蹟……二〇三

傳はり、この花ありて、義家の心事、萬代にかぐはし。

義家は、鎮守府將軍頼信の孫、伊豫守頼義の長子なり。小字を源太といふ。初め頼義、夢に、八幡大神、劔を賜へりと見て、覺めて後、獨あやしみ居たりしが、程なく、その妻妊みて、義家を生みぬ。頼義、夢の事も思ひ合せられて、大に悅び、七歳の時、みづから率て、石清水八幡宮に詣でゝ、元服せしめ、宮號によりて、八幡太郎と稱せしむ。人となり勇武にして、事にあたりて明決なり。最も騎射を善くせり。

初め陸奥に、安倍頼時といふものありき。暴戾にして、良民を惱ますこと、屢々なり、朝廷、頼義を陸奥守とし、鎮守府將軍を兼ねしめて、之を討たしめたまふ。頼時、子貞任、宗任等と、衣川に據りて、拒き戰ふ。頼時は幾ほどもなくして、敗死せしかども、貞任等の兵勢、あたるべくもあらざりき。時に、義家も、父に從ひて戰場に在り。天喜五年十一月、頼義、みづから、一千八百餘人を率て、貞任を、河崎柵に擊つ。たまゝ、大風起りて、雪さへいと降り加はれるに、寒地に馴れざるものゝ常として、人も馬も凍え死んばかりなりき。

されば、箙に矢はあれども、手かいまりて、執らん術もなく、太刀はあれども、うち出んかたにもなし。かゝるありさまを見ぬきて、賊將貞任、精兵四千餘人を率て、鳥海の柵まで、押し出で、所得がほに斬り廻る。頼義、大に敗れて、麾下僅に六騎を殘す。時に義家は、藤原景通、大宅光任、清原貞廣、藤原範季、藤原則明等と共に、こゝを先途と進み入る。雪はいよ〳〵劇しくて、風は面をさくやうなれど、こゝを敗られては、回復すること能はず、すゝめやものども、といふ聲の下より、景通が子、藤原景季と名乘て、生年廿歳ばかりなるが、太刀引きぬきて、賊將數人を斬りて、その場に斃れぬ。景通は、子の討死せるに、氣も狂ふばかりなれど、大將軍のかたの氣つかはしくて、頼義のもとに行く。義家は、馬を雪中に馳せて、得意の强弓引きしをり、矢つきばやに、身はなさるゝに、あだ矢とてはなかりけり。かゝるほどに、賊兵後卷して押しよせこしかば、義家は、馬をひきかへして、馳せ向はんとせしに、雨のごとくふりくる矢に、馬を射られて、横ざまに倒れぬ。倒れながら、袖をかざして、猶射防つ中に、藤原則明、進て賊將一人を斬り、その馬を奪うて、義家に上る。義家、再び之に

乘り、左右の敵ども斬りはらひ、縱横にはせまはるに、雪は朱に染みて馬に蹴ちらさるゝさまは、風に紅葉のみだるゝかごとし。あまりのことに、賊ども避易して、後をも見ずに、遁げ惑ふ。これより、賊兵、義家を恐れて、神といふにいたりぬ。この時、義家なからましかば、頼義もいと危かりけんを、世に類ひなき、武勇の將にておはせうと、感嘆せざるものはなかりき。

康平五年、進で厨川、嫗戸の二柵を圍む。この柵、西北は大澤にして、二面は河を阻てぬ。その岸三丈にあまれり。壁のごとくに立て、上るべき道なし。柵の間に、隍を掘り、隍の底に、倒に刃を立つ。遠きものは、弩して射、近づくものは、石を投げて之を打つ、たまゝ、柵の下まで射るものあれば、熱湯をそゝぎて、焼き殺す。されは、こゝまで攻めよせしものから、いかんともせんやうなし。一日頼義士卒に命じて、民舍を壞ち、運びて、之を城隍に埋めしめ、又人ごとに、萱草を苅らせて、之を河岸に積ましむ。されば、さばかり深くけはしき隍も、時のまに、山のごとくに、積み上げぬ。頼義、齋戒して、遙に皇城を拜し、願くは八幡大神、臣が忠義を鑑みて、風を起さしめたまへと、みづから火を切りて、神火と稱して、之に投じつ。見る〳〵、暴風吹きおこりて、煙焔飛ぶがごとし。將士一同に、神の助なりと勇みよろこぶ。されど、柵はいと高ければ、及ぶやいかにと見るほどに、先に官軍の射立てし矢ども、柵の面に簑の毛のごとく立るに、やがて燃えつきぬ。あはやと見るほどこそあれ、樓櫓にやけ移りにけり。頼義義家は、馬を立てゝ、一方の圍を解けよと命ぜらるゝに、賊徒は、はやくも悟りて、こゝより遁げ降るもの數をしらず。貞任も、今は叶はじとて、同じ口より遁げ落ちぬ。義家、これを見て、衣川に、追ひたて責めふせて、汚くも後を見するものかな、暫し引かへせ、物いはん、といはれければ、貞任見かへりけるに、義家は、弓を滿月のごとくに張りつめて、

衣のたてはほころびにけり

といへり。貞任轡をやすらへ、鎧をふりむけて、

年を經し糸のみだれのくるしさに

とつけゝり。義家、情あることのはかなとて、はげたる矢をひきはづして、歸りぬ。さばかり、激しき戰ひの中に、やさしかりし事といふべし。されども、

そのまゝに見のがすべき敵ならねば、再び兵をおこして、攻めらるゝに、彼は大太刀を、ふりまはし〳〵つゝ斬りかゝるを、官軍鉾をもて、遂に刺し殺しつ。責任容貌魁偉にして、身の丈六尺にあまり、腰の圍七尺四寸あり。續いて家任、宗任等、來り降る。兵を用ゐしこと、凡十餘年、陸奥漸く平定せしは、頼義の功といへども、義家の策最も多しといふ。依りて從五位下に叙し、出羽守に任せられぬ。

此役、義家敵を射るに、弦に應じて斃れざるはなく、その甲冑を、貫かぬもの はあらざりき。武則、その弓勢を試みんとて、堅甲三領をかさね、之を樹枝に掛けて、射せしめしに。一發して、皆之を貫きぬ。武則、驚歎して、凡人の志わざにあらずといふ。

義家京師にかへりて後、宇治關白頼通の第に行きて、戰ひの間の、物語などせられける、大江匡房、座をへだてゝ之を聞き、器量はかしこき武者なれども、猶軍の道をばまらぬとひとりごとしけり。義家の郎等、之を聞きて、大に怒り、義家の出づるを待ちて、江帥殿は、かゝることをこそいはれつれ、悪きものなりと告げゝれば、義家、何てふさる事あらん、きはめて彼れが言理あらんといひて、匡房の出づるをまち、進みよりて、その車に

名古曱の圖

つき、拜禮して、直に弟子となりぬ。さて後專ら兵書を學びたり。あゝ英雄の心中、知らざるは知らずとして、みづから禮を以て兵法を學びけん、義家の器量こそいと貴けれ。さるにても陸奥の亂を平げて、威名赫々たる義家に、誰一人後指さすものもなきに、匡房の直言もまたかしこかりけり。とり〳〵に、めでたきことゝいふべし。

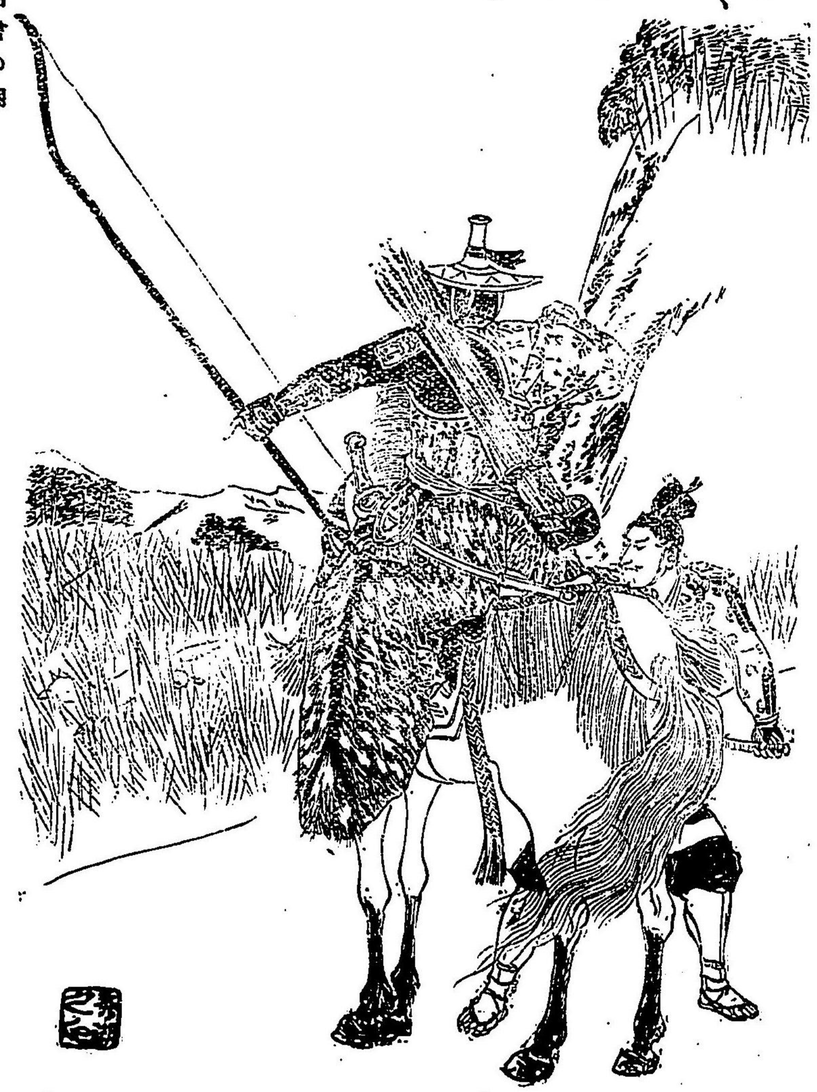
義家の武勇は、いよ〳〵輝き、人皆八幡殿と稱して、神の如くに崇めぬ。されば、上も下も、事とある時は、必この君をたのみきこゑけり。この頃、延曆園城の兩寺、常に心よからず、屢々戰ひて、京都をさわがし、あるひは、願ひをゆるされざるときは、神輿を舁き奉りて、强訴することさへありき、朝廷も、これをいと心うきものに思して、屢々鎭定せんとせられしかども、行はれざるのみか、反りて苦め奉ることも少からず。天皇、嘗て石清水に行幸せんとしたまひしに、兩寺のさま、頗、不穩なりければ、殊に義家に詔して、駕に從はしめらる。僧徒これを傳へきゝて、敢て亂暴を行ふものなかりきといふ。

白河法皇嘗て寢られたまはず、夜な〳〵物におそはれさせたまふことありき。あまたの修驗者などにも、咒せしめられしかども、更に止まざりけり。後にはいとどよわらせたまひて、侍臣どもせんかたなくてありけり。この事、義家にはからばやといふものありしかば、法皇即ち詔して、事のさまを仰せ下されき。義家、かしこみて、即、黑漆弓一張を獻りぬ。法皇、これを御枕邊におかせたまひて、寢ねたまふに、それより後おそはれたまはず。時に法皇、義家をめして、先に獻りし弓は、汝が陸奥の軍中に用ゐしものか、と問はせたまひしに、義家更に記憶し侍らず、と答へしかば、法皇いたく嘉歎せさせたまふ。かいれば義家の名は、雲の上にもひいきわたりて、仰ぎかしこまぬものはなかりき。

陸奥の合戰に、宗任、降人になりて來りし後は、常に義家のもとに祇候せり。一日、義家宗任一人を具して、もの〳〵ゆかれけり。主從ともに狩裝束にて靫を負へり。廣き野を、馬にて歩ませけるに、向の叢の中より、一疋の狐走り出でぬ。おもしろきとかな、彼射とりくれんとて、義家は、やかて靫より雁股の矢を執りて。そが走るかたに追ひかけけり。さて射んとして、罪なき者を殺さん

は、無慘なり、たいおどしてんとて、左右の耳の間をすりさまに、後へ射られけれは、矢は狐の前の土に立ちたり。狐はこれに防かれて、やかて斃れにけり。宗任馬より躍りおりて、狐を引きあげて、あはれ矢もたゝぬに、死にたりといふ。義家、ころさじとてこそ、射はあてたれ、いな生きかへりなん、といわるゝに、則ち、矢をとりてまゐらす。義家時に背をむけて、宗任してその矢を鞘にさいしめつ。これを見るもの、宗任は、今こそ朝臣の家入たれ、本の意趣も、のこりたらんものを、脇をそらして、敵に矢をさゝせらるゝことよと、汗を握るに、宗任はたゝ威光に壓されて、害せん心も出ず、ふるひながらさしてけり。かゝれば義家は、神に通じたまひたりと、田夫野人も仰ぎかしこまぬものはなかりき。

又ある夜、宗任のみを具して、さる家に行かれけるに、その家は、いとふるびて、築土などもくづれたれば、車寄の妻戸より、義家一人入られけり。宗任は、あはれなる家かな、さるにても、盜賊などの、よくも押し入らざることよと、中門の傍に、ひとり待ち居ぬ。折しも五月闇の墨を流したるが如くなるに、やがて雨ふりいでゝ、神鳴りおそろしきこと限りなし。あらん夜のさまなりと思ふうちに、强盜數十人、この家を襲ひ來ぬ。門



名古曱の閑

前によりそひ、火ともしなどしたるが、築土のくづれより、見ゆるを、竊にうかゝへば、三十人ばかりもありつらん、いづれも屈竟のものどもにて、太刀引きぬきたるもあり、棒などもてるも見ゆ。宗任いかゞはせんとおもひをる中に、中門の下より、犬一疋走り出でゝ、吠えけるを、小き蔡目にて射たり。犬は射られながら、けい〳〵となきて走るを、猶矢つきはやに射るに、義家、おくより誰候ふぞと問はれたり。宗任なりと名のりたれば、矢つぎの早きこそ不都合なれと戒めらる。強盗ども、この聲をきゝつたへて、八幡殿のおはしましけるぞ、あなおそろし、あなかなしとて、はふ〳〵遁げうせけり、かゝれば、亂暴狼藉を事とせるわるものゝ中にも、義家の名はかゞやきて、仰ぎかしこまぬものはなかりき。

あはれ、義家のごときは、眞に古今無雙の名將なるかな。弓矢取ての譽は、更にもいはず、文學の道にも暗からず。上朝廷に用ゐられ、下人民に崇めらる。宗任が、初めて降りし時は、眞に過を悔いてのわざなりしか、決して然らじ。貞任は、目の前に殺され、頼時ははやく討死せり。重任もころされき、千代童も斬られぬ。誓に誓ひし一族は、かくあはれなるめに逢ひつるに、宗任ともいはれんほどのものが、何ぞをめ〳〵と、甲を脱ぎて、降りくることあらんや。さるをその耻を忍び、その恨を呑みて、服從せしことは、大に思ふところありしならん。義家は、その心を知れさるか、決して然らじ。さては何故に彼一人のみを具して、危き歩行をのみせられしぞ。その心を知り居られんには、などかかくまでに心をゆるされけん。宗任またに、その志の達せさるか。之を思へはいとあやしく、義家は知らさるかことく、宗任はその心なきかことくなれと、大に志からす。義家のことさらに宗任一人を具して、そゝろありきせられしは、彼か心を試みられんとてのわさなりしならん。いな、むしろ、彼か肝をとりひしがんとてのわさなりしならん。宗任その義家につれられけん夜、その箙の矢をさしけん時、必ひとりその胸のみは躍りけん。されと威光神のことくなるは、宗任の眼を射て、手を出さんとだにおもはしめさりしならん。一たびおそれし後は、いよ〳〵神のことくにのみおもはれて、ひたすらに、前非を悔いて附きそひしならん、おもへば無雙の英雄な

るかな。八幡大神の夢想によりて妊めりけん、といふことさへあだならずこそ。

永保三年、義家陸奥守となり、鎮守府將軍を兼ねて下りぬ。時に清原眞衡、その族、清原家衡、藤原清衡等と互に相爭ひて、戰ふまでの中とはなれり。義家の來るをきゝ、眞衡は懇に出むかへて、戰ひのさまを白す。義家、即、眞衡を助けて、之を攻む。家衡の叔父、武衡といふもの、義家の眞衡を助くときゝ、みづから出でゝ、金澤の柵により、大に之に當る。義家頗利を失ひぬ。

寛治元年九月、義家みづから數萬騎を帥ゐて、金澤の柵を攻む。朝霧立ちわたりて、行先も見えぬばかりなるを、やう〳〵分けゆけば、大澤のもとに出でぬ。いつこより馬を入れんと、見まはされける中に、向ひのかたより、一つらの鴈飛ひ來けるかおりんとして、俄におどろきたるさまして、飛びかへりぬ。義家あやしみて、轡をおさへて、將士をめしよせ、伏兵野にあるときは、飛鴈亂れ行くとこそきけ、いで〳〵手をわかちて探せ、といはれければ、皆その用意して分け入りぬ。案の如く、三百餘騎かくれ居たるが打物とりてをどり出づ。兩軍入りみだれて、戰ひしかども、我兵、かねてさとり得しことなれば、ことごとに討ち滅しつ。

義家、かさねて將士どもに、我先年江帥に學ばされば、殆賊の術中に陷らんも知るべからず、あやうかりけるこ

名古曾の關

とよ、法は學ぶべきものなりといはれしに、人みな感歎せり。

世に骨肉の契ほど親しきはあらじ。父母なくなりては、兄弟ほど相慕はるゝものはなし。されどつねに別れやすきものは兄弟の間なり、別れやすくしてまたよく相逢ふものも兄弟の間なり。こゝに、義家の弟に、新羅三郎義光といへるあり。武勇にして謀あり、夙に左兵衛尉をつとめぬ。兄義家の、陸奥の戰利あらすときくや、胸躍りて、一時も安せず、みづから奏して、援に赴かんことをこへども、聽されず。義光おもひにたへす、遂に官を辭して、奥州に赴きぬ。さて義家の營に至り、將軍、夷に攻められて、危くおはしますよし承り、院に身の暇を賜りて、かくまかり下りて侍るといふ。義家、おもひかけざることなれば、そのさまを見て、まづおどろき、その意をきいて、いとよろこび、遂に流れ出づる涙に聲も打くもりて、今日足下の來り給へるは、故入道殿の生きかへりておはしたりとこそ覺ゆれ。君既に副將軍となりて、我を助けたまはゝ、武衡家衡等が首を得んこと、掌の中にありといひつゝ、兵を分ちて授けぬ。あはれ兄弟軍に從つて、先君の志を達せんとす、志のをゝしさは、更にもいはず、はる〳〵に、都より來り下れる、義光の心の中、おもひやるだにいと殊勝ならずや。兄の危急をきいては、おのが榮官をもすてゝ、同じ途にと志せる人の弟たるものゝ龜鑑といふべし。

この人少うして、音律を好み、嘗て笙を豐原時元に習ひ、その秘曲をも受け傳へたりき。京都出發の時、時元の子時秋、共に行かんとて、足拘山まで附き從ひぬ。義光思へらく、この山には關ありて、輙く人を通さず、我はもとより、命をなきものとすれば、研りやぶりて、通らんも憚りなし。御身は、これより かへりたまへといふ時秋、猶きかず、義光、時秋のおもふやうを悟りて、馬より下りて、柴を研り開いて、楯を敷き並べ、鞦より一紙の文書を取り出で、時秋に見せぬ。見れば、父時元が自筆にてかきたる、大食調入調の曲の譜なりけり。義光、笙はありやと問へば、候ふとて、懷よりとりいだす、時秋のこゝまで來れること、このためにぞあらんとて、即ち入調曲を吹き授けゝり。さて義光は、かゝる大事によりて、くだれば、身の安否知るべからず、萬が一、安穩ならば、都の見參を期すべし。貴殿は、豐原數代の樂工、朝家要須の家なり。

我に志をおほさば、速に歸洛して、道を全うせらるべしと、再三いひければ、理に折れて、別れぬ。かゝれば義光も、たゞに武藝のみに秀でたりしにあらず、義家に似てまた風流文雅の道にさへ、くらからざりしならん。

時に前軍既に進みて、戰ひ方に酣なり。我軍死傷頗る多し。中にも相摸の住人、鎌倉權五郎景政といふは、先祖以來豪膽のものなりけり。ことし僅に十六歳なれども、眞先に進みて、戰ふほどに、征矢にて右の目を射られ、首を貫きて、冑の鉢付の板に射付けられたり。されども、屈する色なく、答の矢を放つて、敵を射とりけるに、人々その勇を賞せざるはなし。かく苦戰をつめども、敵の城は、岸高く、壁のごとくにそばだちて、よりつくへくも見ゑず。

義家、將士を勵さんとて、剛臆の座といふを定めて、その日の戰ひ終ることに、剛のものは剛の座に、臆せるものは臆の座につかしむ。かゝれば、おの〳〵、臆の座にはつかじとはげみたゝかへども、日ごとに剛座につくものは少し。義光の從者、藤原季方といふは、一度も臆の座につかず、軍中、みなこれをほめぬものはなし。之にかはりて、末割惟弘といふものは、つねに、臆の座にのみつきければ、はては、矢の音に耳をふさぐ臆病ものなど、人に笑はれ興せらるゝに至りぬ。惟弘、之をいと心うしとや思ひけん、一日みづから奮つて、我が勇怯、今日に決せんと、衆に先ちて進みぬ、やう〳〵、奥入するほどに、矢あり、額に中りて死しぬ。人々あはれがりて、引きよせて見れば、瘡口より、食物こどごとく出たり。死にたる後までも、臆病のしるしを見せけるかな、と皆笑ふ。

義家之をきゝて、臆病ものゝ奮つて死せるものは、必かくのごとし。あはれむべきことなりといはる。かゝる事ありしより、義家の軍は、つねに百倍して、攻め戰へども、地の利を得ざるは、敗北の本となりて、更に動すべくも見ゑず。城中のありさまは、先に、頼義の貞任を取り圍まれしさまに似たり。かゝる難所を、強ひて攻め上りたらんも、何の益もなく、たゞ味方の死傷を增すのみ。今は、總軍にて之をとりまき、その糧道を絶つにまかずと、義家義光、將士に下知して、嚴に四方を圍む。かくて月日を經ぬ。

武衡城中より、使を義家のもとにつかはして、戰ひ止められて以來、徒然かぎりなし。手下に魁次といふ剛打なん侍る。御覽に入るべし、そなたよりも、さ

かるべき討手一人出し、ためしわはせ給へ、互に徒然をなぐさまばやといふ。義家、侮りたる彼かことかな、されどもいかで之に答へざらん、誰か彼かと求るに、次任が舎人に兩人鬼武といふものあり。心武く力あくまでつよし。これを選みて出す。龜次城中よりおり下る。二人闘の庭によりあへり。兩方の軍、目たゝきもせず見るに兩人已によりあひて、討ち合ふこと半時ばかり、互に透間ありとも見えず。今か〳〵と皆拳握らるゝに、龜次が長刀の先、志きりにあがるやうに見ゆるほどに、龜次甲冑着ながら、鬼武が長刀の先にかゝりて斬られにけり。義家の軍勢よろこびのときを作りて、謠ふ聲、天地を動かす。城中のものども、龜次が首をとられじと、鬨をならべて、かけ出づ。義家の軍勢は、また龜次が首をとりかへらんとて、おなじくかけ合ひぬ。かくて、互に入りみだれて、大合戰となりしが、城兵寡くして、ことごとく討ち取られぬ。これより城兵は、やう〳〵恐れをいたき、我軍はいよ〳〵勵みあへり。こゝに、家衡、千任といふをして、城の櫓に上らしめて、大音聲にて、義家にいはしむるやう、汝が父頼義、貞任宗任を討ち得ずして、名簿を捧げて、故清將軍（家衡の祖父武衡が事）を語らひたてまつり、偏にその力にて、たま〳〵貞任を討ち得たり。恩を荷ひ、德を戴きて、いづれの世にか、報い奉るべき。然るを、汝已に相傳の家人として。辱くも重恩の君を賣め奉る、不忠不義の罪、さだめて天道の責を蒙らんといふ。兵士ども、之を聞きて、その肉を喰はんばかりにふるひたてば、義家、これを制して、やう〳〵に止められたり。心は剛にはやれども、食つきては、何事をかなさん。いかに、地の利を得たりとも、人恨みては何かせん、義家は、兵を收めて、たゞ城中の糧盡きなん時を待るゝに、城兵どもは、やう〳〵困みぬ。されども、討て出づべき勢ひもなく、この處をおきて、他によるべき要害もなし。まことや、家衡武衡等がつよきは、その軍勢のつよきにあらず、たゞ要害によれるのみなり。いかに要害によれりとも、糧なくてはいかゞはせん。されば、しば〳〵戰を挑めども、義家は、ことさらに之に應せず、はては矢をだにも射すして、唯遠巻にまかせおきつ。そも〳〵、義家の兵糧攻の策をもちゐられしは、いかなる故か。曠日持久、兵士の無事に苦しむことも、もとより知られたらん。且いかに要害なればとて、

神の如き義家、何ぞ之を覆すことのならざる。然るに、事の此に出でざるは、大にゆゑあり。凡そ戰ひおこりてより、朝廷は更に援兵をも出されず、又正當の戰ひとも認められざるがごとし。さらば、急に之を攻めて、あたら兵士を傷ひ、或は殺しなば、代り來るものあらざらん。且功を立てゝ、死にたりとも、天下これを知るものなからん。されども、敵は貞任等が餘黨なり。一たび戰端を開きて、止むへくもあらず。此に於ては、つとめて、兵士を傷つけず、たとひ、その役は長きにわたるとも、我を損せずして、彼を平ぐる外なし。されは徒に、兵を無事に苦しむることの、不都合なるは、知り居られしかど、その傷つき、その死せんことのいとほしさを、深くはかりて、この策は用ゐられしならん。後三年軍記によるに、この戰の張本人なり。上りしものなり、さて秀武は、眞衡の敵にして、實にこの戰の張本人なり。いづのまに降りしか。又金澤攝昭清衡は義家に屬せり。これも、本は敵なりしなるとき、本書脫漏多くして、眞事つたはらず。くちなし。果せるかな、敵はいたくよわりて、要害に籠れりといふことのみこそあれ、戰はざれば、要害、更にその功をなさず。さりとて、守り怠るへくもあらず。徒に劍を磨き、簇を研くとも、糧つきては、力拔け、腕おとろへて、やう〳〵背くものさへあるにいたりぬ。

中にも、その妻、その妾などいはれしものは、泣きわめきて、かゝるくるしきめを見んより、殺したまはれなど叫ぶ。この聲をきゝ、この歎きを見る、武衡家衡、いかに心を鬼に爲すとも、忍び得べけんや。おのれは自殺せんとは、たびゝ、おもひしならんも、さては多くのものども、皆敵の虜とならん。さりとて、出て戰はゞ、忽に敗れんこと見るがごとし、あはれいかにせんと、さすがに大將の心くるしく、遂に降らんと思ひさだめぬ。

飢に泣き、寒に叫ふ、妻子をおしのけて、武衡は、心しれる將士、二三名をよびて、思ふむねをかたる。依りて使者をめしよせて、汝城を出でゝ、敵營に至り、義光の陣につきて、具にことのさまをいへといふ。使者つゝしみて退き、出てゝ、このよしをいふ。義光、直に義家に告ぐ、義家、その請をいれず。使者空しくかへる。武衡大になげき、更に使して、願くは、義光將軍、わが城中に來りたまへ、その御供に參りなば、さりとも助かりなんと、懇にいふ。義光、また義家にはかる。義家いはく、むかしより今に至るまで、大將次將の敵によばれて、敵へゆく事は、未だ聞かず。若し武衡家衡にとりこめられなば、我百

たび悔い、千たび悔ゆとも、何のかひかあらん。誹を萬代の後にのこし、嗤を千里の外に招かん。ゆめ〳〵行くべからず、と戒めらる。使者また空しくかへる。武衡また使して、將軍わたりたまふこと叶はずば、御使一人をだにつかはしたまへ。されば、おもふことよく〳〵申し開かんといふ。三たびまで使をつかはしたる、心のほどもおもひやらるれば、義光、即、郎等どもの中より、誰よけんなど沙汰せらる。時に皆季方こそ、雙ひなき武勇のものなれ。彼よかるべしといふ。季方はこの名譽の職にえらばれて、今や城中に行かんとす。四方に使して、君命をはづかしめざるは、難きわざながら、また名譽の職なり。季方が將軍の命を受けて、敵の城中に、ひとりすゝみゆく、心のほどをおもふに、悲しくもまた勇し。何をか悲しといふ。この行、季方は、はやく死を決せしならん。命を受けし時は、已に死すべき時と思ひしならん。これ悲しきことなり。何をか勇しといふ。大勢の中より、おのれひとりえらび出されて。さしもの難き城中に使するは、勇者にあらざれば能はず。季方、今その選にあたれり、誰か之を勇しといはんみづからもいかでいさましとおもはざらん。

けふは、朝より天氣いとあやしく、晴み曇りみ定めなきに、敵の心さへ知られず。義光は。季方を近くめしよせて、謹みて怠ることなかれ、とのみいはるゝに、季方は、涙をふるひて退き、やがて、敵の使人と共に、城中へ行きけり。赤色の狩襖に無紋の袴を穿ち、太刀一振はきて出たちたるさま、つねよりは一しほをいしと見ゆ。城戸すこしばかり開きて、儘に入れられたれば、已に囚人のやうなるおもひせり。季方は、心を剛にして、おそるゝ色もなく、兵士の弓矢刀劍を、林のごとく立てゝ守れる中を、横目もふらす、たゞ進みに進みて、奥に入りぬ。武衡、これを居間ちかく招き入れて、懇にもてなす。さてさま〳〵に、詞をつくして、抂けてこたびばかりは、助けさせたまへといふ。且我もと將軍に恨あるにあらず、たゞ眞衡をこそ、にくしとおもへ。いかでか、官軍に仇せんとはすらん。されど、今に及びて、かゝることをいはんも、詮なければ、たゞこの上は、とにもかくにも、命のみ助けたまはれといふ。季方、おもひの外の奴なりと見侮りて、剛勇の心、いよ〳〵募り、急に返事をだにもせず。武衡、侍人をして、あまたの金銀財寶をとり出さしめ、之を季方に捧げて、いろ

〳〵に、機嫌とる。季方、あざわらひて、城中の財物は今給はらずとも、殿原たち日ならずおちたまはゞ、おのづから我等が物となるべし。且この城を、とりかこみしは、我一人の力ならねば、一人して、こをうけんも、本意なしといふ。武衡は、はじめより、季方が氣に呑れて、更に返さんことはもなく、次の間に行きて、大なる矢をとりいでゝ、この矢は、誰人の矢にて候ひしぞ。この矢來ることに、必射られぬものなし。おそろしき弓勢の人とおぼゆれば、その名きゝおきたしといふ。季方、あなはづかし、これこそ拙者が矢に候へといふ。武衡、いよ〳〵おそる。さて侍女どもに命じて、盃とり出させんとするに、日もやう〳〵下りて、定めなき空の心もとなければ、今はかへりなん、もしも我を質にとらんとおぼさば、此にていかにもしたまへ。罷り出てん道にて、兵士どもにとられんは、いとわろかるべきなりといふ。武衡、なでふさることあらん、たゞとく〳〵かへりたまひて、能く〳〵申したまはれといふ。季方一禮して退く。さて先の道をとほるに、兵士とも、あれをたゞにかへさせたまふにや、などつぶやく。季方は、左右をにらみつゝ、太刀の拵に手をかけて、一足二足と歩み出けり。さて義光の陣にかへり來て、まか〳〵と申す。さらぬたに、勇武の譽高き季方、これよりその名、敵味方の中にひゞきて、貴びあがめぬものはなく、義家も、さても頼みかひある武士かな、と褒めたまふ。先の鬼武が武功といひ、今この季方が事といひ、げに名將の下には、凡夫は從はざるものと見えたり。

武衡は、かく心をつくしゝかども、いかで聞きいれられん、月を重ねても、和せんけしきもなし。冬にもやう〳〵及びしかば、寒さは一しほなるに、食さへかつ〳〵盡きぬれば、城兵は凍え死ぬるあり、飢ゑ死にするあり、今はかうまでと見ゆるに、たま〳〵一方の口の開けたる處より、下婢小童ども、遁け降る。義家はじめのほどは、そのまゝにしたりしが、漸々多くならんさまなれば、ことゴとく之を斬り殺す。（こも秀武が建議なりと本書にはいへり。）されば、降りても助からず、といふことと分りにければ、城兵ども、寧粮のかぎりくひて死なんと思ひさだめぬ。

義家の軍兵も、飢ゑこそせざりけれ、馴れざる寒さに、死なんばかりなりけれ

は、一日も早く城を攻めとらんとのみいふ。義家、ある夜、藤原資道を坐ちかくめしよせて、いはるゝやう、（資道は淺家につかへて、つれに坐右にありし少年なり）兵士ども、いかに寒からん、今は陣屋も用なし、火をかけて、皆寒さをいやせ、といへ、といはるゝに、資道走りて、是を告げわたる。兵士ども、何事ともさらざれども、君の命なり、定めて策あらんとて、悉く火をかけゝり。さて手足どもあぶりける。に、やう〳〵、人心つきぬ。時に寛治五年十一月十四日なり。曉がたとおもふに、城中俄に火おこりて、泣き叫ぶ聲、地獄もかくやとおもはる。兵士ども、あれ見よ、城は、はや落ちにけるよ。將軍の明はげに神のごとし。いでや、この寒さわすれに、戰ひくれんと、四方にみだれて、遁け行くものどもを、或は斬り或は生捕るに、遁るゝものとては見えず。武衡は、のがれて、城中の池に身を投じ、くさむらのかげより、顔のみを出したりけるを、兵士見つけて、生捕にす。また千任もとられぬ。家衡は花柑子といふ馬を持ちたりけるが、六郡第一のものとて、つねに愛せしこと、妻子に過ぎたりき。されば、運つきたりとも、敵に乘られんことの、いとねたければ、みづからこれを射殺して、賤しき下種のまねして、遁げ落ちぬ。」男の首は鉾にさゝれて先に行き、女は涙を流して後より行く。これぞとの落城の時のさまなりける。

義家、武衡を前にひかせて、軍の道、勢をかりて、敵をうつは、昔も今も定れる習ひなり。武則、且は官府の旨にまかせ、且は將軍の(頼義)語らひによりて、味方に加はれり。さるを、汝家衡と共に、千任にをしへて、名簿あるよし申しゝは、汝必傳へつらん。速に取り出すべし。武則夷の賤しき名をもちて、辱も鎮守府將軍の名を汚せり。これ將軍の申し行はれしによりてなり。已に功勞をむくいしにあらずや。況や汝等は、其身に聊の功もなくして、謀反を事とす、何によりて助くべき。ことに、濫りがはしく、重恩の主と名のりし、その心たしかに辨へ申せと、責めらる。武衡、頭を地につけて、敢て目をもたげず、泣く〳〵、一日の命を助けたまはれといふ。義家大宅光房におほせて、斬らしめんとするに、武衡、義光を見下げながら、兵衛殿、助けたまはれといふ。義光、義家にむかひて、降人をなだむるは、古今の例なり。この武衡一人をころさすとも、さしたることもあるへからずといへば、義家、爪はじきをしかけて、降人といふは、みづから咎を悔いて來る、宗任等のごときものをこそいへ、これは戰場に生捕にせられて、片時の命をゝしむ、かゝるもの助けたりとて、何のためにかならんと、直に命して、頸をうたしむ。

次に千任をひきて、汝先日櫓に上りて。高言せしこと、おぼえあらば、今一たび申せといはるゝに、これも頭をたれて、ものもいはず、その舌を斬れと命ぜらるれば、兵士、箙より金箸を取り出して、強ひて千任が口を破り、そを引き出して、斬りころしつ。今は城ども灰燼となりて、人馬の燒け亡びたるさま、麻をみだせるがごとし。義家は、家衡が首を見ざるがくちをしと、齒がみせらるゝに、兵ども、皆手をわけてさがす。こゝに縣小次郎次任といふものあり。當國に名だかき兵なり。城中のものどもの遁げ去らん道を知りて、はやくより、堅めたり。されば、戰場をばのがれしも、此にて討れしものも、多かりけり。その中に、家衡は、下種のまねして出來るを、次任見しりて、打ちころす。さて首きりて、義家の前に持ち來ぬ。義家、よろこびの眉ひらけて、さても〳〵、いみじき手がらかなと、みづから、紅の衣とりて、次任にかづけ、又上馬一匹に鞍おきて、引せられぬ。かくて、その黨四十八人の首をことく〳〵く陣營の前に梟す。亂はじめて平ぎぬ。世に貞任等の亂を、前九年の役といひ、これを後

三年の役といふ。

義家、即ち、解文を朝廷に上りて、武衡家衡等が謀反、貞任宗任に過ぎたると、今私の力を以て、たまたま討ち平ぐることを得たり。はやく追討の宣符を賜はり、首を京師に上らんと申す。朝議、これを私闘となして、官符を下されず、その功をも賞せられず。義家、強ひて之をこはず、その首を道に捨てゝ、むなしく京都へ上りぬ。

そも〳〵義家のこの役は、決して容易なりしことにはあらざりき。ある時は、兵利なくして、危き淵に陥りしこともあらん。股肱とたのみし士卒のはかなく命をおとしゝこともあらん。雪に埋れて死にたるものもあらん。暑さになつみて心を失ひしものもあらん。その艱難、その困苦、いかでか筆にはつくしえん。義家はかばかり苦しきを堪へ、悲しきを忍びて、三年にあまれる長日月を、この役に費しゝは、いかなる故か。これを滅さざれば、王威を普く被らしむること能はず、とおもはれたればならん。貞任宗任にもまさりたる反謀人と、信ぜられたればならん、故頼義のむかしをさへ、忍び出られたればならん。さらば何故に官兵をも乞はざるか。先づ手兵を以てし、さて成らざるときに、とおもはれしならん。こゝをもて、官符をも待すして、直に討向はれしなり。また事急にして京師に上言せん暇なかりしにもあるべし。義家の心、戰ひ勝ちて後は、公の符を賜はりて、將士どもの勸賞をも行はん、とおもはれしならん。然るに今朝議これを私闘となして、更に符をも下されざるは、いかに腸も裂くるばかりの思ひありしならん。先には義家の名聲朝廷をふるはしたるに、何ぞ今はこの請ひをいれざる、君の聰明を遮りしものの來しか、あはれあなあはれ。

義家は、これを憤りたにもせず、敢て恨める色もなく、その賊首を、道にすてゝ、心平らに上京せる、その心の雄大なる、この人にあらざれば、いかでかさからん。蓋義家の心中には、國亂だに治らば、たとひおのが言用ゐられずとも足れり、と思はれしならん。君子の人とは、かゝる人をこそいふべけれ。一旦おのがこと通らで、事を敗り世をみだしたるもの、古今幾人ぞ。義家その轍に倣はす、務むべきを務めて、事私に及ばず。實に文武兼備忠孝兩全の大丈夫と

いふべきなり。おもへば、人貴ひて、八幡殿といひしも、宜ならずや。

義家、左近衛將監、撿非違使、左衛門尉、左馬權頭、河内、相模、武藏、信濃、下野、伊豫等の守に歷任して、正四位下に叙せらる。嘉承元年病によりて剃髪し、天仁元年卒す。年六十八なり。あはれ紫のゆかりやう〳〵色さめて、鎌倉山に名のり出けん、郭公の聲と共に、世は白旗の靡かぬ隈なきに至りしは、時運のおからしめしものとはいへ、またこの君の力にあらずや。

二　宇治川　佐々木高綱の事蹟

おのれ十二三の時、母の膝下にありて、源平盛衰記をよみたり。そのおもしろきところ〳〵今猶記臆してわすれず。こゝに心に感ぜしは、佐々木四郎高綱の宇治川の先陣と、那須與一宗高の屋島浦の功名となり。はじめのほどは、たいおもしろうのみ思ひしが、たび〳〵よみしに、後にはいさましうおぼゆるやうなりたり。猶たび〳〵よみしに、遂には、その人の心のうちなど思ひやられて、あはれにかなしうおぼゆるやうなりたり。あはれ、世の人、この傳記をよみ、おもしろしといはむには、いまだ高綱と宗高との心事を知りしものといふべからず。あはれ、世の人この傳記をよみ、いさましといはむには、またいまだ高綱と宗高との心事を知りしものといふべからず、あはれ、世の人、この傳記をよまば、あはれと思へ、かなしと思へ、かくて涙をそゝぐにいたり、はじめて、高綱と宗高との心事を知り得しものといふべからむ。

かの壽永元暦のむかし、木曾義仲都にありて、種種の狼藉をなしけるに、院を

はじめまつり、人々皆やすき心もなかりけり。このこと鎌倉にきこえしに、頼朝いたくその不禮を怒り、弟なる蒲冠者範頼、九郎判官義經の二人を大將として、數萬騎の兵をひきゐて、攻めのぼらしむる事となれり。時に、鎌倉殿の侍所にて、種々の評定ありけるが、そのおもなるものは、大河を前にゐて、兵を落さむことゆゝしき大事なりといふことなり。都に近き近江の國には、勢多橋あり。その流れの末には、宇治橋あり。この二橋は、都へ攻めのぼるには、きわめて難所なり。敵まづ橋を落さむか、その川の底ふかくして、流はやし。なべての馬の、よく渡るべきところにあらず。ちかのみならず、その川に、亂杭、逆茂木などうち、またその底に大綱など張りながさむ。かくてはいよ〳〵なべての馬の、よく渡るべきところにあらず、ただびの出陣には、たれも〳〵瓦馬をものして、宇治勢多をうちわたり、以て高名あるべしと議せられけり。かゝりければ、人々皆名馬を撰び、それに鞍おきて馳せわつまれり。磯といふ馬をひかせて參りけるは、上總國住人介八郎廣常なり。薄櫻といふ馬をひかせて參りけるは、下總國住人千葉介常胤なり。目糟毛馬とて引きけるは、武藏國の住人平山武者所季重なり。獅子丸とて引きけるは、同國澁谷莊司重國なり。秩父鹿毛大黒人妻高山葦毛とて引きけるは、畠山莊司次郎重忠なり。鴨上毛白浪とて引きけるは、相模國住人三浦和田小太郎義盛なり。荒磯とて引きけるは、伊豆國住人北條四郎時政なり。權太栗毛とて引きけるは、熊谷次郎直實なり。かくて大將軍蒲冠者範頼の馬はいかに。薄墨青海波といふ名馬なり。一霞月輪といふ名馬なり。かくてまた大將軍九郎判官義經の馬はいかに。權太栗毛といひ、荒磯といひ、鴨上毛白浪といひ、秩父鹿毛月輪はさらなり。薄墨青海波一霞大黒人妻高山葦毛といひ、獅子丸といひ、目糟毛馬といひ、薄櫻といひ、磯といひ、いづれもいみじき名馬にて、強き事は獅子のごとく、はやきことは吹く風のごとく。利根川、富士川、天龍川、大井川など、大河を渡しい馬どもなり。宇治なにかあらむ。勢多またなにかあらむ。いづれもいさみたけりて、嘶きかはしたるその聲、雲井にひびきていとたかし。

廣常といひ、常胤といひ、季重といひ、重國といひ、重忠といひ、義盛といひ、時政といひ、直實といひ、皆一騎當千の勇士なり。かゝる時に、拔群の功名手

柄して、鎌倉殿の御賞感にあつからむと思へり。さてこそいづれも名馬をうち撰び、それにうち跨りて駈けきたれるなれ。こたびの功名手柄の第一は、そもそもなに事なるか。いはでもあきらかならむ。宇治川の先陣なることは、その功名手柄は、いかなる人が得るならむ。直實か、時政か、義盛か、重忠か、はたまた常胤か、廣常か。

こゝに梶原源太景季といふ勇士あり。いかにもして、宇治川の先陣をなさむとおもひしが、かなはぬことあり。かなはぬこととはいかに。名馬のなきことなり。きくところによれば。廣常は磯にのり、常胤は薄櫻、季重は目糟毛馬、重國は獅子丸、重忠は秩父鹿毛大黒人妻高山葦毛、義盛は鴨上毛白溟、時政は荒磯、直實は權太栗毛に乗りたりとぞ。いづれも名馬のきこえあり。なみ〳〵の馬に乗りたらむには、かの先陣はむづかしからむ。みる〳〵先陣を人にゆづらむか、そのくちをしさいかゝあらむ。さはいへすべきやうもなし。いかにせむと、とかく思ひわづらふほどに、出陣の日も近づきぬ。景季の心ぐるしさいかにぞや。

をりふし鎌倉殿に秘藏の名馬二匹あり。一を生喰といひ、一を磨墨といふ、いづれも陸奥國の產にしてたぐひまれなる名馬なり。景季、鎌倉殿の御前に參り、君もきろしめさるゝことならむ。弓矢とる身の敵にむかふ習は、名馬にすぎたるはなし、名馬に乘りぬれば、いかなる川もたゝわたりにわたりはべらむ。いかなる山もたゝ越えに越えはべらむ。さるをいかなる勇士といへども、乘りたる馬のよわからむには、死ぬべからざるところに死に、生くべきところに生きかね、なかき耻をも見ることにはべり。景季不肖ながら、こたび宇治川の先陣つかまつり、木曾殿を傾けまつらむと思へり。はゝかりおほきことにはべれど、君が朝夕愛し給ふ生喰を賜へとまをす。景季の鎌倉殿にかくねがひしは、かりそめに思ひ出てし事にはあらざるべし。いくそたび、いくたび思ひ考へたる上のことにてあるなるべし。なにとなれば、そのねがひはゆるしがたしとあらむには、景季の身の耻辱はいかばかりならむ。たとひ先陣をなしとげたりとも、その耻辱はすゝくことかたかりしならむ。さるあやうきねがひなり、そをねがひし心はいかに。必ずや思ひきはめし上にてありしならむ。ゆるしがたし

とあらば、太刀ひきぬかむと思ひしならむ。ゆるしがたしとあらば、腹かききらむと思ひしならむ。この時にあたり景季に向ひ、鎌倉殿のおほせはいかに。答はいかに。

鎌倉殿、土肥の杉山にかくれ給ひし時、そを助けまつりしは、たれなるか。梶原平三景時なり。景季は、景時が子なり。鎌倉殿の世に出で給ひしは、景時の恩なり。その恩ある人の子なり。その子のねがひなり。ゆるしがたしといふことを得べきか。そも他の事ならむには、ともかくも、わがために先陣をなし、わかために敵を破り、以て功名手柄せむとなり。いはゞ忠義の心より出てたるねがひなり。そのねがひに對して、ゆるしがたしといふことを得べきか。

こたびの出陣にあたり、生喉を所望せしものすくなからず。鎌倉殿には、いづれも皆ゆるし給はず。まかるに景季にゆるさむか。他の諸將のいきどほりいかばかりならむ。おなじ臣下なり。かれにゆるさず、これにゆるすとせむか、そは大將たるものゝなすべきことにあらず。さるを今景季にむかひ、汝のねがひゆるすべしといふことを得べきか。そも他の諸將のみならむにはともかくも、その所望せし人々の中には、こたびの大將軍蒲冠者範頼のありしにあらずや。範頼は血をわけたる弟なり。その弟のこひもとめたるにもかゝはらず、猶與へざりしにあらずや。さるを今景季にむかひ、汝のねがひゆるすべしといふことを得べきか。

ゆるすとせむか、他の諸將をいかにかせむ、諸將はよし、弟範頼をいかにかせむ。ゆるさずとせむか、梶原の恩義をいかにかせむ。その恩義はよしとするも、わがために忠義をつくさむとする勇士に對する道にあらざるをいかにせむ。この時にあたり、景季にむかひ、鎌倉殿のおほせはいかに。答はいかに。

鎌倉殿やゝ久しう案じ給ひしに、景季、猶すゝみて、その答をもとめければ、とかく猶豫すべきことにあらじとおぼして、景季よくうけたまはれ、この馬を範頼ひたすらこひもとめたり。されば、大名小名八箇國のものども、内外につけて所望ありしなり。就中、蒲冠者追討のため、東國の軍兵、大かた上洛せむとす。平家と木曾と一となりて、大なる騒にもならむには、この頼朝も赴かざるべからず、その時の料にとて、賜

はざりしなり。されど、汝の願、ゆるさずといふべきにあらず、さては磨墨をとらすべし、それにうち乗りて行けとの給ふ。磨墨は生喰にこそおよばれ、またきはめて名馬なり。景季の身にとりてなに不足あらむ。たゞ君のあつきなさけに感じ、笑をふくみて罷り出つ。かくて黒漆の鞍をおき、それにうちまたがり、舎人あまたにひかせて、出で立てるそのさま、いかにいさましき事どもならむ。

あくる日の辰の時ばかり、近江國住人佐々木四郎高綱、鎌倉殿の館にまゐり、なにかものまをさむといへり。鎌倉殿御座ちかう召させ給ひて、いかに高綱、そなたは、近江國にあれば、直に京へ上るべしと思ひしに、いつ下向はなしたりしぞと問はせ給ふ。高綱、その事にはべり、去年十月のころより、近江なる佐々木荘にまかりあり、こたびの出陣につきては、直に攻めのぼるべきに、軍のならひ、命を君にたてまつりて、戰場に出つることにしあれば、再び歸参すべしとも存ずべきにあらず。さては今一たび見参にも入れ、御暇をもまをさむとて、いそぎて、この鎌倉には下りはべりとまをす。鎌倉殿いたくよろこび給ひて、そは今にはじめぬ志、神妙々々とありけるに、高綱膝をすゝめ、時に一匹もちはべりつる馬馳せ損しぬ。人々ははや出陣しはべりとうけ給はりぬ。さりとてたれに馬こはむといふすべもはべらず、この一事いと心ぐるしうとのべけるに、鎌倉殿、そはともかくもなりぬべし、たゞ木曾の兵どもさだめて宇治勢多の橋などひき落したらむ。宇治川の先陣あたされなむやとありければ、高綱、それがしは近江生立のものにてはべり。ほど近きかの宇治川、深さ淺さはさらなり、淵瀬までもよく知りはべり、彼手にうち向はゞ、必ずや先陣つかまつらむとまをす。鎌倉殿、去にし治承四年の八月の下つかた、石橋山の合戰に大庭三郎に追ひ落され、ほと〳〵遁れがたかりしを、汝兄弟返り合ひて、ふせぎ矢射て、この頼朝の命を助けられき。そのをりは、この日本半分とこそ思ひしかども、世いまだをさまらねば、その志に酬ゆる能はず。こたび宇治川の先陣して高名手柄し給へ、必ずよきにはからふべしとて、かの秘藏に秘藏し給へる生喰を、ひき出してとらせ給ふ。高綱、今生の大恩、希代の面目、家門の勝事、なに事かこれに如くべきと思ひたらむ、たゞかたじけなしといひて、ひれ

伏しぬ、志ばしありて、さらば御暇つかまつらむとて、立ち出でむとしけるに、鎌倉殿座を立ち給ひて、高綱よくうけたまはれ、その馬所望の人あまたありつる中に、弟範頼もとひたり、ことに景季は直参して、ひたすらこひたりしかども猶與へざりしなり。そのこゝろしてよとおほせられぬ。高綱あまりのありがたさに、また座にかへり、それまでこの高綱をいつくしみ給ふか。宇治川の先陣必ずつかまつるべし。高綱、軍以前に死すときこしめさば。先陣ははや人に渡されたりと思召せ。若し戰場にて、存命ときこしめさば、宇治川の先陣は高綱渡したりと思召せ。申しおくべきことはこれのみにはべりとて、再び立ちて、かの馬に跨りぬ。この時の高綱のよろこばしさはいかに。この時の高綱のうれしさはいかに。必ずやうれしさつきよろこばしさきはまりて、涙の玉をちらしゝならむ。

千木高き鶴が岡の八幡宮を馬上ながら伏しをがみ、さて、由井が濱に出でけるに、諸將は、夜のうちに鎌倉を出で立ちたりといふ。後れにけりと思ひて、稲村、腰越、片瀬川、砥上原、八松原など馳せ過ぎて、相模川をうちわたり、大磯、小磯、酒勾、湯本、足柄など越え過ぎて、いそぎにいそぐほどに、その日のうちに黄瀬河宿につきぬ。鎌倉より黄瀬河宿まで二日路なり。それを一日にて

つきたるを見れば、そのいそぎしさま、知らるべし。こゝにつきてたづねしに、諸將皆浮島原に扣へたりといふ。ころは正月の十日なり。富士の裾野のみ雪とけそめて、富士の川水うちまさり、たやすく渡るべきやうもなし。九郎判官義經、衆にうち向ひて、いかゝすべきとの給へば、口々に申すやう、宇治勢多を渡さむためしに、馬筏を組みて渡されなば如何と申す。蒲冠者範頼、そは土肥次郎にこそはからはめとて、そを召して問はず。實平、この川は渚近くして、水のはやきこと、征矢をつくよりも猶早し。一引も引落されなば、馬も人も助るべからず。明日水に心得たらむ者を以て、瀨踏せさせて、まづかに渡すべきなりと申す。範頼義經の二大將をはじめ、皆この議然るべしとて、兵といふ兵のかぎり、雲霞の如く、その川の邊に下り居たり。こゝに梶原源太景季、わが乘る磨墨にまさる馬もやあると、大名の中をめぐりて見るに、九郎判官殿の青海波七寸、蒲冠者殿の月輪七寸二分、和田の白浪七寸五分、畠山の秩父鹿毛七寸八分、これ等をはじめとして、大名小名おのゝ〳〵五十、四十、三十、四、あるは十、四、五、四ひかせたり。されど磨墨にまさる馬なし。たゝにまさるものなきのみならず、それになずらふべき馬もなし。景季小高きところにのぼり、ひきまはし、ひきまはし、いたく愛で居たり。村山黨の大將に、金子十郎家忠といふあり。をりふしこゝを通りけるが、景季招きよせて、いかに金子殿、この馬を御覽せよといふに、家忠うち見て、こは鎌倉殿の磨墨よな、かほどの馬をばよしともあしともいふべきことならず、たゞかゝる馬を賜りたる御邊こそうらやましうはべれといへり。景季いかにうれしかりけむ、小櫻を黄にかへしたる鎧に、大刀一振そへて引きてけり。をりしもあれ、遙けきあなたに馬の嘶く聲す。畠山重忠耳すましてきゝ居たりけるが、こはいかに生唼が鳴聲なり。何人か賜はりてゐて來たるらむといふに、半澤六郎傍にありて、これほどの大勢の中に數千匹の名馬どもおほくはべり、生唼ならで他の馬にてはべらむ。かの生唼は、蒲冠者殿、梶原なと申しこはれけれども、御ゆるしなしとうけたまはりぬ。さるを誰にかまた賜ふことのあらむといへば、重忠、人に賜ひ賜はずはしらず、まさしく生唼が聲なり。只今思ひ合せよといひもはてぬに、東の方より黄覆輪の鞍おきたるに、白き轡、二引兩の手綱結びて、舍人六人してうちひきて來る馬あ

り、見ればまかふ方なき生喰なりけり、人々皆あやしむ。鎌倉殿には誰に賜ひたるならむ。誰がそを賜はりたるならむ。いといぶかしきとにこそとて、皆生喰に目をそゝぎたり。生喰は、いかに名馬といへども、馬は馬なり。さるをかくまで人々に思はるゝは、生喰そのものゝためには、實にいふべからざる名譽ならむ。汝、生喰、汝は鎌倉殿の秘藏の馬なり。沛冠者殿もこひ給へり。梶原源太景季もこへり。されど與へ給はざりしなり。さるをこたび高綱に賜ひ、その高綱につきてこゝに來れり。高綱に乘らるゝをよろこぶか。はたよろこばざるか。生喰いかに。生喰いかに。人にあらねば、その心のほどは知りがたけれど、萠えそめたる春の若草をふみしたき、いさみたけりて、三聲四聲嘶きたるは、大かた高綱その人に乘らるゝをよろこびてならむ。

景季、生喰の通るを見て、沛殿の賜はりしか。九郎殿の賜はりしか。はたよき序とて院へまゐらせらるゝならむか。いづれにてもあらむとて、郎等して、その馬は何方へまゐり、いかなる人の馬ぞと問はす。舍人、こは佐々木殿の御馬と申す。佐々木とは誰ぞ、三郎殿か四郎殿かと問ふ。四郎殿の御馬と答ふ。景季かくときくや、俄にけしきを變へ、そは又口借きことにこそ、景季再三所望申しつるに、御ゆるしなき馬を、高綱に賜ひける事のくやしさよ。佐々木に賜ふ

ほどならは、前の所望なり。景季に賜ふべし。景季に賜はぬほどならば、後の所望なり。高綱に賜ふべからず。大將軍たる人の、源平の大事を前にかゝへ、かゝる偏頗をし給ふはいかにぞや、これほどの氣色にては、行末たのもしからず、思へば電光朝露のことし。いつ死なむもおなじき事ならむ、佐々木に宿意はなけれど、時にとりての敵なり。かれとひき組みて、さし違ひ、一騎當千の、われ〳〵、死して以て鎌倉殿に大損とらせまつらむ、高綱何處と目をくばりてありしに、十七騎はかりしてかなたより來れり。景季、磨墨にうち跨り、今にも組みつかむとするさまなりしが、高綱はやくも之を見て、かしこなるは梶原源太景季と覺えたり。馬の立てやう、人を待つやう、たゝ事とは見えず。生喉ゆゑにこの高綱に組まむと思ふならむ。鎌倉殿の心せよとの給ひしはこの事にこそ。とまれうち通らむとて、通りけるに、景季、つと近つきて、いかに佐々木殿、かの御馬は鎌倉殿より賜はりしものなるか、といふもあわたゝし。高綱うち笑ひて、否さにあらず。こたび御暇申さむとて、わざ〳〵鎌倉へ馳せ下りしに、みちにて乘りたる馬損じぬ。すべきやうもあらざりけれは、御庇の馬一匹賜はらむものと、内々うかゝひしに、磨墨ははや御邊に賜ひたるよし、生喉は御邊も蒲殿も再三御所望ありけれども、御ゆるしなしとうけたまはりぬ。さては高綱ごときに賜ふことなどはあるべしとも思はれず。さりとて馬なくてはかなはじ。よし、こたびの軍は君の御大事なり。後の御勘當はともあれかくもあれ、盗みて乘らむとて、御庇の小平次に心を入れ、夜のまぎれに引き出してけり。こゝまで來れとも、あとおふものやあらむと心もとなし。もし御勘當もあらむときはよきにといひけるに、景季はじめて心とけ、おのれも盗むべかりしものを、といひさしてやみぬ。いかにくやしかりけむ。

大手、搦手、尾張國熱田社より相別れて、宇治勢多へ向ひけり。大手の大將軍は蒲冠者範頼なり。搦手の大將軍は九郎判官義經なり。範頼は三萬餘騎にて近江國勢多長橋に向ひ、義經は二萬五千餘騎にて伊勢路をへて宇治に向ふ。かくて景季はいづれの手にかつきたる。高綱はまたいづれの手にかつきたる。共に義經の手につきたり。木曽義仲、範頼義經の攻めのぼるときゝて、今井四郎兼平を勢多につかはし、根井大彌太行親を宇治につかはして、そを防がしむ。正

月廿日元暦元年大手、搦手、宇治勢多につきぬ。義經川原に出て給ひて、見わたし給ふに、敵はや橋板を破り、向の岸には楯どもうちならべ、櫓など搆へたり、水はふかさまさりて底見えず。その上、亂抗逆茂木などひまなくうち、大綱小綱張りながしたれば、水島といへどもくくり通るべくもなかりけり。義經、急に高櫓をつくらせ、その上にのぼり給ひ、矢立の硯をとりよせ、宇治川の先陣と剛者とを、次第あきらかにしるして、鎌倉殿の見參にいれむといはれけるに、軍兵皆ふるひたちて、われこそ功名手柄せめとどよめきあへり。時に馬より飛ひ下りて、橋桁の上に走りのぼるものあり。弓杖をつきて、大音あけ、二萬五千騎のそのうちに、橋桁先陣渡は、武藏國の住人平山武者所季重とよばゝりけり。それにつゞきたるものは、佐々木太郎定綱、滋谷右馬允重助、熊谷次郎直實、子息小次郎直家なり。矢ごろもちかくなりしかば、向の岸の軍兵、弓をひき放つこと雨のごとし。まばし時をおくれとも、いまだ川をわたすものなかりければいかゞあるべきと、評定さま〳〵なりけるに、畠山庄司次郎重忠進み出でゝ申しけるは、この川は、近江湖の末、今始めて出て來たる川にあらず、春たつ日影のならひ、細谷川の氷とけ、比良の高ねの雪消え、水かさまさるとも、減ることあるべからず。この事は鎌倉殿の御前にても評定のありしことにて、今驚くべきことにあらず、かねて馬の用意せしはこの事なり、いで重忠わたして見參にいれむといふところに、平等院の艮の隅、橋の小島崎より武者二騎かけ出たり。その人は誰ぞ。一は梶原源太景季、一は佐々木四郎高綱なり。景季か裝束は、木蘭地の直垂に、黑革威の鎧に、三枚兜の緒をしめ、滋藤の弓の中をとり、十四差したる小中黑の矢を負ひ、練鍔の太刀をはき鎌倉殿より賜はりたる磨墨といふ名馬に、黑塗の鞍おきて乘りたり。高綱の裝束は、褐の直垂に、小櫻を黃にかへしたる鎧に、鍬形うちたる兜に、笛籐弓の真中とり、二十四差したる石打の征矢頭高に負ひ、嗔物造の太刀おびて、是も鎌倉殿より賜はりたる生唼に、黃覆輪の鞍おきて乘りたり。景季の裝束はすべて黑色なり。高綱の裝束はすべて黃色なり。黑と黃といづれの色か勝をとるらむ。あはれ。景季は鎌倉殿の秘藏の馬を賜はり來れり。今日の先陣。一人に渡されてかなはむや。高綱は、鎌倉殿の秘藏の馬を賜はりて來りたるのみならず必ず先陣つかつ

らむとちきりおけり。今日の先陣また人に渡されてかなはむや。その先陣をあらそふ心はおなし、されど、高綱の心のうちを考ふる時は、景季にまさりて一しほ苦心のところありしならむ。

景季弓の長さほどさきたちぬ。高綱弓の長さほどおくれぬ。おくれたる高綱のこゝろはいかにぞや。

川にこそまだうち入らぬ。景季弓の長さほどさきたちぬ。高綱弓の長さほどおくれぬ。おくれたる高綱のこゝろは、そもいかにぞや。

景季弓の長さほどさきたちぬ、高綱弓の長さほどおくれぬ、かくて川にうち入らむか、先陣は景季にわたされなむ。先陣を景季にわたされむか、高綱鎌倉殿に對して何のおもてあらむ。この時の高綱のこゝろのうちは、そもいかにぞや。

景季におくれたらむには、景季に先陣わたされむには、高綱一死以て鎌倉殿に謝せざるべからず。景季弓の長さほどさきたちぬ。高綱弓の長さほどおくれぬ。弓の長さいくばくかあらむ。そのはづかなるほどにはあれど、そのはづかなるが、やがて高綱の死ぬべき時の近づきたるなり。高綱その人の心のうちは、そもそもいかにぞや。

高綱あとより聲かけて、いかに源太殿、御邊の馬の腹帶ゆるびたり。川中にて鞍踏かへして敵に笑はれ給ふなといふ。この一語は、景季がためには終生の仇、高綱のためには無上の幸、その間實に髮をだに容れざるなり。まことに景季の馬の腹帶ゆるびたるか。いかでかゆるばむ。さては高綱のいつはりなるか。いつはりなり、いつはりなり、まことに高綱のいつはりにてありしなり。そもそもいつはりといふものは人のなすべきものにあらず。まして義を重むずる武士の間におきてをや。高綱、いつはりといふものはなすべき者にあらずと知らざるか、いかでか知らざる事のあらむ。知りて之をなしいはいかに。高綱は武士にあらざるか。義を重むずる武士にあらざるか。ある人高綱を論じて、高綱勇は勇なり。されど景季をあざむきしにいたりては、その心いみじういやしといへり。あるひはしからむ。されどその論は、おそらくは高綱の心を知り得たるものにはあらざらむ。なにとなれば。高綱、既に宇治川の先陣を鎌倉殿に誓ひたり。鎌倉殿もその心をめでゝ、かの生喉を賜ひたるなり。さてはこたびの先陣

は、高綱のためには死生のわかるゝところなり。景季をあざむきたる如き、またふかく咎むべきにもあらざらむか。ある人また高綱を論じて、あざむきて勝たむよりは、あざむかで負くる方まされりといへり。あるひはしからむ。されどこの論とても、おそらくは高綱の心を知り得たるものにはあらざらむ。なにとなれば、こたびの先陣は、高綱のために死生のわかるゝところなるのみならず、鎌倉の明不明にかゝはるところなり。高綱みづからは死ぬも生くるもなにかあらむ。たゞそれがために鎌倉殿の不明をあらはすにいたりては、實に忍ぶ能はざるところならむ。試に思へ、かの生嗟は蒲冠者範頼にも與へざりしにあらずや。梶原源太景季にも與へさりしにあらずや。さる秘藏の馬を高綱に與へしはいかに。高綱はすぐれたる武士なり。高綱こそは必ず先陣するならめ。この馬を與ふべきものは、高綱ならでは他にあるべからずとて、特に高綱に與へられしなり。生嗟を高綱に賜ふときかば、蒲冠者範頼をはじめ、梶原源太景季、その他の諸將皆鎌倉殿の偏頗をうらむるなるべし。そのうらみをかへりみず、特に高綱に與へられしなり。この時にあたり、高綱にして、先陣せむか、さきに偏頗と思ひし諸將も、必ずや鎌倉殿の人を見ることの明かなるに驚くならむ。この時にあたり、高綱にして先陣を人に渡されむか、高綱みづからの不名譽なるのみならず、鎌倉殿の不明をあらはすこと實に大ならむ。高綱は鎌倉殿に對しておもなさに、みづからは腹かききりて死ぬるならむ。腹かききりて死ぬるとて、鎌倉殿の不明はいつはりとて、あざむきたりとて、組みつきたりとて、きりふせたりとて、なにかあらむ。高綱の心の中には、鎌倉殿あるをしりて、わか身あるを知らず。まいて景季あるを知らむや。その心をしらず、とかく論ずるにいたりては。實に高綱のためになさけなきかぎりならむ。

うしろより聲かけられたる景季、馬の腹帶ゆるびたりとな、そは大事と馬をとゝめ、鎧(よろひ)蹈み張り立ちあがり、弓の弦(つる)を口にくはひて、腹帶引きしめてありけるに、高綱走りぬきて、はやくも川にうち入りたり、景季たばかられけりと思ひて、つゞきてうち入りたり。たくひまれなる生嗟、磨墨、矢よりもはやき川瀬(せ)をものともせず、いづれおとらず、進みに進む。かなたの岸(きし)にては、皆この

二騎に目をそゝぎ、強き弓どもおしはりてたえず射けるに、高綱、景季、その矢をきりながし、きりうけ、猶すゝみに進む。こなたの岸にては、大將義經をはじめ、また皆この二騎に目を注ぎたり。前なるは高綱、後なるは景季、前なるは生喰、後なるは磨墨。先陣はいつれの方ならむ、敵も味方も目をはなたず。水勢いよ〳〵はげしく、とゞませばおしながされむとす。高綱この時の心はいかにぞや。景季この時の心はいかにぞや。

景季の馬、一躍り躍ると見えしが、思ふやうにすゝまず。こはおしながしあるにすゝまず。高綱かねて期したることにしあれば、太刀もて、大綱小綱うちきり、きりなかして、猶すゝみにすゝむ。景季やゝ下の方へおしながされたり。高綱はこゝぞと氣をはげまして、馬躍らして岸ちかくすゝみけるに、味方の陣にて、どよめきさけぶ聲、波に和して、きこえたり。いよ〳〵氣をはげまして、遂にかの岸にうち上りけり。鐙踏み張り、弓杖つきたて、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣渡したり、と名のりもはてぬに、景季も遂に岸にうち上りけり。高綱のよろこびいかゝあらむ。景季の無念またいかゝあらむ。

高綱、景季、一陣二陣にわたすを見て、畠山、足利、三浦などおひ〳〵にわたしけり。かくて、今日の先陣のむね、早馬たてゝ、鎌倉殿にきこえあげけるに鎌倉殿使者にむかひ給ひて、高綱、景季生きたりやと問ひ給へは、共にさぶらふと申しゝに、あとは何事も問はせ給はず。高綱、景季生きたりやとはいかに。生喰をあらそひて、共にさしちがひて死にもやしたらむとおぼしてなり。生喰をあらそはざるも、先陣をあらそひて共にさしちがひて、死にもやしたらむとおぼしてなり。あとは何事も問はせ給はずとはいかに。高綱の先陣せむことはかねてよりおぼしゝことなればなり、あはれ、高綱の鎌倉殿に忠義なるのみならず、その忠義のために鎌倉殿の明をしていよ〳〵明ならしめたり。高綱の名の宇治川の流れと共に、とこしなへに世々に流れたるも、ふかきいはれのあることならむ。

三屋島浦　那須與一の事蹟

壽永三年二月、平宗盛、安德天皇を奉して、屋島にうつりぬ、あくる四年二月、源義經あまたの兵をひきゐて屋島を襲ひ、火をはなちてこを攻む。天皇をはしめまつり女房達公卿殿上人など、皆屋島の物門の渚より御船にめさせ給ふ。小松少將有盛、能登守敎經、小松新侍從忠房など城中に籠れり。源氏の兵五十騎、屋島館のうしろより攻めよせて、鬨の聲を發せしに、平家も聲をあはせて戰ふ、互に死生あり、義經下知しけるは、平家は大勢なり。味方の勢はいまだつゝかずゝ。敵、內裏にひきこもりて、出で合ゐ〳〵戰はむには、ゆゝしき大事にこそ。まかのみならず、兵船海上に數をしらす。はやく屋島の家どもを燒きはらひて、一方に附きて攻むべしといひければ、こゝろえたりとて、軍兵ども、家々に火を放ちぬ。をりしも、西ふく風いとはげしかりければ、その火うつり〳〵て、遂に內裏もやけうせ、餘烟海上にうかびて、そのさま波間にたゞよふ雲のごとし。城內の軍兵はかねてまうけたる舟にあらそひ乘り、波路を遠く引きわげたり。かくて陸と海と兩陣相對して、はげしき戰ありしが、日もはや夕ぐれちかうなりければ、源平、ともにひき退きぬ。

時に沖の方より、いとうるはしう飾りたてたる船一艘、渚にむかひて漕きよす。（東鑑には十九日、玉海には十八日とあり。いづれか是ならむ。）その船のことはまことにこの月の廿日のことにして、うちに、柳の五重に、紅の袴つけ、袖笠かつげる女房あり。なに事ならむと見てありしに、その女房、皆紅の扇に、日を出したるを杭にはさみて、船の艫頭に立て、こを射よとて、源氏の方をぞうちまねきたる。女房とはいかなる人なるか、建禮門院の立后の御時、千人のうるはしき少女のうちより撰ひ出てたる女房にして、その名を玉蟲前、又は舞の前といひし女房なり。今年、その齡十九にして、雲の髮、霞の眉、花の顏、雪の膚、いかなる繪師も雖ども筆なけつべし。紅の扇とはいかなる扇なるか。故高倉院、嚴島へ御幸の時、三十本きり立てゝ、明神にたてまつられたる、その扇の一なり。かくて、この女房のこの扇を立てたるはいかなることゝなるか。こを源氏、射はつしたらは、當家軍に勝つべし。射おほせたらば、源氏が利を得るなるべしとて、軍の占に立てられたるな

り。源氏がたにては、そのけしきのおもしろさに、目をおどろかし、こゝろをまよはすものもありしが、この扇たれに射よとおほせられむと、難唾をのめるものもありしなり。義經、畠山重忠を召す。重忠木蘭地の直垂に、裙縅目鎧つけて、大中黒矢負所藤弓の真中とり、黒の馬のふとくたくましきに、金覆輪の鞍おきて出て來れり。かくて義經の弓手の脇にすゝみ出て、さてかしこまりて、何事にかさぶらふといふ。義經、見らるゝが如く、かしこに扇たてたるは、わが軍兵に射よとの事なり。かの扇射られなむやとの給へば、重忠かしこまりて、君の仰、家の面目にはべれば、とかう申すにおよばず。さりながら、こはゆゝしき晴の藝にはべり、重忠打物とりては、鬼神といへどもおそれはべらねど、この間馬にふられて、こゝち常のごとくならず、射損じては、それがしの恥はさることにて、まことに源氏一族の大事と存しはべり、これはかりは、他人におぼせ下されよと申す。義經、さては誰かあるべきとたづね給へば、下野國住人那須太郎助宗が子に、十郎兄弟こそ、その人にはべれと申す。さらは十郎とて召されたるに、禍直垂に、洗革鎧に片白兜、二十四さしたる白羽矢に、笛藤弓の塗りこめたる真中とりて參れり。

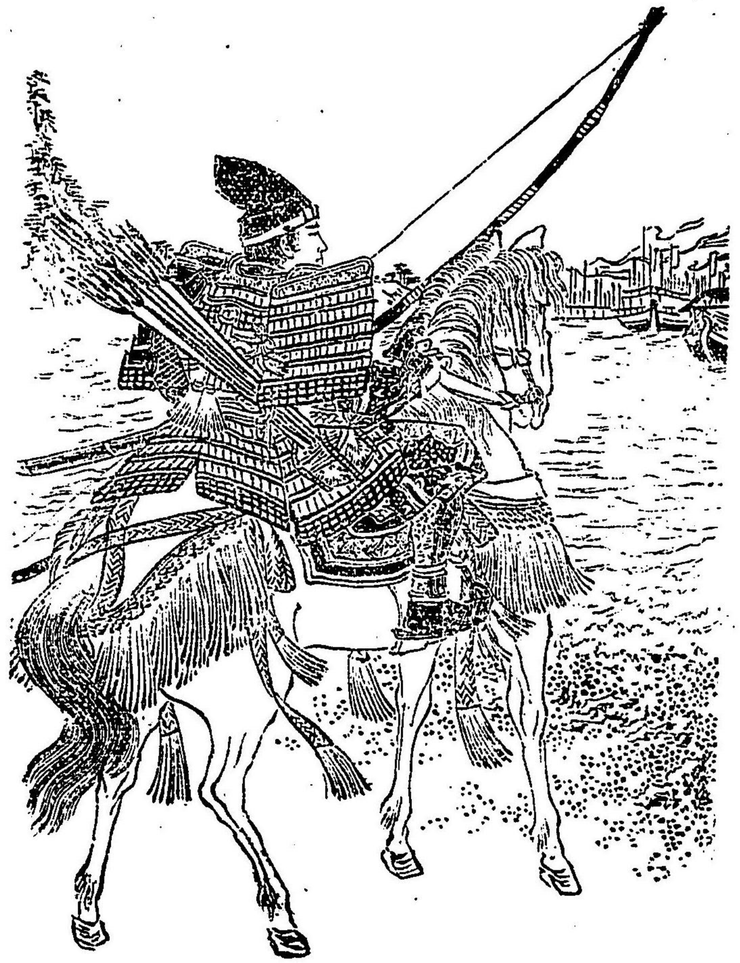
義經、汝十郎かの扇つかまつれとおほす。身にとりてのほまれ、とかう申すへきにはあらねど、一谷の巖石を落しい時、馬

屋島浦

弱くして、弓手の臂を沙につかせてはべりしが、いまだ癒え申さず。それがしが弟にさぶらふ與一宗高とそうけたまはるべけれと申す。さらば與一とて召されにけり。宗高その日の裝束は、紺村濃の直垂に、緋威の鎧、鷹角反の兜、猪首になし、二十四さしたる中黒矢負、滋藤弓に赤銅造太刀をおび、宿赫白馬のふとくたくましきに、洲崎に千鳥のとびちりたる貝鞍おきて乘りたりけるが、義經の前にて馬より下り、弓とりなほして畏れり。汝は與一よな、かの扇つかまつれ、晴の所作ぞ、不覺すなとの給ふ。宗高うけたまはりて、なにか子細申さむとせしに、伊勢三郎義盛、後藤兵衛尉實基など、與一に向ひ、とかう申すほどに、日もくれなむとす。兄の十郎、そなたを指しい上は、なにの子細かあるべき。とく〳〵いそぎ給へ、海上くらくなりなばゆゆしき大事なりといひしに、宗高、おもひをさだめ、さらばつかまつらむとて、兜ぬき、烏帽子ひきたて、薄紅梅の鉢巻して、馬にまたがりて、しづまづと出て立ちたり。宗高今年十七歳、今この大任を身に負ふ、その心のうれしさ、否つらさ、實にいふべからざるものありしならむ。

さて波うつ際にうちよせて、弓手のかたを見わたせば、天皇をはしめたてまつり、御母建禮門院、二位尼、その他女房たちの御船ども、たちならびたり。妻手の方を見わたせば、平家の軍將、屋島大臣をはじめたてまつり、子息右衛門督清宗、平中納言教盛、新少將有盛、能登守教經、侍從忠房、侍には、越中次郎兵衛盛嗣、悪七兵衛景清、江比田五郎民部大輔など、數百艘の兵船をこぎならべて、これを見るさまなり。さてまた後の方をかへりみれは、源氏の大將軍をはしめ、畠山庄司次郎重忠、土肥次郎實平、平山武者所季重、佐原介義澄、子息平六義村、同十郎義連、和田小太郎義盛、同三郎宗實、大田和四郎能範、佐々木四郎高綱、平左近太爲重、伊勢三郎義盛、横山太郎時兼、城太郎家永など、轡をならべて見て居たり。宗高今年十七歳、今この大任を身に負ふ、その心のうれしさ、否つらさ、實にいふべからざるものありしならむ。うれしさとはいかに。源氏の勇士あまたある中に年わかき身を以て、特にうち撰ばれ、この大任をおへるなり。家の面目身の面目、なに事かこれに過きむ。うれしといふはあらずや。さてまたつらさとはいかに。果して、この大任を全

うせしならむには、よろしかめれと、もしあやまたむには、身の耻辱のみならず、家の耻辱のみならず、まことに源氏がたすべての耻辱ならむ。つらしといふはあらずや。宗高のこの時の心のうちを思ふに、まことにうれしく、またまことにつらかりしならむ。



宗高、波を蹴て躍りすゝみしに、海の中のならひ、馬のはやることいふばかりなし。手綱をゆりすべ、ゆりすべしつむれとも、更に静まらず。たかのみならず、西風烈しく吹きければ、船はゆりあげられ、ゆりすゑられ、扇の位置もさだまらず。いづれのところを射つべしともおぼえねば、宗高、運のきはみとかなしくおもひて、眼をふさぎ、こゝろをしづめて、八幡大菩薩、日本國中の神々たち、ことに日光權現宇都宮那須の湯泉大明神、願くはかの扇を射させ給へ、こを射損ぜむには、弓ひき折りて自害せむのほかなし、今一たび本國へかへさむと思召さば、この矢はつさせ給ふなと、心のうちに祈念して、眼をひらけば、風すこしふきよわりて、やゝ射よけになりにたり。うれしと思ひて、十二束二伏の鏑矢をぬき出し、弓を滿月のごとくひきしぼり、ひようとうち放ちしに、その矢浦ひゞくまで鳴りわたり、かの扇の蚊目の上一寸おきて、ふつと射きりたり。蚊目は船にとまり、扇は空にまひあがれるに、平家の人々さへ、舷をた

いきてかまげたり。まして源氏の諸軍はいかゞあらむ。紅の扇の夕日にかゞやきて、波間にたゞよふ、おもしろさに、かの玉蟲前は、

時ならぬ花や紅葉を見つるかな芳野初瀬のふもとならねど

とうたひけり。そのをりのけしき、實に目に見るごとしとやいはむ。

高綱といひ、宗高といひ、その君とたのむところは、たゞ一二代の恩義にすぎず、されどその命をうくるや、身をすてゝそれに從へり。當時の武士のいさぎよき、またたとふべきものもなし。こは即ち、我日本國民の常に口にする大和魂にして、このこゝろをうつし、以て神代なからの天皇につかへまつらむかそのめでたさいかゞあらむ。實に高綱の如き、宗高の如き、武士たるものゝかゞみにこそ、否日本國民たるものゝかゞみにこそ。むかし相州北條の幕下に、佐野城主天德寺といへる勇將ありけり。ある時、琵琶法師を招きて、平家を語らせて聞かむとしけるに、いまだ語らぬさきに、法師にむかひて、某はたゞあはれなることをこそきかまほしけれ、その心して語り給へといひけるに、心得たりとて佐々木四郎高綱が、宇治川の先陣をかたりけるに、天德寺いみじうあはれがりて、涙とゞめあへず。さてまた今一曲をとこひけるに、こたびは那須與一宗高が扇の的をかたりけり。天德寺また涙とゞめあへず。日をへて後、天德寺、家臣にむかひ、さきつ日の平家はいかゞきゝつるといふに、いとおもしろうぞうけたまはりはべりし。たゞわれ〳〵ども、ひとつこゝろえぬ事にぞはべりし。その時の君の御ありさまにはべり。前後二曲とも、勇烈なることにて、あはれなることとはべらざりしものを、御感涙にむせび給ひしはいかなる事にかといふ。天德寺おどろきたるさまにて、たのみすくなきおの〳〵にもあるかな。まつ高綱が心事を合點して見よ。頼朝、弟なる蒲冠者にも賜はず、寵臣の景季にも賜はぬ生喉を、高綱に賜ひしにあらずや。其馬にて宇治川の先陣せず、人にさきをこされなば、高綱は必ずうち死にして、再ひかへるまじ。その心を察せむには、いかでかあはれならざらむ。また宗高が心事を合點して見よ。大勢の中よりうち撰はれて、唯一騎海中に乘り出てたるなり。源平兩家、鳴をしづめて、こを見てあるに、若し射損じたらむにはいかゞあらむ。必ずや馬上にて腹かききりて、波にいらむ。その心を察せむには、またいかでかあはれなら

さらむ。思へば武士の道ほどあはれなるものはあらず、おのれ戰場に臨む時は、常に高綱宗高が心を心にて、鎗をとれり。さては、平家をきく時も、兩人のこゝろを思ひやりて、感涙にたへざりしなり。さるをおのをのにはあはれにおぼえざりきとはいかに。たのもしからぬ人たちにこそといひしに、皆ことばなかりきとなむ。このはなし、この編を結ふには、きはめて適當なるものならむ。

中の巻

一　小松の雪　平重盛の事蹟

故郷を燒野がはらとかへり見て
すゑもけぶりのなみぢをぞゆく

こは薩摩守忠度が都落の時よみし歌なり。

いつくとも志らぬなぎさの藻鹽草
かきおくあとのかたみとぞ見よ

こは三位中將維盛の都なる夫人へおくりし歌なり。これをよむもの誰かその情をかなしまざる何人かその古を忍び出ざらん。一朝の榮花は、空しく西海の水泡と消えはて、空をおほひし赤旗は、時の間に甲を捲く具となりぬ。初め藤原氏を斃して、大權平氏に歸せし時、夢にだにも、この歎あることを知らん。庄園天下に半に、一門悉く公卿に上りし時、いかでか今日あることを知らん。そも〳〵、清盛父祖の遺業を受け、武門より起りて、太政大臣となる。實に前

古未曾有の例なり。さらば、自ら重じ、自ら敬み、日夕瞿々として、廟堂に臨まずんば、いかでか人望を得ることを得ん。然るに、一朝の功に誇り、分を忘れ職を失ひ、驕慢自ら安し、嘗て國民の休戚を心に關せず。これその位を保つこと能はざりし所以なり。一門はかなく都をさかりて、遂に西海の水泡と消えし所以なり。是を憂ひ是を慮りて、常に怠るとなかりしは。平家の一族多しといへども唯小松内府重盛ありしのみ。

重盛は、清盛の長子なり。資性忠謹にして、物に接して温厚なり。武勇さへ勝れしかば、中外皆意を屬しぬ。常に父清盛の驕奢なるを憂へ屢〻諫めて國家の禍を未然に防かんことをのみ務めとしけり。

久安六年、藏人と爲り、從五位下に叙せらる。久壽二年、中務の少輔に任ぜらる。その邸小松にありしかば、人稱して小松殿といふ。保元の亂、父清盛に從ひ、禁軍を率て、白河殿を攻む。清盛、たま〳〵西門に向ふ。西門は、源爲朝の守るところなり。清盛これを聞きて、怖れて進まず。部將伊藤五、伊藤六、先登す。爲朝一發して、六が胸をとほして、五が鎧の袖を射る。一軍大におそれぬ。清盛これを見て、おそろしき、鎮西八郎殿の弓勢かな。吾必ずしも、この門に向へといふ宣旨蒙りたるにもあらず。たゞ喧のまぎれに、たま〳〵、こゝに寄せつるなり。東の門に向はんといふ。聞く者、げに然るべく候。但し東の門も、この門に近ければ、同じ人や固め候ひてん。北の門にこそ向はめなど、評議とりどりなり。折しも赤地の錦の直垂着て、徐に鞭ち馳せ來るものあり。見ればわが子重盛なり。清盛の躰を見るより、いそぎ飛び下りて、何てふ御評議に候ぞ。勅命を蒙りて、むかひたるものが、敵陣とはしとて、引返すやうのことあらば、軍の勝負いつか決せん。續けや、兵士ども、重盛、爲朝が矢を受けんと、奮ひ立たんとするを、清盛、あはてさわぎて、危しや重盛。八郎が矢先には、鐵の楯をつなぎても叶ふべからず。若氣にはやりて過ちすな、と令しければ、兵士ども、馬の前に立塞り、左右の轡に取附きぬ。今は止むを得ざれば、たゞ退きて眺め居りしほどに、源義朝、火を放ちて、遂に白河殿を攻めおとし入れぬ。是より重盛の勇名ますます輝き、二年正五位下に叙し、左衛門の佐に任じ、遠江の守を兼ぬ。

平治元年、清盛に從て熊野に行く。切部の宿に至りしころ、藤原信頼、源義朝を語らひて、謀反せりといふことと聞えぬ。清盛おどろきて、急ぎ下向すべきかはたこのまゝに參詣せんかといふ。重盛進みて云く、熊野參詣は現世安穩の御祈請に候はずや。天子逆徒のために逼られたまふときゝて、武臣たるものいかでか猶豫するとわらん。速に御下向然るべしといふ。即ち使を、熊野の別當湛増がもとに遣して、兵を徵す。時に、義朝の子、惡源太義平といふは、剛勇無雙の聞えあり。兵三千を率て、安部野を擁すといふうはさとり〳〵なり。清盛色を失ひて、この無勢にて、大勢に當らんこと策の得たるものにあらず。四國へわたり、勢を催して都へ入らばやといふ。重盛云く、事急なり。若し一日も遲れなば賊詔を矯めて、我を討たんこと疑ひなし。一旦朝敵の名負ひなばたゞ幾多の兵ありとも、何の用をかせん。無勢なりとも、かけ合ひて討死せんこそ、後代の名も勝るへけれ、と勵ます。清盛、意即ち決し、遙に熊野の神を祈りて、遂に京都に赴く。

鬼の中山といふ處は、紀伊國と和泉國との境なり。こゝに打ちかゝるほど、一騎士の來るにあひぬ。誰にかと問へば六波羅よりの使なり。まづいかにと問へば、昨日までは何事もなし。たゞ播磨中將の難を遁れて、來られしがありしを、宣旨なりとて召捕に來たれば、力なくしてわたしゝ事ありしのみといふ。重盛怒りて、何事ぞ。我を憑みてこしるものを、人にわたす事もやある。かくては御方に勢のつかんことおぼつかなしと責む。人々皆かしこむ。さても口〻に義平が安倍野に待つといふはいかにかとゝへば、さる事は候はずたゞ伊勢平氏の、御方つかまつらんと、搆へしものあるのみといふ。人々よろこぶ。

さて都にかへりて、まづ乘輿を六波羅に迎へ奉りぬ。信頼義朝は、清盛の留守中に、事を擧げて帝を搖にし奉らんと企てけるが、今は謀漏れたるのみか、六波羅、內裏となりければ、止むとなく、舊內裏へ寄り集る。その勢二千餘騎なり。六波羅にては、重盛大將軍となり、敎盛頼盛等と、各々一千騎を率て、信頼を攻む。時に重盛年二十三。赤地の錦の直垂に、撫匂の鎧を著し、龍頭の兜の緒をしめ、小烏といふ太刀を帶き、黃鵠毛なる馬に打ち跨り、衆を戒めて云く、年號は平治なり、地は平安なり、我は平氏なり、三事相應せり。敵を平けんこ

と何の疑かあるべき。即ち兵を分けて、二隊となし、五百騎を、大宮街にとゝめ、その半を率て、待賢門を攻む。大内には、三方の門を鎖し固め、たゞ東面の門をぞ開きたる。大庭には、數騎の馬嘶き合ひ、梅壺、桐壺、藤壺、紫宸殿、清涼殿の脇の臺まで。ひし〳〵と並居て、白旗空をおほへり。重盛つと押しよせて、この門の大將は、信頼卿と見るは僻目か。かく申すは、桓武天皇の苗裔大宰大貳清盛か嫡子、左衛門佐重盛、と名のりかくれば、信頼面色草葉の如く振ひにふるひて、それ防げ侍どもとて、引き退く。重盛は、よせくる兵士を、沫雪の如く蹴散らして、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。義朝これを見て、悪源太はなきか。信頼といふ大臆病人が待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追ひ出せと下知す。承りぬとて、かけ出づ。大音聲をあげて、この手の大將は、誰人ぞ、名乗れ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝か嫡子、鎌倉悪源太義平、と申すものなり。生年十五歳、武藏大藏の軍の大將として、伯父帶刀先生義賢を討ちしより、度々の合戰に一度も不覺の名を取らず、年積りて十九歳、見參せんとて、五百騎か眞中へ破つて入る。八龍の鎧に、高角の兜の緒をしめ、石切の太刀を帶き、鹿毛なる馬の、はやりきたるにぞ乘りたりける。西より東へ追

ひまくり、北より南へ追ひ廻し、縱さま横さま、十文字に、敵をさつと蹴散らして、葉武者どもには目なかけそ、大將軍を組て討て、揃匂の鎧に、蝶の裾金物打て、黄鞦毛の馬に乘りたるこそ、重盛なれ、押しならべて組て落ち、手捕にせよと下知す。平家の侍どもは、重盛うたせて、叶ふべきかと、獅子のあるいか如くに打てかゝる。悪源太に、つゞく侍、十七騎。いづれも屈强の骨がらなり。共に目を重盛に注ぎて、組んと追ひかく。椋木を中に立て、左近の櫻右近の橘を廻ること七八度。比叡山おろし、音高く白砂飛て、殿宇を蓋ひ、紅塵空にみちて、聞ゆるものは、たゞ囂々の音のみなり。

この荒武者に、かけ立てられて、五百餘騎思ひ〳〵に引き退く。大宮街に至り、重盛鞍より飛び下り、弓杖突きて、馬の息をつおす。筑後守家貞、これを見てあはれ、平將軍貞盛卿の再生かなと涙をながして賛稱す。

重盛、再び、新手五百餘騎をすぐりて、待賢門へ馳せ向ふ。義平迎へとりて、また戰ふ。勇み立ちたる兵ども、吾先にと進みよる。義平大音あげて、呼はりけるは、幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん、

よれや組んといふまゝに、又大庭の中にて、五六度まで蒐り合ふ。

もみにもみて、再び大宮面へ

引き上ぐ。義平追ひ蹶つこと急なり。重盛、與三左衛門景安、新藤左衛門家泰、主從三騎にて、かけ離れ、二條を東へ引きけるを、義平鎌田政家に目くばせして、かしこに落つるは大將とこそ見れ。返せやとて、おつかけたり。堀河に至り、既に追詰めけるを、義平の馬おどろきて、小膝を打て、どうと伏す。政家、くちをしとて、十三束、取てつがひ、能くねらひて射れば、重盛の射向の袖に中りて飛び返る。又射れば押付に中りて箆かつき碎けて跳りかへれり。義平これを見て、馬を射れ馬を射れといふを、うけとりて射れば、箭のかくるゝほど太腹に射込む。馬は屏風をかへすがごとくに斃れぬ。重盛兜おちて大童になる。政家躍りて堀川を超え、組んとするを、重盛弓とり直し箭にて政家が鉢を撞く、つかれてゆら〳〵とする間に兜をとりて打ちかぶる時に景安馳せ至り、政家を取ておさゆ。

義平、やう〳〵起き上り、馬を引き直して、こなたざまへと馳せ來。政家の已に危きを見て、景安に乘りかゝり、三刀までさす。重盛これを見て大に怒り、しや義平殺してくれんと突き立ちけるを、家泰馳せ來て、大將の命を捨てたまうべき處にあらずと、進み出でゝ義平に當りて死す。重盛辛うじて、六波羅に遁る。時に十二月の末つかたなり。寒風膚を劈くばかりなるに。あられさへ打ちしきれる、いとものすごし。

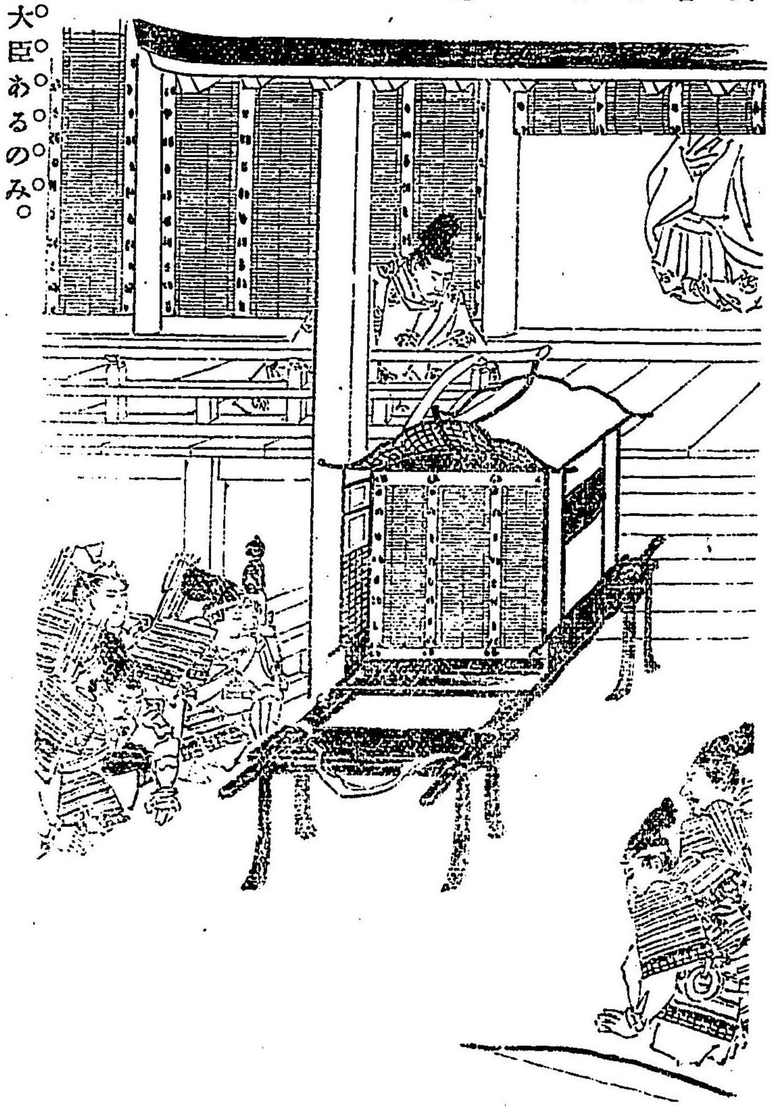
義朝義平等、追ひて六波羅に至り。合戰時を經ぬ。遂に平家の爲に破られて、散々に遁げ去りぬ。」時に後白河上皇、仁和寺におはします。信頼等往きて、死を宥められんことを乞ふ。上皇憐みたまひ、手書して、天皇(二條)に請ひたまふ。使いまだ還らざる中に、頼盛教盛等をして、信頼及びその黨與藤原成親等を捕へしむ。重盛みづからこれを吟味し成親の罪を申し請ひて、死を免しぬ。信頼はこれをきゝて、必定死罪を免かるゝならんと、頼みし甲斐なく、清盛の命なりとて、六條河原にて刎られぬ。今はのきはになるまで、歎き〳〵て、もだえ焦れしを、見ぐるしきことに思ひて人〻爪はじきしけり。

さて義朝は、尾張に下りて、長田忠宗に殺され、義平は、江州にて、捕はれて、六條河原に誅せられ、頼朝は幼ければとて、遠流に處せられぬ。これを平治の亂といふ。

この功によりて、重盛伊豫守を兼ね、明年從四位上に叙られ、累進して、右兵衛督となり、應保三年從三位に叙し、長寛二年、正三位に進み、永萬元年參議となりぬ。

この年秋、天皇崩じたまふ。諸寺の僧侶參集す。時に訛言あり。上皇竊に僧徒に命して平氏を討滅したまはんの御志ありと。清盛大におどろきて急き兵を集めて、自ら守る。ひとり重盛堅く執て妄言となし、みつから院參して、氣色伺ひ奉らんとて出で行きぬ。たまゝ〳〵、上皇儀を整へて幸まさんとす。いつこへかと問ひ奉れば、閭巷の風説に慮を惱したまひて、みつから六波羅へ幸して、ことのさまを仰せられんためなりといふ。重盛、涙をながして、云く、あなかしこ、さはかりに御心なやませ奉りしは、その罪臣子にあり。されど引きかへさせたまふべき道ならねば、やがて供奉しまあらす。

乘輿六波羅に着きたまふ。清盛きゝて、日頃所勞に侍ればとて、御迎へだにもなさず。上皇は、空しく還御になりぬ。あゝ君臣の道をわすれ、上下の禮を背くも、君として其罪を責むる能はず、臣としてその咎を恐るゝとなし。朝家の恥辱、武將の驕奢この上もなし。これを憂ひこれを悲むは、ただ重盛あるのみ。この厄運を挽回せんとつとむるはたゝ小松の大臣あるのみ。



重盛は、上皇を送り奉り、いそぎかへりて、父清盛に向ひて云く、さても一院の御幸こそ、おそれ多く悲しき極みなれ。我君いかで、見參に入り奉らざるといひも了へぬに、清盛は、怒り面にあらはれて、思しめしよりたまふことあればこそ、かゝる風説も起りにたれ、さればたとひ、御幸ありしとて、打ち解け奉るべきにあらず。我神を以て君に仕ふるに、君強ひて我を疑ひたまふ。汝が輩の知るところにあらずといふ。重盛、この事ゆめ〳〵、色にも詞にも出させたまふへからず。保元平治より、逆臣を誅戮して、勳功あまたあり。今に至るまで、君の御ため、不忠なるとあらず。何に依りてか、一門追討の御企あるべき。かやうの事にこそ、人の心つきて、實なきことに、悪事をも思ひ出すことに候へ。向後も、敵慮にそむきたまはず、人の爲に惠を施さんと思しめさば、神明三寶の御加護あるべし。されば御身の恐あるべからずといひて、坐を退れば、清盛、この重盛はゆゝしく大やうのものかなといひて、引き入ぬ。上皇は、還御の後、近侍のものどもを戒めたまひて、平家追討とは、何ものか言ひ出しけん。かやうの事は、浮説なれども、世の大事に及ぶものなり、更に謹めよと宣ふ。折しも西光御前にあり畏て申し上げゝるは、天に口なし、人代りていへるなり。驕て無禮なるは、これ天罰の徴なり。清盛以ての外の過分なり。亡びん瑞相にやと申しければ、人々壁に耳ありと、抜足して退出するもをかし。仁安元年、重盛權中納言に任じ、春宮太夫を兼ぬ。二年從二位に叙し、權大納言に遷り、帯剣を聽さる。明年更に正二位に叙せらる。

飛ぶ鳥も落るばかりとは、此頃の平家の勢ひなり。世は貴きも賤しきも、たいこの一家の喜びを買はんことをのみ務とはしけり。時に嘉應二年七月の初つかた、掘政基房、三條京極を過られけるに、女房の車出逢ひぬ。夕日のかけ車の中にさし入りて、隈なく見えけるに、透烏帽子着たるもの乘りたり。當時攝籙の車にあへば必ず、下乘すべきおきてなりしかば、居飼、御庇、舎人とも下り候へ、殿下の御通なるぞ、と責めけるに、聞き入れずしてたゝ過きに過ぐ。おのれ狼籍もの、懲してくれんと、舎人走りて、前の簾また下簾を切りおとしけり。葛袴着たる男走りいでて追げ行く。舎人追ひかけて、散々に打つ。男はふ〳〵六條京極の小家に入りぬ。これ清盛の嫡孫越前守資盛なり。笛を式部大輔

雅盛に習はんとて、それが家に行きたるかへるさなりけり。資盛かへりて、父重盛に告ぐ。重盛怒りて云く。汝本年已に十三なり。いかでさばかりはあらん。そも〳〵人に上下の品あり。官に淺深の法あり。政は邪なきを基とし、禮は敬を以て本とす。傍輩猶以て敬ふべし、況や攝政家に於てをや。汝が无禮返すがも奇怪なりと、いと腹立れければ、資盛面目なげに坐を退く基房は、清盛の嫡孫ともまらず、かゝるふるまひに及びたるを、安からぬことに思ひて、手を下しける舍人どもを縛めて、重盛のもとに送り、懇にその罪を謝せらる。重盛、恐れ敬ひて、これを送りかへし、我に罪あるとを深く謝し申す。とかくするほどに、この事清盛の耳に入りぬ。例の心とて、たとひ攝政關白たりとも、淨海（清盛の法號）が孫といはんものに、などか一度の芳心なかるべき必恥を雪がで止むべきかと、驕心はいよ〳〵長し、家貞をめして、怨み必報ぜよと申し付けぬ。げに禮をまらぬ人ばかりおそろしきはなし、重盛これを聞きて、そは大事なり。打ちすておくべきにあらずとて、急ぎ清盛のもとに參りて、申さく。御報答の仰せ、ゆめ〳〵あるまじき事に候。重盛が子ども、平殿上人にて殿下の御出に參りあひて、無禮を致したることこそ、無禮に候へ。たとひ資盛は幼蒙にて、禮を失ふとも、附き從ふものの不覺なり。さるを吾を賣めずして、人を賣るは轉倒の御處置とや申さん。攝籙の臣と申すは忝くも君と共に國を治め、民を育てまします者なり。一朝の御威權に誇りて、恥を報いんこと然るべからず。且德を以て、人に勝つ者は昌え、力を以て人に勝つものは亡ぶといへり。かやうの事よりぞ、世の大事も、家の煩ひも出來るものなると、いと詳に述べてかへりぬ。

清盛の怒りは、この數言にて押へ得べくもあらず。孫の恥は我が恥なり。他人のおもはんことも口をしと、あらぬかたに思ひ僻めて難波、妹尾の二人に、松殿（基房）を辱しめて、その伴ともの髮切れよと、命じけるぞあさましき。難波妹尾は、田舍そだちのあらくれ也、清盛の命を、興あることに思ひつゝ、時機を伺ひけり、一日基房參内すとて、前驅花やかに追はせ、隨身殊に引きつくろひて、出で行かれけるを、堀河、猪熊の邊に潛みて、三十騎ばかり躍りいで、長刀太刀を以て、切りかゝりけり。さて數多の隨身、伴人どもの髮をき

りて、遁けうせけり。基房は、清盛の使者とおもへば、せんかたなくて、引きかへしぬ。難波妹尾は、志たりがほに、清盛の前にいでゝ、鼻うごめかす。清盛よろこぶ。重盛きゝ傳へて、さばかり申しおきつるものをと、太息つきて、家門の榮花既に盡きぬなんと歎く。さてつら〳〵思ふやうかゝる事をきいでゝ、その果て〳〵はいかにかならん。これ我が子故なりとて、遂に資盛を伊勢國に追ひ放ち、又その事に預りしものを、悉く追ひ退けつ。

嘉應三年、正月高倉天皇、御元服あり。やがて朝覲の行幸あり。（朝覲とは帝王御父太上天皇を省みて孝道を盡したまふ儀なり）初冠の御姿、いと美しく絲の山に月の出たるが如く、雛の内に、梅の綻びたるに似させたまへり。四月改元ありて、承安元年といふ。太政大臣清盛の二女入内し、中宮徳子と申し奉る。重盛宗盛相並て左右の大將たり。保元平治の亂あとなく治りて今は心なき草木もたいこの一門に打ちなびくとぞ見えける。治承元年重盛遂に内大臣となりぬ。榮花極りなき位にありながら、愛の涙とゝまる隙なく、歎の息絶ゆる時なし。この隙なき絶ゆることなき涙誰か諸共に袖を濕すものあらん。あなあはれ。鴨川の水と共に數へられて、法皇の御心を惱し奉りしは、山法師なり。延暦寺の僧徒なり。彼等は僧たる道を失ひ、彼等は佛の掟を破り、事を朝廷に申して、聞かれざる時は、いつも强訴に及ぶを例とせり。ことしも、また訴ふるところありとて日吉の神輿を奉じて、京に入ぬ。亂暴狼藉、限なきに至りぬ。天皇源平の諸將に命じて、禦がしめたまふ。重盛三千餘騎を以て、陽明、待賢、郁芳の三門を守り、寄手のことゝ〳〵追ひ散らしつ。天皇法皇大に賞したまひて、ます〳〵重盛を用ゐたまふ、初め藤原成親、重盛に扶けられて後、朝官に列り正二位大納言となり大に法皇の寵を受けぬ。高倉天皇、即位の後、平家ますます繁昌し、驕奢至らざるところなく、德大寺實定のごときも、この氏の計ひにて、大將になりたるなど、面白からぬ事に思ひ、再び清盛の暴戾を挫かん志をおこしき、法皇も、常にかの、入道の無禮なるを憤ほらせたまひたれば、をり〳〵はさやうなる事をも謀り申しけり。されば、平家の驕奢積るまゝに、成親の憤はいよ〳〵重り、今は堪へ難く思ひて、竊に摂津源氏、多田藏人行綱をかたらひ、法皇の院宣を賜はりて、平家追討の事を謀る。行綱は源頼盛の子なり。心

竊に平家の專横を憤り居るものなれば、異議なく領掌しぬ。

東山鹿ケ谷といふところは、法勝寺の執行、俊寛僧都が領なり、後は三井寺に續き、前は遙に京都を見わたして、自然の城廓をなせり。成親常に俊寛の心を知りしかば、直に行きてこれを謀る。俊寛よろこぶ。且行綱とは師檀の契あり、おのれよりも勝めんといふ。時に平判官康頼、近江中將入道蓮海、西光法師、その外北面の下臈ども、同意するもの多し。

一日鹿ケ谷にて、同志相會して、肆宴す、成親、懇に行綱をもてなす。坐漸く亂る。一人誤りて瓶子を倒しその首を折る。成親驚れて、平氏倒れぬといふ。康頼とりあへず、倒れたる平氏の首は取るにしかずとて、急ぎ差上げて舞ふ。やがて大路を引きわたすといひつゝ廣縁を二三度打ち廻りて太床の柱なる、烏帽子かけに結ひ附けたり。見る人手を拍て興じあへり。

土の穴を掘りて、いふことだに漏るといふに、かばかりの事、いかでか聞えざらん。まして臆病者の行綱、おのが身の後の災をおそれて、清盛がもとに至りて、訴へしかば謀は悉く漏れぬ。さらぬだに腹黑き清盛、これを聞きて、何かは堪へん急に令して、兵を集めぬ。宗盛重衡以下、會するもの四五千騎。京中の騒動大かたならず。やがて謀を以て、成親をよぶ、成親何心なく行く。近づくまゝに、軍兵左右にみち〳〵たり。門を入れば二人の武士飛ぶがごとくに左右の手を取り、ゑいや聲を出して、天にも揚げず、地にもつけずして、率て行く。さて木にて、蜘蛛手に結ひたる、一間にぞ押し籠めける。涙も汗も爭ひつゝ、肝心も失せて、いかなれば、策のもれけるかと、泣くより外なし。重盛聞きて、馳せまゐる。清盛待ち迎へて、大納言謀反の事は、聞きつるかといふ。さん候、皆承りぬいかなる罪にか行はせ賜ふべきといふ。おろかや、只今斬らんとするものをといふ。重盛かさねて云く、大納言を失はれんことは、よくよく御思案あるべきことなり。彼は法皇の寵臣なり。その祖顯季白河院に仕へて以來、家久しくなりて、位正二位、官大納言に至りぬ。今私の怨を以て、輙く殺さんは、憚あるに似たり。たゞ都の外へ出されて、事足りなん。物騒がしきとは、必後悔あり。既にかく召捕りおかれぬる上は、いそぎ失はれずとも、何の苦かあるべき。罪の重きは輕くし、功の淺きは重せよといふ事も侍り。何や

うにも、今夜、卒爾の死罪然るべからずといふ。清盛心ゆかぬけしきなれば、又かさねて云く、重盛彼の大納言と、姻戚あるによりて、かく申すとや思すらん。つや〳〵さる事は候はず。たゞ世のため、家のためを思ひて、歎き申すのみ。昔嵯峨帝の朝に、藤原仲成を誅せられし後、死罪を止められしこと二十五代、保元の亂、少納言信西、事を執りて、絶えて久しき例にそむき、多くの源平二氏の首を斬り剰へ宇治左府の墓を發きしとありしが、その酬にや、後二年を隔てゝ、平治の亂の時、信西が墓も、また發かれて、頸を獄門に梟されにき。善惡の報應こそげにおそろしく侍れ。今大人は榮花殘るところなくおはしまして、思しおきたまふことなくとも、子々孫々、繁昌こそあらまほしく侍れ。積善の家に餘慶ありと申すことも思しめさすやと、さま〳〵に例を引き、押しかへし押しかへし慰めけり。清盛怒り漸ゝ解けて、さらば今夜ばかりの命は助くべしとて引き入りぬ。

重盛中門にいでゝ、侍どもをめしあつめて云く、入道殿の仰せなりとて、決して大納言を失ふやうの事あるべからず。腹の立ちたまふまゝに、物さわがしき事あらば、後に必悔いたまふべし。制止にかゝはらず僻事して、重盛恨むな。

經遠兼康が、大納言に情なく當りたりけるこそ、かへす〳〵奇怪なれ。片田舍のものは、かゝるもの多しと、嚴しく叱して出られければ、難波妹尾は、更にもいはず、一同舌を振てぞ恐れあへりける。

重盛は歸りぬ、清盛の怒は止むべくもあらず。屢〻難波妹尾をして、成親を責めしむ。又この事に關係ある人々を、悉く縛めおきぬ。されども、猶心安からず思ひて、いかで法皇をもさるべき處に御幸なし奉らばや。鳥羽の別宮にや移し奉らばやこゝにやならせ參らせんとおもへば、片時も休むことなく、中門の廊に出で立ちて、瞋り聲に、貞能を呼びて云く、入道保元平治以後偏に朝家の爲に謀り申しを法皇成親が讒奏につきたまひて、一門追討せらるべきよしの御結構こそ、返す〳〵遺恨なれ。この事行綱告げ知らせずば、顯はるべからずあらはれずば、いかで安穩にあるべしや。この上猶も北面の下臈どもの中に申すことなとあらば、輕こしき君の御性質とて、一家追討の院宣下されんも知るべからす。朝敵となりなん後は、悔ゆともかひあるまじ。さらばしばし世靜な

るほど、仙洞を烏羽の北の御所へ移しまゐらするか。さらずば御幸をこいにな
し參らせばやと思ふなり。かゝらば、北面の者どもの中にて矢一つも射出すも
のもありなん、侍どもに。その用意すべしと觸るべし。大かたは入道院中の宮
づかへ思ひきりぬ。着せ長取り出せ、馬に鞍置けよといふ。
やがて人を走らせて、重盛に告ぐ、又何事をかし出でさせたまふとて、さしも
驚かてありけるほどに、侍どもは思ひ〳〵に取り裝ひて、弓よ馬よとひしめく。
清盛は小具足取り附け腹巻つけて、打ち立つ。主馬判官盛國この躰を見て、あ
な淺ましし、小松殿に告げんとて、馳せ行く。さて云く、實は入道殿には、法皇
を西國へ御幸なし奉らるゝ御心がまへなり。いそぎ來たるまはすば、大事や生ぜ
んと訴へぬ。重盛おどろきさわぎて、馳せ行く。今朝のまゝの姿にて烏帽子直
衣なり隨身もありつれど、物具したるは一人もあらず。さし入りて見れば、一
門の卿相雲客、悉く軍裝ひしてあり。さて中門の廊に二行に着坐す。庭には馬
の腹帶引きしめ、旗竿ども引きそばめて、今や打ち出ん躰なり、重盛しつ〳〵
と奴袴の音さやめかして奥へとほりげるを、人々ことの外に見る。宗盛堪へか

ねて、進て直衣の袖を引きつゝ、これほどの大事出で來て、入道殿既に甲冑を帶せられ候に、御裝束はあまりいかゝはしくは候はずやといふ。重盛ふりかへりて、何事かはあるべき。大事とは朝

家の重事をこそ申せ。こは私事なり。入道殿の物狂の至るところか。夫近衛大將は兵權の歸するところなり。重盛たまゝこの職を忝くす。輙く武具を着すること、甚然るへからず。夷賊朝家を亂り凶徒勝に乘りて、味方敗れなんとする時には、たとひ丞相の位たりとも、自ら甲冑を着て禦き戰ふべし。敵とすべき人もなきに誰に向てか鎧を着くべき。沙汰の趣尤不審なりといひ捨て、馳せ通る。宗盛を始め一座の人々、皆目と目とを見あはせて苦りあへり。

重盛は内に入りぬ。清盛、その躰のおとなしやかなるを見て、さながらに逢はんとさすがに恥かしけれど脱ぎ捨てん隙もなければ、障子を少し引きたてゝ腹卷の上に薄墨染素絹の衣を引きかけて迎へぬ。されども、胸板の金物はづれて見ゆるを、隠さんとて、頻に衣の領を引き違へ〳〵するほどに、引き綻ばして、いとゝきらめくをおしつゝみ。さて躰を正して云ひけるは、このあひだの事、西光に尋ねしに、成親の謀反は枝葉なり。實は法皇の叡慮より出たりとぞ承る。されば、かしこかれど、世の靜ならんほど、法皇を迎へ奉り、然るべき地に御幸なしまゐらせんとおもふ近來さらぬものども、近き奉りて、種々の事勸め申すと聞く。輕々しき君におはしませば、又いかなる事をか爲出させたまふらん。一天の煩ひ、當家の大事、一定出で來ぬと覺ゆ。されば御邊には、使者をも參らせつるに、いかなる遲參ぞや。若くは淨海が思ふところと、異なるかと詰り問ふ。重盛あまりの事になみだも出でず、たいうつふしたり。一門の武士ども鳴りをしづめて、音もせず。庭上の軍兵ども皆畏つて侍候す。重盛やゝありて、座を正して申しけるは、この仰せを蒙り候に、御運既に末になり候と覺え候。先づ何かの仔細は聞きて、その御覧見奉ることこそ、うつゝとも存じ候はね。開國以來官太政大臣に昇れるものゝ、輙く甲冑を著することあるべしとも覺えず、況や出家の御身におはしますをや。これ内は佛戒を破り、外は儒道に背きおはしますなり。恐ある申しごとながら、暫く御心を鎮めて重盛が申す狀を具にきこしめし候へ。かつは最後のことゝ存ずれば、心に思ふ限り申し奉り見ばやと、はら〳〵と落つる涙を直衣の袖に押へつゝ、膝おし進めて、さて云く、世に四恩といふことあり。一には天地の恩、二には國王の恩、三には父母の恩、四には衆生の恩これなり。これを知るを人倫とし、知らざるを鬼畜とす。中に

つきて、尤重きは國王の恩なり。つら〳〵按ずるに、吾家は忝くも桓武天皇の御苗裔葛原親王の後胤とは申しながら、中ごろよりは官途無下に打ち下りて、下國の受領をだにも許されず。御先祖平將軍相馬の將門を誅せられたりけるも、勘賞やう〳〵受領に過ぎざりき。刑部卿得長壽院造進の功によりて、家に久しく絶えたりし內昇殿を聽されし時、萬人唇を齧し侍りしとこそ傳へ承り候へ。大人小官より起りたまひていまだ嘗て例なき太政大臣の位を極めさせたまひ、暗愚重盛がごときも、其資蔭によりて遠府槐門の位に至る。志かのみならず、國郡半は一門の所領となり、田園悉く一家の進止たり、これ希代の朝恩に候はずや。今忽ちにこの隆恩を忘れて、君を傾け奉らんとしたまふこそ、宗廟の冥慮も恐ろしく候。この一門代々朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭むることは、無雙の勳功といへども、面々の恩賞に於ては、傍若無人と申すべきなり、先に大納言の反するや。御運の盡きざるによりて、ことゝく召し捕はれぬ。この輩に所當の罪科行はれん上は、退いて事の由を陳じ申させたまひて、君の御爲にはいよ〳〵奉公の忠勤を盡し、人の爲には、ます〳〵撫育の哀憐を致させたまはゝ。佛陀の加護に預り、神明の冥慮に背くべからざらん。神明佛陀の感應あらば、君もなどか思召し直すこともなかるべき、この度の事、かた〳〵然るべからず。重盛はゆめ〳〵御供仕り候はず。父命を以て王命を辭せず、王事を以て家事を辭すといふこともあり。又君と臣とを并べては、親疎を分たず、君に附き奉るは忠臣の法なり、道理と僻事とを并べんに、いかでか道理に附かざらん。こたびの事、專ら君の御理にてましませば、神明も必擁護を垂れたまふべし。强ひて射向ひ奉るは、逆臣の所爲に似たり重盛はじめ六位に叙し、今は三公に列れり、朝恩を裝ること、家にその例なし。その重きことをおもへば、千顆萬顆の珠にも踰え、その深き色を論ずれば、一入再入の紅にも過ぎたり。今院中に參籠せば、重盛が命に替らんもの、二三百人は候ひなん。猶思しめし候へ、保元の亂の時。六條判官爲義は、新院の御方に參り、子息義朝は、內裏に參りて、父子の合戰となり。新院の御方敗れて、院は讃州へ下向、左府は流失に中りて失せられぬ。爲義をば、義朝承りて、首を刎ねしこと、勅定とはいひながら、惡逆無道の至り、くちをしき事なりき。それも人の上なれば、たゞさ

てのみいひてあるべかりしを、今は重盛が身の上になり侍りやせんと、いといと心うく悲く候。あゝ君に忠ならんとすれは不孝の子となるべし。父に孝ならんとすれは不忠の臣とやならん。君君たらざれども、臣々たらざるべからず。父々たらざれども、子々たらさるべからす。彼といひ、是といひ、痛しき事のみなり。今は進退谷まりぬ。思ふとも無益のことなり。院中をも誠り奉らず。御供をも仕らず。たゞ願ふは速に重盛か首をめされんことなり。いつまで生きて、憂世を見候べき。たゞ速に首をめされ候へ。人ひとりに仰せつけられて、御蟄に引き出され、首を討たるまはんに、むつかしき事あるべからず、人々いかに聞きたまふかと、あたり見やりて、泣き沈む。一座は水をうちたるごとくしづまりてたゞ息すいすりする聲のみなり。

清盛、理に攻めたてられて、おろ泣していひけるは、御邊のこと理あるに似たり。さらば今は世をもいろひ申すまじ。院参も思ひ止るべし。召禁じたるものをも、死罪にも、流罪にもなすまじ。かく入道がおもひしも、全くは身のためにはあらず、たゞ子孫のためをこそ思ひつれ。その事人望に、背き、恐案の企とあらば、いかやうにも、御計ひあるべしとて、内へ入りぬ。重盛涙を拭ひて、弟の宗盛に向ひいて、いかに、かやうのふるまひには及び候ぞ。たとひ入道殿、老耄したまひて、あらぬことありとても各方こそ、家門をも治め、悪事をも宥め申すべけれ。さるを、中々に助けまつりて、事を好むこそ心得られねと、齕といふ。宗盛以下たゞ面目なげにうつぶす。重盛は、やがて中門の廊に出でゝ、侍どもを集めて、汝等重盛が申つることゝも承りつや。院参の御供せんとおもはゞ、この首斬られんを見て後にすべしと、いひ含めて、小松の邸にかへりぬ。

道すがらの思出いかに悲しかりけん。

入道殿は、腹悪き人なり。たとひ、一旦過を悔いたもふとも、又いかなる事をかまいでたまふらん。さては、法皇の慮のほども、いとかしこし。我國開闢以來、君臣の義の貴きこと、父子の親よりも重し。このまゝに捨ておかば、あらぬ僻事いできて、家を滅すのみか、後代までも、悪逆無道の一族と誹られん。

さては、今日の大臣大將も、何かせん。いで〳〵入道殿の御心を改め申させばやと、兎さま角さまに、思を凝して、主馬盛國を使ひとして、重盛こそ、大事

を聞き出したれ。我を思はんものどもは、急ぎまゐれと催さしむ。一門の柱と頼む小松殿のおぼろげの事にては騒かぬ重盛卿の、かゝる命ありと聞きては、いかでか猶豫すべきと、難波、妹尾、家貞、貞能等をはじめとして、老も若きも、我先にと馳せ集る。洛中洛外、粟津、勢多、石山わたりまで、聞きつたへては、出家遁世の古入道まで、我を忘れて集りけり。その勢凡そ二萬餘人とぞいふ。

清盛は、何事ぞとさわげと、たえて聞くものもなし。こと〳〵馳せ行きて、殘れるは、たゞ青女房、老尼、さては執筆のもののみなり。心得ぬことにおもへど、若し討手など向ふにやと、さすがに後悔して腹巻ぬきすて袈裟打かけて心にもあらぬ念誦をはじめぬ。

重盛、家貞、貞能を近くめしよせて、事の仔細をいひ含めて、西八條なる、清盛のもとにつかはしぬ二人行き見るに、清盛は人々に捨てられてつれ〳〵のあまり縁行道してありけり。家貞等を見つけて、何事ぞ、小松殿には、軍兵をあつめてと問ふ。家貞畏つてさん候。入道殿下には、御院参あるべきよし、仙洞きこしめしたまひて、いたくおどろかせたまひ、官位福祿先例に秀でゝ、深く朝恩を存すべきに、反りて國家をみださんとすること、奇怪なり。速に追討すべき旨、院宣を下されて候。重盛官に居りて、祿を貪る上は、敕定背き奉り難し。然れども昨日申し入れし如く、父に向ひ奉りて、弓引くとはあるべからず。御命をば、奉公に申し替へ侍らんと仰せ下されて候と、いひければ、清盛、忽ちけしきかはりて、家貞、貞能慥に承れ。昨日申しゝやうに、今は出家入道の身なり。餘年いと少し。内府に世を讓る上は、向後は物にいろひ申すことあるべからず。院宣の御返事、宜く取りはからひて、奏聞せらるべし。この事歸りて申し傳へよと、慇れて云ふ。二人は、殿下を守護し奉るべきために參れり。別の御使に仰せらるべしといへば、たゞ急ぎまゐれ。我はいつこにも行かじ。この所につゝしみ居るべし。たゞ急げとのみあれば、かへりて細にそのよし申す。重盛打ちうなづき涙ぐみて、やをれ家貞、貞能よ、眞には敕定なりとて、いかでか父に向ひ奉りて無道の逆罪を犯すべきたゞ入道殿の逆敕のふるまひを鎮め奉り、世の煩を止んとの方便なり。そも〳〵人の子としては、何事も父の

命に隨ひ奉るべきものなるに、今我父にむかひて、御心を傷め奉りしことの心うさよ、と息すゝりして語る。これを聞くものども、鎧の袖を濕さぬはなかりき。重盛はやがて軍兵どもを集めて、日ごろの契り違へず下知に隨ひて、馳せ參りし事、かへす〳〵神妙なり。思ふむねありて、呼び寄せつれども、今は事治りぬ。とく〳〵まかりかへるべし。但今度別の事なければとて、向後の催促に悠々たるべからずと、懇に慰めてかへされけり。あとにて入道殿を諫めたまひしなりと聞き傳へて、感泣せぬものは、なかりしとぞ。

法皇、この事きこしめして、今にはじまらぬこととはいへ、怨をば恩をもて報ずべ。重盛が心の中こそはづかしけれ。朕願くはこの人に先ちて命を終らん。勁松は歳の寒きにあらはれ、貞臣は國の危きにあらはるゝと、たのもしく貴くおぼしめして龍顔に涙を浮へさせたまひけるぞかしときや。

例を引き、理を盡して、諫めし甲斐もなく、清盛の暴戻は、日ごとに募りぬ。誠忠なる重盛、至孝なるこの人、身を盡し思を焦しし甲斐もなく、入道の跋扈は、日ごとに益さり行けば、今は悪名世にとゞろきて怨み詈らぬものなきに至れり。

水の至清なる所には魚住まざるごとく、純忠至孝の重盛の胸中には、一點の塵をも止めざれば交らふべき人なく、語らふべき友なし。されば物にふれ事に當りて、人まれぬ歎きをのみ重ね、沖の石の乾きかたくて月日を過しけるぞあはれなる。

治承三年のころかとよ。長き春日も思ひくらし、夜に入りてもねもやらず。憂に沈み居たりしが更け行くまゝに、とろ〳〵とねぶけさ誘はるゝに、やがて濱邊傳に、鳥居いかめしき社の前に至りぬ。三島明神とぞいふなる。門の右の脇に法師の首を斬りたる梟したり。いま〳〵し、誰が首ぞと問へば、僧出でて平將軍太政入道といふものゝ首なり、この入道、無禮のふるまひあれば、當國の流人、源兵衛頼朝、千夜通夜して祈り中す旨ありしを、神明受納まし〳〵て、備前、吉備津宮に仰せて、入道を討たせてかけたるなりといふ。あなおそろしと、聲も立られつべく歎かるゝに、夢はさめてけり。枕邊のともしひ、かげかすかに、清水寺の鐘の音あはれに聞ゆ。胸躍りて、まづめんやうなきに、門打

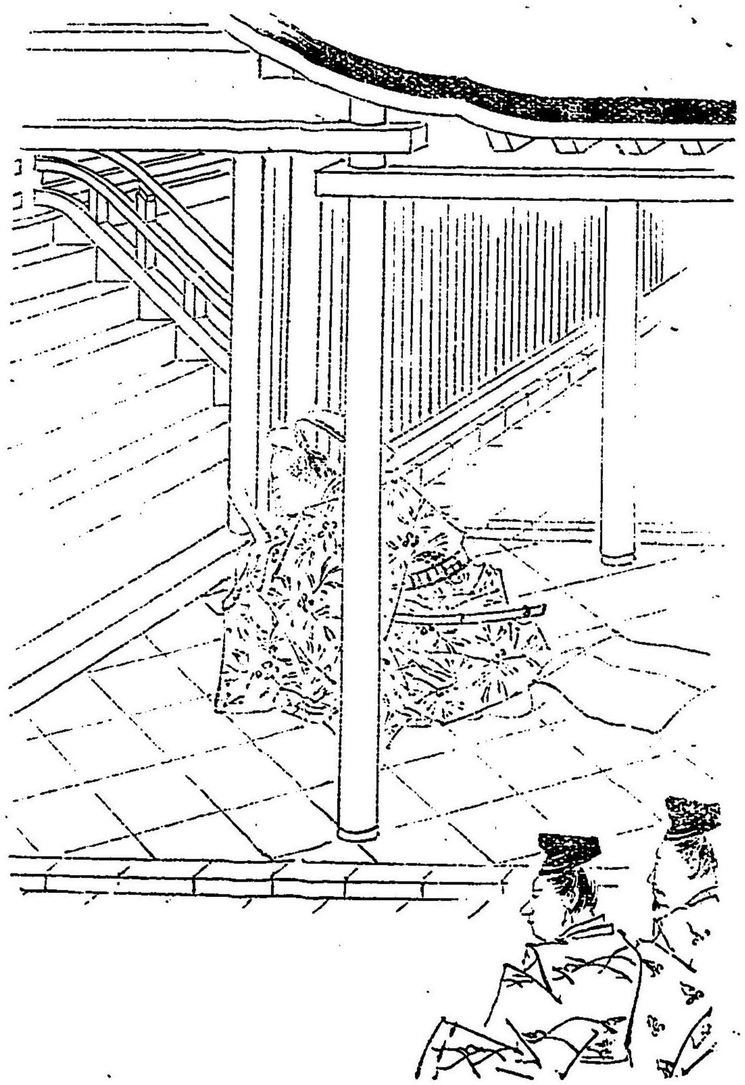
ちたゝくものあり。案内につれて入りくるを見れば、妹尾兼康なり。何事ぞ。夜半ばかりにと問へば。彼は涙をながして夢のがたりす、そのこと重盛の見しとつゆ違ふことなし。不思議におもへば、いよ〳〵涙ぐまれて、泣きふしぬ。さて夜はあけぬ。

翌朝、嫡子少將維盛參れり。重盛、常よりも細に物語す。さて云く、親にて見ればにや、御邊は、人の子には勝れて見えたまへり。いざ酒勸めんとて、貞能をめして、銚子とらす。重盛、まづ飲みて遣はしぬ。あれ少將に引出物せよと命ぜられて、貞能傍へなる、赤地の錦の袋に入たる、太刀もてわたす、維盛はいとうれしげに、こは傳家の寶刀、小烏丸にやと押し戴きて見れば、さにはあらで、無文の太刀なりけり。大臣葬送の時に用ゐる太刀にてありけり維盛色かはりて、貞能の誤にやと目くばせす。重盛くもり聲にて云く。汝ふかく疑ふことなかれ。これ貞能の誤にあらず。家君百歳の後我はきて御供仕らんとおもひしが、聊おもふむねありて、汝に與ふるなり。謹で納められよといふ。維盛涙をのみて退き、かへりて泣く。これをわたす人の心は、うけとる人やあらん。うけとる人の心は、わたす人やあらん。あはなあれ、あないとほし。」

重盛、ほどなく左近衛大將

を辭しぬ。また內大臣をも辭しぬ。同年五月宿願なりとて、子弟引き具して、熊野參詣あり。證誠殿の御前に額づきて祈を籠めぬ。あはれいかなるぬぎことをかありけん鳴きよわりたる蟬の聲、風のまに〳〵たえ〳〵聞ゆるも、いとあはれなり。從ふ人々も、常にかはりたるありさまに、淨衣の袖もぬほりあへずかへりて、ほどなく病おこりぬ。子弟郎從の心配甚しきに關はらず、病はますます重りて、今はたのみかひなきまでになりぬ。されども、天命なりといひて療藥をもなさず。たゞ入道殿の御心直れかしとのみいひくらす。清盛きゝて、歎き憂へ、盛次といふものを使にして云く、御勞日にそへて大事なるよし承る。心ぐるしきことなり。何故に今まで療治をもなさゝる。親に先つは不孝とこそ申せ。今日明日とも志らぬ父母をのこしおきて、歎き思はせんこと罪ふかゝるべし。この頃宋より來たる醫師あり。折節然るべき御運とぞおもはる。ほどなく、使者につけて進ずべけれども、まづ案內を申すなりといふ。重盛、入道殿に最後の詞きこえんと、病の床におき直り、人に扶けられて烏帽子直衣をつけて、盛次に出逢ひぬ。さて云く、療治の事、畏り承り候ひぬ。但し今度の勞は、所

詮怠るべからず。老少不定の世の習ひ、老いたるを殘しおき奉るは、痛しき極みなれども、親に先



たつためし、重盛一人に限らず。前後相違の國もとより存する處なれば、強に歎き思しめすべきにあらず。その上命は天なり、必ずしも治術によるべからず。重盛保元平治の合戰には、命を捨て、馳せむかひしかども、矢にも中らず。劍にもかゝらず。實に運は天なり。ことしばかりは一期の限にこそ侍らめ。惜むとも何の甲斐かあらん。これ天の心也、これを察せずして、おろかに醫藥を致さんや。もし宋醫の治術によりて、存命候はゞ、本朝に醫道なきを示すに似たり。若又かの醫術効なくば面謁その詮なかるべし。況や重盛不肖の身なから忝くも三公の一分を汚して、丞相の位に上り侍る、私に異國浮涙の客に見えんと。國の恥なり。家の疵なり。たとひ我命死ぬとも、いかで國家の恥をかへり見ざらんや。御志いと忝く侍れど、この旨申し上げよといふ。さて年ごろの侍ども に向ひて、殊に禮儀せられければ、盛次泣く〳〵罷出ぬ。

天皇使をつかはして、藥を賜ひぬ。法皇はこれをきこしめして、臨幸あり。惜めども甲斐なくて同年八月一日、朝の霧と共に、はかなく消えはてぬ。生年四十三、聞く人皆泣ぬはなし。あはれ思ひおく事はさま〳〵なりけんを、天命に安して、この世を去りしこそ、やさしくもいと悲しけれ。抑〻平家一門多しといへども、國を思ひ、家を思ふ心深き、誰れか重盛の右に出つるものあるべき。清盛殘忍暴逆、國憲を輕し、家風をみだり、みづから以て得意となす。これを憂ひしものは重盛なり。これをなげきしものは重盛なり。あはれ雪霰ふりしくとも、小松の操かはることなく、始終一日のごときは、たゞこの君ありしのみ。この君おはさは、「故郷を燒野か原とかへり見、まらぬ渚の「もしほ草、かきあつむる憂もなかるべく、清盛この君の諫を納れて、善道に立かへらば、屋島の浦のうらみもなかるべく、一の谷のふかきうれひに沈むこともなかるべきを、いとくちをし、いとかなし。

重盛、常に佛を信じ、室中四方に、各十二佛像をおき、夜毎に燈をともしたりけれは、世に燈籠大臣ともいひき。

嘗て中宮の御前に侍りて、事を啓しゝ時、蛇ありて膝下よりはひ出でぬ。重盛中宮をおとろかし奉らんとをそれて、竊にその首尾を捉へ、藏人源仲綱をめして、これを收めしむ。仲綱袖にして出づ。重盛よろこび、翌日駿馬及び瓦刀

を贈り、手書して昨日の擧動還城樂の舞に似たり、と褒めやりけり。その性度すべてかくのごとし。

子維盛、資盛、清經、有盛、師盛、忠房、宗實、重眞、行眞、重遍、清雲等あり。あるひは西海に沒し、或は僧となる。今こゝに記さず。

二　鬼界が島　俊寛僧都の事蹟

鬼界が島の名をきくにだにおそろしや。島は薩摩潟をへだつる三十餘里、大島の東にあり。源平盛衰記に、この島々へは、おぼろげならでは、人の通ふこともなし。島にも人稀なり。おのづからある者も、この土の人には似ず。身には毛長く生ひ色黑くして牛の如し。いふ言の葉もきゝしらず。男は烏帽子もきず、女は髮もけづらず、木の皮を剝ぎてさぬかつらにまたり。ひとへに鬼の如し。眼に遮ぎるものは、燃えあかる火の色、耳に滿つるものは、鳴りくだる雷の音、肝心も消ゆるばかりなれば、一日片時堪へてあるべき心地せず。賤が山田もうたざれば、米穀の類もさらになく、園の桑葉もとらざれば絹布の服も稀なり。昔は鬼の住みければ、鬼界の島とも名づけたり」とあり、そのさま思ひやるべし。」

さて鬼界島ときかば、歷史上必ずや俊寛僧都の事を思ひおこすならん。俊寛僧都ときかは、また必ずや有王の事を思ひおこすならん。俊寛僧島にうち流されたるものなり。有王は、その主俊寛をたづねて、かの島にわた

りたるものなり。俊寛、その人はとまれかくまれ、有王のこゝろざしのほど、たれかおはれと思はざらん。

平家の世ざかりのころ、鹿谷の會合といふことあり、鹿谷は俊寛僧都の坊のありしところにて、そこにあつまれる人々は、新大納言成親をはじめ西光法師、判官康頼などにて、何れも清盛のほしいまゝなるを怒り、平家を斃さんとはかれるなり。さるをその事遂にあらはれて、あまた召捕へられしそのうちにも、成親は備前の國に流され、西光父子は殺され、成親の嫡子丹波少將成經と、判官康頼、俊寛僧都との三人は、鬼界が島に流さるゝことゝなりたり。

俊寛僧都は夫妻の間ことにむつましく、女子と男子と二人の子をもたりけり。召捕へらるゝ夕なとは、何事も知らで、親子うちよりて、物語などしてありけるに、清盛よりの使なりとて、あまたうちいりたり。俊寛は例の事のあちはれしためなりと知りしかば、いさゝかもおどろかざれど、妻子のかなしみなにゝかたとへむ。後にたちて妻のなげくあれば、膝にとりつきて子のさけぶあり。俊寛も今わかれたらんには、ふたゝびあふ事もかたからんと思ひしかば、妻に子にいひたき事どもありしならんされどさる事もかなはで、かの使のものどもに、ひきたてられ、

おもひを殘して出てたちぬ。わか夫、父上となきさけぶ聲、まばしかほとは聞えたり。あはれその妻、その子のあとのなげきは。いかに。あとのうきめは、いかに。俊寛はまりたりやいかに。何事をまらでありしならん。たとひ知りたりとて、そのなげき、そのうきめをことく知ることはかたかりしならん。」

さて鬼界が島は十二の島よりなりて、古くより五島七島の名あり。三人の流されしは、おなじ島ならず、康頼は千との島、成經は硫黄島、俊寛は白石島なり。せめては三人同處ならんには、うきながらも、また思ひなぐさむる事もありしならん。さるをはなれ小島にうちはなれて、ところ〳〵になげきしはつらきが中のつらさなりしならん。

三人は島をことにせり。三人はところを同じうせず。こは腹あしき清盛のこゝろのみ、命のみ。されど三人はその命をまもり、そのこゝろをおそれ、そのこゝろのまゝに、その命のまゝに、うき年月を過すを得べきか。いかでかさる事のかなはん。うべなるかな。俊寛康頼あまの釣舟に身をよせて、遂に成經が硫黄島にわたりける事よ。

硫黄島、白石島、千と島、いづれも鬼界が島のうちなり。さむさも、あつさも、くるしさも、つらさも皆同じことなりしならん。さては俊寛が二人を戀ひしと思ひし夕には、二人も俊寛を戀しと思ひしならん。康頼が二人をまたはしと思ひし朝には、二人も康頼をまたはしと思ひしならん。またはしきその心、戀しきその情、いつれか劣りまさりあらん。その情その心におきて、おとりまさりなからんか、俊寛の堪へしかぎりは、康頼も堪へしならん。康頼の忍びしかぎりは、俊寛も忍びしならん。又俊寛が堪へ得べからざりし時は、康頼も堪へ得べからざりし時ならん。康頼が忍びかたかりし時は、俊寛も忍びかたかりし時ならん。俊寛康頼の相かたらひしが如く、共に硫黄島へわたりしそのこゝろよくきこえたり。たゞあやしきは成經なり。俊寛康頼がえ堪へず、え忍びざる月日を、たとひ一日なりとも、一時なりとも、堪へ忍ふことはかなはざらんと思はるゝに、ひとりこの島にありて、俊寛康頼をまちづけたりしはいかにぞや。成經は俊寛康頼にくらべて、情うすき人なるか、はた耐へ忍ぶ力の他の二人よりまさりたる人なるか、いかでかさることあらん。思ふに、清盛の弟門脇宰相

敎盛は、成經のためには眞なり。宰相の領、肥前國加瀨の庄にあり。そこより折節につきて、忍び〳〵に、衣食をおくられしよしなれば、俊寛康賴にくらべて、なにほどか堪へ忍ふたつきありしならん。

三人は硫黃島にあつまりぬ。島をかへ、海を隔てゝ、歎けきし時にくらぶれは、いさゝか心なぐさむる事もあらん。されど都戀しと一人がいへば、二人もおなじくかなしといひて、その戀しさ悲しさの歎しそはれは今は中〳〵にひとりある方やまさりたりしならん。

康賴の母は七十有餘なり。都のかたほとりなる紫野といふところに住みておはしけり。康賴流さるゝ時、この事を母にきこえなば、いかばかり歎き給ふらむと思ひて、何事もうちわかさで出てたち給へり。さてはその戀しさも一しほにて、朝夕その事をのみ思ひつゝけ給ふ。ある日、

薩摩潟おきの小島にわれありと人には告げよ八重の汐風。

また、

思ひやれこばしと思ふ旅だにも猶ふるさとはこひしきものを。とよまれたり。

深夜と
もし火
に對し、
この二
首のう
たを見
よ。一
たびよ
まんに
はたれ
も袖を
こぼる
ならん。
二たび

よまんにはおぼえずあはれとさけぶならん、實にこゝろふかき歌なるかな。かくて千本の卒都婆をつくりその卒都婆毎に、この歌を志るし、その下におのが名を彫りて、さて海に流し給ふ。そのこゝろは風のたよりに、波のまに〳〵に、日本の地につけ給へ、故郷におはする我母に見せしめ給へと、海神にいのらるゝなりけり。はてしなき蒼海原、かぎりしられぬ八重の潮路、そのよるべやいづこ、その行方やまたいづこ。

成經も親を思ふこゝろ深き人なり。この島にわたり給ひても、片時もわすれ給ふことなし。さるを父成親卿には治承元年七月七日あるは十三日あるは十九日、即ち成經の流され給ひしより、二ヶ月ばかりありて殺され給ひぬ。母君も世をうきものに思されて、出家し給ひぬ。かくあさましき事どもありしかと、何事も志ろしめさず。あらず、かすかにはきかれたるよしなり。されどきかれたりとていかにかせん。

建禮門院その時は中宮にておはせしが、治承二年の春の暮つかたより御惱あり。中宮は清盛の女にておはすれば、そのさわぎいはんかたなし。こゝに宰相敎盛、重盛にかたらひて、成經赦免のことを清盛に申しいれしに、常のこゝろにも似もやらず、康頼を合はせて、共にゆるさんとの事なり。さてその使者をは、丹波左衛門尉基安におほせつけられたり。基安夜を日にかけていそぐ。あはれとの使をはやくかしこに着かせてしかな。夢にても知らせてしかな。

秋もやゝふけぬ、さらぬも露けき流人の袂、いとゞ濕りがちなりしが、康頼は例の如く成經をゐて岩殿といふ島なる社に參詣し、共につゝがなく都へかへらんことをいのりけり。さて歸りきたりしに、はれわたりたる海上はるかに、一片の帆影見ゆ、成經かなたの帆影はといひしに、康頼もいとゞいぶかしとて眺め居たり。とかくするほどに俊寛も出てきぬ。共に目もはなたず。舟やう〳〵近きぬ。かしこの岸やよからん。こゝにやよせんなどいふ聲きければ、いづれも戀しき都の人なりけり。あはれまた罪せられて來たりしものならん、歎き思ふは我らにもかぎらざりけりと思ひながら都の事もたづねきかまほしく、猶見てありしに、岸にのぼりきぬ。さて六波羅よりの使ときゝしをりのうれしさは、いかにかありけん。基安、三人のもとにすゝみより、それかしは丹波左衛門尉基

安といふものに侍り。こたび六波羅より赦免の御勅書もてきたりといふ。こをきゝたる三人のよろこびまたいかにかありけん。たゞ夢、夢のこゝちす。

俊寛僧都その勅書をとりてひらけば、

依中宮御産御祈禱被行非常大赦之内、薩摩方硫黄島流人丹波少將成經、幷平判官康頼法師可歸洛之由、御氣色所候也。仍執達如件。

七月三日

とあり。わが名の見えざるはいかにと、なほよみくたしいに、まさに見えず。禮紙を見るにも見えず。おくよりはしへよみ、はしよりおくへよみけれども、二人とばかりかゝれて三人とはかゝれず。成經の見るにも、康頼のよむにも、二人とばかりありて、三人とはなし。夢ならん、夢ならんとおもへばうつゝなり。うつゝならんとおもへばまた夢に似たり。俊寛涙を一時にうちもらし、われら三人はおなじ罪、配所もおなじところなり。いかなれば二人に赦免ありて、われにはなきならん。平家のおもひわすれか、はた執筆のあやまりか、こはいかにとふしまろびぬ。志ばしありて俊寛、年ころ日ころは三人互に相伴ひ、昔今の物語して慰めつるすら、猶忍びかねたりしに、今うちすてられはべりなば、一日片時もいかでか堪へ過されん。赦免なき身、

みやこまでこそかなはざれ。せめては九國の地までもつけてたべといふ。二人もこの年月共にうきを共にせしものなれば、よそのことゝは思はず、たゞに思はざるのみならず、そのなげきを聞きては、そをうちすてゝ都へかへらんのこゝろはなかりしならん。されど赦免のなきうへはすべきやうもあらざれば、俊寛に向ひて、御歎きの數々、御理には候へども。御教誓になき人を具足せんもいかゝあらん。われら都へのぼり、その上、とにもかくにもはからひ申さんほどに、御心まづかにまち給へといふ。さて基安もいそきたてければ、かついつまであらんも。名殘のつくる事もあらざりければ、二人は舟にのらんとす。俊寛二人の袖にとりすがりぬ。二人はふりはなちぬ。俊寛志ばしまちねとさけぶ。遠く漕き出てぬ。聲もきこえずなりぬ。岸の見ゆるかきりは、見かへりぬ。舟の見ゆるかきりは見送りぬ

そも〳〵成經康頼のゆるされしはいかに。俊寛のゆるされざりしはいかに。成經のゆるされしは、前の文にてはや明かならん。康頼のゆるされしは、かの卒都婆の歌やそのもとゐをなしいならん。そはかの卒都婆一本、安藝の嚴島につきけるに、ゆかりあるもの、都にもてのぼりけるを、重盛公見給ひて、いとあはれにおぼされて、やがて父の入道にも見せまゐらせたりしに、さすがの入道もおほへず袖をぬらされたりしよしなればなり。俊寛の殘されしは、清盛のことばに、俊寛は、わか口入をもて人となしたるに、所しもこそあれ、東山鹿谷の山庄によりあひて、奇怪のふるまひありしなれば、かれが赦免のことは思ひもよらずとあり。このことばを味ひなば、思ひ半にすぎん。

成經康頼ゆるされて、都にかへりはかへりたり。されどむかしのごときたのしみは、ありやなしや。成經、父成親卿の御墓に詣でゝ歎き申しゝ詞に。

遠き御まもりとならせおはしましたる事をば、島にてもかすかに傳へうけ給はりて候ひしかども、心にまかせぬうき身なれば、いそぎまゐる事も候はず。成經かの島へ流されて後のたよりなさ、一日片時のいのちも、ありかたうこそ候ひしかども、さすが露の命は消えやらでこの二年を送りて、今召しかへさるゝ嬉しさ、さる事にては候へども、父大納言殿の、まさしうこの世にわらたせ給はんを、見まゐらせても候はゞこそ、さすが命の長きかひも候はめ。

これまではいそがれづれども、今日より後は、いそぐべしともおもほえず。

とあり。又康頼都にいり給ふ五日ばかり前、かの母上にははかなく世をさり給ひしかば、薩摩潟の歌は、たかためにいひけることのはぞと、たえいるばかり歎き給ひしよし、これを思ひ、かれを思へは、世に親子の情ばかり切なるものはあらざるかな。

さて法勝寺執行俊寛、都にありし時、幼少より召しつかひける童三人あり。共に粟田口邊にすみけるが、兄は法師になりて、法勝寺にあり。二郎は龜王、三郎は有王とて、共に年まだわかいりき。僧都ながさるゝ時、走ばし淀におはせしが龜王、ひそかにたつねきて、最後の御供これやかぎりならん。いづこまても参りはべるべしといふ。僧都、その志はさる事なから、少將も判官も人一人もつれ給はずとこそ聞け、伴ひゆかまほしう思へど、力およばぬをいかにかせん。まことや鬼界島へながさるべしときけば、命なからふべしともおぼえず。路のほどにてはかなくもやならん。わか身の事はさておき、都にのこしといむる妻子の事よきにたのむといふ。をりしも六波羅の使ありて、いとあやしめるさまなりしかば、龜王なく〳〵そこを立ち出てぬ。あはれ人々平家のいきほひをおそれ、さりかたき恩をうけたるものすら今はたづねよらざるに、そをおそれず、そをかへりみず、とひきたりし、そのこゝろざし、ほむるにも實にあまりあることにこそ。

有王も僧都にわかれ申してよりは、ひたすら世をうきものに思ひなし、大原、関原、嵯峨、法輪など、ところ〳〵にめくりゆき、峰の花をつみ、谷の水をむすびて、佛に手向け我主に今一たびあはせ給へと、たゞそれのみいのりてありしに、その年もはかなくくれぬ。次の年も。さて僧都にわかれて、はや三年とはなりにけり。いかにおはすらん。いかにくらさせ給ふらんと思ひやらぬ時だにもなし、かゝるほとに、少將と判官と都へかへりのぼらるゝよし、ほのきゝたり。さては我主にもかへり給ひぬらんと、鳥羽まて行き迎へたりしに、見え給はず。いかにと問へば、我主ひとりのみかの島に殘され給ひぬといふ。そをきゝたる有王のこゝろはいかに。あまりのことにことばも出てず。涙も出てず、只はるかに西の空をうちながめしのみ。

奈良の片ほとりに、ひとりさびしく世をおくり給ふ姫君あり。こは俊寛僧都の女にておはすなり。母君にもわかれ、弟にもさきだゝれ、今はたのみもあらざれは、朝にはたきみを摘み、夕には阿伽をくみ、讀經怠ることなく、たゝ父上の、歸り給ふをのみまちわたり給へり。さるほどに成經康頼上洛のことをきかれぬ。父上は猶殘され給ひしよしもきかれぬ都のおとづれきくごとに、いとゝいかなしき事のみおほかりしかば、この末いかになるならんと思ひ出ていは、只なきに泣き給ふ。今日も例の佛壇にむかひ、讀經に餘念もなかりしが、遠寺の鐘いとあはれにきこゆる夕まぐれ、門外に音なふものあり。たれならんと一たびは心とゝめ給ひしかと、その音もやみたれば、ふたゝび讀經せらるゝに、又々音す。かゝるわび住居を訪ふものはそもたれならんと、縁に出て、庭におり、飛石づたひ小柴垣まで出て給ひしに、その人は有王にてありけり。汝はいかにしてこゝへはとゝひ給ひしに、こたび少將判官の二人御上洛ありときゝしかば、主にも必ず御ゆるしありしならんと、御迎に出でむかひしに、思ひきや、只御一人かの島に殘され給はんとは。この上は有王かの島へゆきわたたり、その御

ありさまを、目のあたり見たてまつらんとぞ思ひはべる。御文にてもあらんには、御とゝけ申さん、いかにといふ。姫、よくも尋ねまゐりしぞ。妾も父上には生きわかれ、母上と弟とには死にわかれ、今はたつきもなき身となれり、あはれ男子にてもあらましかば、はしりつゝきてもゆかまほしけれど、女の身の悲しさいかにせんとて泣き給ふ。有王某がしまゐらんかきりは、何事もうけたまりてまかりかへるべし、必ずさなげき給ひそとなくさめらるゝにつけても、いとゞかなしくなむ。姫は涙をうちはらひ給ひ、有王よ、汝ゆかんには一日もはやくかしこへ行きつき、父上の御供してかへりきたれ、妾は行くことかなはざればせめては御文たてまつらん、あとやさき、いひたき事は種々なれど、筆とことばとにかぎりあり。いかでかそをかきつくすを得ん。いかでかそをかきあらはすを得ん。

その年もくれぬ。あくる年の四月五日、有王唐船の便をえて遠くこぎ出でぬ。波にゆられ風にへだてられ、身につもるは幾多の辛苦難ならん。されどそはかねての覺悟なり。いかにうきめを見るも有王の身にとりてなにかあらん。風

吹かば吹け、波たゝばたて。

鬼界島の有様は、都にても傳へ聞きたり。あはれものすごき島なるよしもきゝ居たり。されど今たつねきて、目のあたり見ては、かねての想像はものゝ數かは。峰には烟もえあがりて行客の魂を消し。谷には雷なり下りて旅人の夢を破り、山路に日暮れぬれと、樵歌牧笛の音もなく、海岸に夜をあかせは、松風白波心をいたましむ。

有王、わたりつきはつきたれど、そのすさまじさに、たえてなくさむる思ひもなく、一時はたえいるばかりなりしも、主を思ふ一念はいかでかやまん。谷をわたり、峰をこえて、猶ゆきゆけば、名もしらぬ。灌木などのみまけりあひて、そのさびしさいふはかりなし。夕日影やう〳〵名殘すくなくなりぬ。鳥もねぐらもとめて鳴きゆきぬ。有王は何處か主の住居ならんと、只袖をのみうちぬぎて、折しも島の住人とおぼしきもの、木の皮をさねかつらとして頷にまき、赤裸にてむつきをかつき、身には毛生ひ、長けは六七尺ばかりなるが來たり。有王うれしと思ひて、この島に法勝寺の執行僧都の御房おはし候ふなるは、何處にて候ふやらんと問ふ。彼、こなたをうち見たるばかりにて何事も應へず。みつからいふ事もありつれど、つゆ〳〵きゝ知らず。かくてはたづねまゐらせんことも、遂にかたからむとおもふにつけても、せきくるものは涙のみ。

あはれ俊寛はしるやまらずや。

鬼のすむやうなるこの島に、ひとり殘され給ひては、とても今日までながらへ給ふ事はなからん、せめては御骸骨なりと見出てたてまつり、後の御形見ともなしたてまつらむ。さはいへいつこいかなるところをたつねまゐらせんといふ方もなし。いかに。この上はこのまゝ都にかへらんか。否、御行方をだに知らずして空しく都にかへりのぼらんはいかにくちをしからん。この身はいかになりんもなにかあらん。猶山深くたづねいらんとひとりこゝろはけましたれど、人影なきをいかにかせん。我主に似たる人なきをいかにかせん。

ある朝ばかりはるゝ浦路に迷ひ出でたるに、磯邊の方より歩み來るものあり。もとは法師にてありけりと見えて、髪はそらざまに生ひあがり、腰には荒和布をとりつけ、片手に魚をもてり。さて歩むやうには志けれども、はかもゆかず、よろ〳〵と力なげに見えたり。もしかやうのものにても、我主の御行方や志りたると思ひて、やよ物申さんといへば、何事ぞとこたふ。これに都より流され給ひたりし、法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やましますと問ふに、有王こそ忘れたれ。僧都はいかでかわすれ給ふべき。只なにとも應へず、兩眼にはや涙をうかべ給へり、有王猶すゝみよりて問ひけるに、われこそ俊寛よといはんとせしが猶なにとも應へず。そも〳〵有王年いとけなきに波路をわけてはるばると主をたづぬるそのこゝろざし、たれかあはれと思はぬものあらん。まいてたづねらるゝ俊寛の身にとりてはいかはかりかうれしからむ。さるをこゝにいたりて俊寛の應へざりしはいかに。うれしと思はざるにか。いかてかさる理あらん。思ふに、この身のありさまを見たらんには、彼はいかに驚くならん。また名のりたりとて都にかへらるゝ身にあらず、われかへらずば、彼もかへらざるべし、わが身はすてられたる身なれば、今更何にをかうらみむ、されど彼をしてこの島に年月をおくらせんは、實に罪ふかき事なるべし、彼の見わすれたるを幸、名のらぬこそ中々にふかきなさけなれど思ひしならむ。

されと俊寛は果して、その思ひを全うすべきか。遂に名のらで有王をかへし得べきか。普通の人情よりするもいかでさることの忍ばれんや。俊寛は人なり。

普通人間に比してその性情のかはらざるかぎりはいかでか名のらざるを得べき。うべなるかな。遂に下の語を發したるも。汝は有王よな。汝のたづぬる俊寛とそまことにわれなれといひも終らぬに、手にもてるものをなげすてゝ、有王をかき抱きぬ。さては我主のなれのはてなるかと、猶つく〳〵うちまもるに、まがふ方なき僧都なりけり。あはれこの御ありさまはいかに見わすれまつるほどに衰へさせけるよと、ものいはんとすれども出てず。やゝありて多くの波路をきのぎつゝはるゝ〳〵とたづねまゐりたるをなにとて今まで御應へはあらざりしかと泣きくどけば、僧都、われあやまちたり。まことこれまで尋ぬまゐりたるそのこゝろざしはきらぬにはあらねど、あまりのくるしさに應へざりしのみ。あしくな思ひとりそ。あはれ、明けても暮れても都の事のみ思ひ居たれば、戀しきものゝ面影の夢に見ゆるをりもあり。又ぼろしに立つ時もあり。さるを後々は身もいたうつかれて、夢もうつゝも思ひわかず。今汝が來るをもたゞ夢とのみこそおぼゆれ。もしこの事の夢なりせば、いかにせん。さめての後はいかにせんといふ。有王、こはうつゝに侍り。さ御歎きはなし給ひそ。さてもさてもこの御有樣にて今日まで御命のびさせ給ひたるこそ不思議にはおぼえ候へといへば、いざとよ、去年、少將、判官が迎の時あまりの

かなしさに、この身をなくべかりしを、少將の、今一たび都のおとつれをまち給へと、慰めおかれしをおろかにも。もしやとたのみつゝ、今日までばながらへたるなり、いざ給へ、何事も我家へゆきて物語らんといふ。有王、心に思ふやう、この御有樣にても家をもち給へるにかと、僧都の手をとりて、その敎に志たがひ、行くこと數十丁、小松原あり、そを過ぎて猶行けば、磯山かげに住居とおぼしきところあり。住居とは只名のみ。わづかに雨露を凌ぐにたるかたらぬかのところのみ。猶いへは、巖と巖との間に木をわたし、その上に寄り來る藻屑を取りかけたるのみ。有王見るより更にかなしみのこゝろをおこし、あな心うの御住居や、もとは法勝寺の寺務職にて、八十餘か所の庄務をつかさどり、京極の御宿所、白川の御坊、鹿谷の御山庄まで、塵もつけじとこそ。みがき立てさせ給ひしか、さるを目のあたりかゝるうきめにあはせ給ふとは、そもいかなることならん。とおもはずいひつゝくるもまことことわりなきにはあらざるべし。

俊寛、有王に向ひて、よくもたづねまゐりしぞ、さはさりながらこれほどの志のありけるに、などかこの三とせか間は問はざりけるぞ。少將の迎の時は何故に文一だに傳へざりしぞとの給ふ。有王涙にむせびまはしは御返事にもおよばざりしが、たばしありて申しけるは、おろかなる事の給ふものかな。君西八條殿へ召し籠められさせ給ひし後は、御あたりの人をば、上下をとはず、皆搦め取りて御謀反の次第をたづねとひ、皆うしなひはて候ひき。かゝるありさまなるをいかでか御文などたてまつらるべき、そのをりのありさま今おもひやるだに、おそろしといふ。俊寛さまできびしき事ありしか、清盛のこゝろのあしさ今にはじめぬ事ながら、さてもにくきしわざかなと都の空をうちにらみたるそのさま、いかにくやしかりけむ。

さてまた妻子どもはいかにと問ひ給ひしに、有王、さればにて候ふ。北の方にはをさなき人を伴ひ給ひて、鞍馬のおく、大悲山に忍ばせ給ひしが、明けても暮れても御歎き淺からず見えさせ給ひしほどに、その積りにや久しう惱ませ給ひしが、去年の冬遂に御かくれましましぬ。といひもはてぬに、僧都はあなあはれさては妻には、はやはかなくなりたるにこそ、して若や姫はいかに、その

後はいかに、いそぎかたりきかせねといふも、子を思ふ心の暗、なにのあやめもわかざりしなるべし。

北の方の御なやみのをりも、忍びてとひまつりしに　若君は父上の渡らせ給ふなる所はいづくやらんと御たづねあることども、たび〳〵なりしが北の方のあなかしこ、みだりに数へもせば、をさなき心に走り出でい、行へも知らず失する事もやあらんとの御意なりしかば、何事も御慮へ申さいりしが、そのくるしさせつなさはいかばかり、その後、北の方もうせ給ひぬ。いよ〳〵たよりおはせぬ事と思ひたてまつりて、二日に一たび、三日に一たびは必ず御たづねもいたしはべりしに、去年の五月ばかり世の人々のわづらひ惱みける疱瘡にかいりて遂に失せ給ひぬ。といひもはてぬに俊寛また泣きふしぬ。俊寛あどはきかじ、かたるなといひしも實にかなしさのかぎりなりけり。

その後姫御前は奈良なる姨御前のもとへわたらせ給ひたり。この御一方のみはすこやかにわたらせ給へば、これのみは心安うおぼせ、去年の暮つかたばかり音つれ奉まつり、此島へ思ひ立ち候ふむね、きこえあげしに、斜ならず、御

よろこびありて、御文はべりとて、その文を俊寛の手にわたしゝに、そを受けとりしをりの心はいかに。かなしといはんか。はたうれしといはんか。その文は、

その後たよりなき孤子となりはてゝ、御行べをもうけたまはるたよりもなし、身のありさまをも知られまゐらせず、いぶせさのみ積れども、世の中かきくらして、晴るゝ心地なく侍り、さても三人同し咎とて、一つ島にうつされけるに、二人はゆるさるゝに、などか御身一人殘りといまり給ふらんと、人しれぬ歎きたい思し召しやらせ給へ、人々島へ流され給ひて後、そのゆかりの者をばたつねもとめて、手足を損じて責め問ふべしなどきこえはべりしかば召し仕しものどもい、遠く國々へ落ちうせて、舊里に一人もといまらざれば、都には草のゆかりも枯れはてい、立ちまきるべき方もなく、あわれいと惜し と事問ふ人もなし。君達も召し捕らるべしなどきこえしかば、母御前、弟、わが身三人ひき具して、かすかなるたよりにつきて、鞍馬の奥とかやにまよひいり、日數も見えぬ山里に、住みも習わぬ柴の庵に、忍び居て候しほどに、

朝夕は御事をのみ歎き給ひしに、うちそひ、いとけなき身々のゆくへいかにせんと、ひまなき御もの思ひのつもりにや病とならせ給ひたりしかば、弟と二人、とかくいたはりなぐさめまゐらせしかども、かなはずして空しく見なしまゐらせぬ、生きてのわかれ、死にてのわかれ、せん方なければ、二人歎きくらし、泣き明しはべりしほどに、また弟も疱瘡とかや申すいたはりをして、今年の五月に身まかりはべり、おなじ道にとなげきしかどもはかなき露の命といひながら、消えもやらで、つれなく今までは草の庵に殘りとゞまりてはべれば、うき事もかなしき事も思し召し知るべし。つたなき果報のほどこそ、宿世の身のつたなさ、はづかしく思ひはべれ、故母御前御いたはりの時われ死なば誰をかたよりとたのみおはすべき。奈良の里に姨母といふ人おはす、たづね行きうち歎かば、さりとてもこの三年までうけ給はりおきて、當時は奈良の姨母御前の御もとにはべり、おろそかなるべき事にはあらぬとも、かすかなる住居おしはかり給へ、さいかに御心つよく有とも無ともうけたまはざるらん。母御前にも弟にもおくれたのむかたなし。たれにあづけいかにせよと思し召すにか、とくして御上り候へ。戀しとも、こひし、床しともゆかし。三年の思ひなげき、水くきにつくしかたくはべればとゝめ候ひぬ。あなかしこ、

俊寛はこのながき文をはじめより、終りまで、讀み下すことを得たりしや。いかでといこほりなくよみ終ることを得ん。必ずや、一行讀てば泣き、二行よみてはさけび、やうやくにして讀み得たりしならむ。さて讀み終りていひけるは、俊寛がこの島にながされし年は、姫は十歳なりしかば、今年は十三歳とおぼえたり。ことばもおとなしく筆つきもなみ〳〵なり。されどきりつぎたるやうに、とくして上り候へ」とかきたるこそさすがはいとけなけれ。俊寛心にまかせたる道なりせば、なにかはおばらくもやすらふべき。はかなきものゝ書きやうにこそとて、聲もをしまず泣き給ふ。おばしありて、あはれかいる悲しき事きかんには、かいるはかなき文見んには、今日までなからへざらましを。思へばつらき命なるかな。とはいへまた思へば、今日までながらへたればこそ姫が文をも待ち見たるなれ。志切なる汝にもあひたるなれ。これもかれも皆神佛の御助

けのみと、思ひ出でいは思ひかへす心のほどやいかならむ。

さて有王都より菓子すこしばかり用意してもちたりけるを、取り出て、僧都にたてまつりぬ。僧都御覽ありて、こは菓子よな。久しぶりにて見たり。いとうれしけれど、こを食ひたりとてながらふべき命にあらず、またかゝるもの食ひたらば中〳〵に都こひしくなりなん、そは汝食ひてよとの給ふ。有王、主にまゐらせんとて、はる〳〵都よりもてまゐりしを、ひとつきこしめせといふ。まことにその志にそむかん、いでものせんとて、すこし食ひさし給ひて、いとめづらしき菓子なれど、あまりに疲れ衰へたる故にや、喉かわき口損じて氣味もおぼえずとて、さしおき給ふ。有王これほどの御有樣にては、日ころはいかにして、さて今日まではながらへさせ給ひけるぞと問ひければ、さればなり、三人流されてありけるころは、丹波少將の員門脇宰相のもとより一年に二度、春は秋冬、秋は春夏の料とて物などとゝけられたり。少將は心ざまよき人なりければ、そをわれ〳〵にもわかち給ひし程に、それまでは人の躰にてありしかども、去年この人々かへりのぼりて後は、事問ふものも、情をかくる人もなければ、

たれをかたより、たれをかたのまん。あはれ山にのぼりて硫黄をとり、そを商人の舟のつきたるにとらせて、からくも命をつなきぬ。されど力弱り身衰へて後は山にのぼらんこともかなはぬをいかにかせん。さては澤邊の根芹をつみ、野べの蕨を手折りてさびしき月日をおくりぬ。はてはそれすらかなはねば、涙たゝぬ日は磯に出ていゐ岩間の苔をむしり、渚によせたる海松和布をとりて明し暮しぬ。かくしつゝ一日二日とするほどに、はや四ケ年にもなりにけり。されど生けるかひありて今汝を見つるうれしさよ。もしこの事夢ならば、さめての後はいかにせんと、はなしの數のそはる毎に、互の袂に涙の數もうちそはるはいかにあはれなる事ならん。

その日も夕暮になりぬ。磯の松風、岸の波、やう〳〵ものさびしくなりぬ。なぐさめつつ、なぐさめらるゝ二人のこゝろ、いかにかなしかりけむ。

その夜、二人の人々は枕につくことを得しか。枕といふものもなからん、まろびねして安き夢をば結びたりしか。いかでねぶられん、いかで安き夢をばむすばれん、有王は海上の疲れにもかゝはらず、たゞ主をなぐさむる事にのみ心を

もちわたり。俊寛も日にこそいはね、都の事、はかなかりし妻子の事、奈良なる姫の事、皆わが胸のうちにいりきたり、出て去り、かはる〳〵はなれず、有王ひそかに頭をあけて、主のねぶりに就きたらんかとうち見れば、俊寛ねぶらず。俊寛またひそかに頭をあけて、有王のねぶりにつきたらんかとうち見れば、有王ねぶらず。主を思ひ、臣を恋のぶそのこいろざしいとあはれなるに、磯松が枝にさびしくかゝる月見れば、夜もはやいたく更けぬらむ。かく夜はふけたれど、俊寛ねぶらず。俊寛ねぶらず、有王なにとてねぶることを得ん。俊寛、有王よ、はやねぶりたるか、有王、またねぶり候はず。はやくねよかし夜もふけにけりといふ。有王、それかしは主を見まゐらせたるうれしさに、ねぶることもかなひ候はず。主こそはやく御ねぶり候へといふ。俊寛、おのれは老の身なり、ねざめかちなるは常のことなり、いましは、旅のつかれもあらん、はやいねよかしといふ。有王のうれしさにねぶられずといふは、まことにか。俊寛の老の身の常としてねぶられずといふは、こもまことにか或は去からん、されどまた別に。深きおもひのありてにやあらん。

あはれ、あはれと一度ならず二度三度いふをきゝて、有王、主には何事をなげき給ふにか、もし御心にかゝる事もあらばの給へといふ。俊寛、この身は罪深きものなれば、いかに苦しき事あればとて、今更何をかなげかん。たゞかなしきは汝のことなり、汝までこの島にてうきめを見んとおもへば、未來のこともおそろしうなん。さてはとく〳〵都にかへりのぼれといふ。あなうたての御心や、この有王老いたる母もすて、兄弟にも告げず、この島にわたりしは、命を君にたてまつり身を海底に沈めんの心なり、今日の御ありさまにては、久しかるべしとも覺えはべらず、最後を見終りまつらんほどに、こゝにてともかくもいたはり申さんといふ。俊寛、あなあつきこゝろかなとて手をあはせ給ふ。さてその夜はそれにてあけはなれたり。

日ごろの疲れもおはせしならん。有王たづねまゐらせたるにて御心のゆるびもあらん。二日ばかりへてうち臥し給ひぬ。有王今は御最後と思ひしかば、去ばしも御もとをはなれまゐらせず、日夜看病怠ることなし。ある日の夕つかたばかり息もたえ〳〵なるやうおはせしかば、御枕がみにさしよりて、いとかなし

らはべれどはやこれまでならんと思ひはべり、いひおき給ふことともあらばといふ。僧都はたゞ無念なりと答へ給ふ。有王、ふたゝび都へ歸り上り給はざることゆめ〳〵御安念に思し召すべからず、北の方も若君も空しき露と消えさせ給ひぬ。姫君は奈良におはしませば御心安かるべし、唯うき世の定めなき有樣を思ひ知り給ふべし。たとひ御妻子を跡枕にすゑおき奉り、古き都にして終り給ふとも、住み馴れし境界は御名殘をしく思し召すべし。何事もこれまでなりと思ひあきらめおはせといふ。僧都息の下に、二人は召し還され、われ一人留まりし上は、思ひきりてはありしかども、凡夫のならひ、折々は、否、たえず無念におもひ居たり、されど今汝のいふことばをきいて、そのまよひもはれたり、あはれありがたやといふ聲次第によわりて遂にうせ給ひぬ。年三十七とぞきこえし。有王、臥戸に泣きまどへども、何のかひかあらん。たゞ墓のあたりにましらのさけぶ聲のきこゆるのみ。

有王はるゝ海をわたりきて、主にあひたるはもとよりよろこばしかりしならん、されどほどもなきにまたかゝる事になりしかば、今はなかなかにたづねまゐらざる方心やすかりしならん。有王、僧都にいひたる言に、うき世の定めなき有樣を思ひ知り給ふべしとあり、されどそは人にいひたる言のみ、今このさまを見てはいかにみづからの身の上になりてはいかに、かのうき世の定めなき有樣を思ひ知りて、果してあきらめたりや、否、あなあはれ。

人もなき島の事なれば、こゝになき骸を葬るべくもあらざりしかば、松の枯枝あしのかれ葉をとりかけて、そをやきまつりてけり、その烟のたちのぼるを見ても、ひとり人の世のはかなきをかこちたらむ。茶毗こと終りてければ、その骨を拾ひて頸にかけ、商人船のたよりえて、都をさして漕ぎ出でぬ。みぬのあたりの白雲、なぎさのあたりの白波、なにとなうあはれを催すに、うちかへり見て、幾たびか、いくそたびか、袖をぬぼりしならむ。

奈良なる姫君には、かくとも知らしめさず、有王はいかに、かの島へつきたらむ。文を父上にわたしまつりしならむ。その文御覽ありて父上には泣きておはすならむ。その返事をかきておはすならん。有王はその御返事をえてことなく歸路にむかひしならむ。とは、かの姫君の有王にわかれ給ひし後の想像なりし

ならむ。とにもかくにも父上の御つゝがなきをいのり、ふたゝび御顔をゝがみまゐらせんと、朝夕いのる神佛、その孝心なにいかたとへむ。

夕露(ゆうつゆ)まげき庭に出て給ひて、ひとりつく〳〵と空(そら)をなかめ居給ふに厂かねの一つち二つち過き行くあり、父上の玉章かけてや來たらんと見送り給ふにも袖に涙のおきそはるを、月さへ出てきていとゝあはれを催すがほなり。をりしも人ありと告くるものあり。たれならんと問ひ給へは、とはそもいかに、朝夕まちにまち給ひし有王なりけり。姫にはとびたつばかりうれしうおぼされて、とくこなたにとの給ふ。有王うや〳〵しく通りきぬ。姫には、いつかへりしぞ、してかなたへは行きつきしか、又父上はいかにと問ひ給ふもいとあわたゝし。有王はたゝい畏(かしこ)まりたるのみ、顔に袖あてゝ去ばし御いらへもきこえず。姫にはいよ〳〵せき給ふ。御文は慥に御覽にいれはべりぬ。父君にはくりかへし〳〵御覽(ごらん)ありて御よろこびありしが、途にあへなくなり給ひしむねきこえしに、あはれといひざま、そのまゝ泣きたふれ給ふ。こは御骨(おこつ)なりとて、姫の前に出しゝに、そを抱き給ひて、こがれ泣き給ふさまいたいたしばかりなし。姫君は、今まで世にながらへしは、またく父上のこの世にませばとおもひてなり。さるをかくなり給ひし上は、この世になにかのぞみあらん、一日もはやく出家してあとの菩提をとぶらはん、有王いかにとおぼせ給ふ。さる御心ならんには、去ひてといめたてまつるべきにもあらず、とて、高野のふもとなる天野の別所といふ山寺に具しまつりて、出家せさせたてまつり、おのれも高野山にのぼり、奥の院に主の骨をいさめ、やかて出家入道して、終身後世をとぶらひけりとぞ。

下の巻

一　鳥羽の戀塚　袈裟御前の事蹟

鳥羽に鳥羽の戀塚といふ塚あり。こは袈裟御前を葬りたるところなりとぞ。一、とせたつぬ行きけるに、苔路の露いと滑に、尾花のうちなびきたる、いひしらすかなし、塚の上に松生ひたり。その松の絲ふかきは、やがて袈裟御前のみさをゝあらはしたるならむ。

袈裟御前、小名を阿都麿とよびたり。母は衣川といひしが、父の名は傳はらず。そのむかし事のゆかりありて、母と共に奥州なる衣川のほとりに住みけることあり、母の名を衣川とよべるはそれがためならむ。又袈裟とは母の名の衣川にちなみて名つけたるならむ、衣川はやく夫にわかれ、いとものさびしきものから、家も富みさかえたれば、外にものおもはしき事もなく、たゞ朝夕袈裟の養育にのみ心を用ゐたり。

袈裟御前容貌いとうるはしく、愛嬌こぼるゝが如し。常に深窓のもとに養はれ

し。が、軒ばの梅のにほひゆかしく、やがて十四の春を迎へたり。そのめでたき香は、風のまに〳〵いづかたへもかをりたらむ。鶯さそふしるべにはあらねど、遠くたづねきて心を通はしい人々もすくなからざりきとかや。桃櫻のごとき花ならんにはとも かくも、にほひ高きこの梅が香、いかでかさるあだ人の袖にはしまん。

こゝに左衛門尉源渡といふ人あり。いとけなき時よりほまれある人なりけり。一門なるのみならず、いと近きわたりに住みければ、衣川も袈裟もよくその人となりを知れり。この人、袈裟を申しうけんと、内外の人していひやりけるに、この人ならんには、婿としても、はづかしからずと思ひければ、いふがまゝに袈裟をつかはしたり、互の心淺からず、はやくも三年になりぬ。袈裟もことし十六とぞきこえし。さきのさかりのその色香。いかばかりかうるはしかりけむ。

月にうき雲、花に風、おもふにまかせぬは、人の世なるかな。こゝに袈裟の身にとりて、容易ならぬ事こそ出て來にけれ。そは他ならず、遠藤盛遠とよべるものより、あらぬ戀慕を受けしことなり。盛遠とは、いかなる人なるか、衣川の為にはなり。年は幾歳なるか、本年十七なり。その年の三月の中旬ばかり、渡邊の橋供養ありしが、盛遠紺村濃の直垂に、黑絲威の腹巻に袖附けて、折烏帽子にかけ、銀の蛭巻二すぢ通してまきたる長刀を左の脇にさしはさみ、さてその日の奉行してありけり。橋のあたり人々のむれ居たること數しれず、盛遠兵士ども下知して、怪我などあらせじと、たちはしるさま、いといそがはし。供養終りぬ。人々やう〳〵あらけぬ、盛遠橋の上にたちて、おばしやすらひ居たりしが、北の橋爪より、東へ三間隔てたる、棧敷のうちに、女房とおぼゆるが、おまた居たり。輿など近くよせあるは、はやかへらんとなるべし。其中に十六七にもやならんと見ゆる女房、輿に乘らんとて、簾をうちあぐるを見れば、世にありがたき女なりけり。盛遠目くれ、心消え、かれは、いづくのたれならん。またいかなる人の妻子ならん。その行方を見てやまんと、あとしたひゆく、その人を、輿のうちなる袈裟御前、おるや、おらずや。盛遠は年ごろわかけれ、この日の奉行として、兵士どもをあまた下知せし見れ

ば、なみ〳〵の人にはあらざりしなるべし。さる人にして、女にまよひ、そのあとをたづねひ行くなど、そもいかなる心ならむ。さて輿のゆくまゝに、行き行けば、並の里に出でぬ。その里なる渡が家につきぬ。かの女その家にいりぬ。さては音にきこえし衣川の女よな。今は渡が妻ときこえたり。かく戀ひ暮へど、人妻なれば、すべきやうもなし。さはいへ男と生れたる甲斐には、一夜なりとも、かゝる女にちぎらでやはとて、道なき方に道をもとめ、戀の暗路にまよひいる、その心、あさましともあさまし。盛遠渡邊の橋のはとりに、女を見そめ、それを戀ひ忍びたるはよろし、いな、よろしからず、されど血氣にはやる男子には、めづらしき事にもあらざるべし。されどその女は人の妻なり、人の妻と知りて、猶それを戀ひ忍ぶにいたりては、こをなにとかいはむ。蓋し盛遠一たび戀といふ風に吹かれてよりは、たゞ心に袈裟といふ女あるのみ。その他には人の道といふものも、人の行といふものも、名譽といふものも、功名といふものもなかりしならむ。あなあはれ。

春も過ぎて、夏とはなりぬ。盛遠、袈裟を見そめしより、こゝろも心ならず、

夜となく、昼となく、たゞその事をのみ思ひわたりしが、さてすべきやうもあらざりければ、むなしく月日を送りけり。とかくするほどに、その夏もくれぬ。秋風の身にしみ渡るに、庭のあたり虫のすだくなど、皆盛遠かためには涙の種のみ、雁もなきぬ。露もしげくなりぬ。もの思ふ身には實にうき秋なりしならむ。かくて九月となりぬ。その十三日になりぬ。夜べよりねもやらでありしが、いかにたへがたかりけむ、起き出てゝ衣川の方に赴きぬ、曉ふかき事なりしかば、人々はまだねぶり居たり。門をこえ、庭にめぐり、しづかに戶をはづして衣川の寢室をうかがふ。神ならぬ衣川、いかでかかゝるものゝ忍ひうかがふとはしるべき、例の如く起き出てんとせしに、刀をふりかざしたるあらくれ男あらはれたり。是はといひもはてざるに、はしりよりて、衣川の立頸をつかみ、さし殺さんとす。衣川夢路をたどる心地す。かくてはあらじと氣をとり直し、よく〳〵見れば、おもひきや、その人は、甥の遠藤武者盛遠ならんとは。衣川、刃の下より、和殿はなどのよな、和殿はわがためには甥なり、妾は和殿のためには姨母なり、甥と姨母との中、何のうらみかあらむ。和殿、父母にわかれ

給ひてよ、りは、孫子を思ふやうにいとほしみ奉れるものを、いかなる人の、いかなる讒言によりて、かゝる振舞はなし給ふぞ。身には露もあやまりありとはおぼえはべらず、たゞし命を助けて御怨のあるところをのべ給へといふ。盛遠目を見はりて、姨母なりとて、我を殺さんとし給ふ敵なれば、遁しまゐらせんとは思はずとて、腹にうちあつる秋の霜。衣川は肝魂もなし。さてわななきゝいひけるは、妾、寡にして夫なし、和殿に對して意趣のあるべきやうもなし。思もよらぬ事をの給ふものかなといふ。盛遠、他の人の申によりて殺さんとするにあらず。姨母君にも憂れ給ふまじ、先年袈裟御前を妻にせんとて、内々申し入れはべりしを、そはきこしめし入れず、遂に渡がもとへつかはされたり。人にこそいはね、色にこそいださね。そのをりこの盛遠のくやしさはいかばかりなりけむ。それより戀といふ奴にとりつかれ、恋のびゝて今日までは長らへたりしが、その情いやましして、身は空蟬のもぬけのからのごとく、命は、草葉の露にことならず、かゝるありさまにてはこの身は遂になきものとなりなむ、そのもとをいへば、姨母君の心よりこそ起りたる事にはべれ。姨母君こそ

われを殺し給ふなれ。姨母君こそ敵なれ。生きてもの思ふもくるしければ、敵と共に死なんとぞ思ふ、いざその覺悟してよといふ。衣川きゝもあへず、さる事にてはべりしか、さきつ年かくとはうけ給はりしが、さまでの事とは思ひはべらず、娘袈裟は父もなき身にしあれば、もとより人を撰ぶべきにもあらざりしを、渡奈ふが如くして取りしかば、力およばず、その心にまかせはべりしなり。か程に思ひ給はば、そのはからひしはべらむ、その刀を納められよといふ。そのはからひとはいかにといへば、今夜袈裟をまねきて、和殿にあはせまつらむといふ。さらばゆるしまゐらせん、但し今の難を遁れんとて、賺し給はゝ、御命を失ふのみならず、死骸までも罪しまつらむとて、刀ををさめぬ。衣川、心はじめておちゐぬ。盛遠、今のことば忘れ給ふな、いつれ今夜參らんとて、かたくちきりて出て行きぬ。盛遠の姨母を殺さんとせしは、姨母を切したるなり。衣川の袈裟にあはせんといひしは、甥を賺したるなり。盛遠の策は行はれたり、衣川の策はいかに。そもゝ人の夫となり。妻となるは人間の最大事にて、かりにもゆるがせにすべきものにあらず、夫たるものは妻をえらび、妻た

るものは夫を撰ぶはさらなり。その父その母といへども子にはよき妻をめとらしめ、女にはよき婿を迎へざるべからず。衣川ははやく夫をうしなひ、わか手ひとつにて養育したる袈裟御前なれば、母子の愛情として、必ずやよき夫をもとめしならむ。渡は袈裟の夫としてはつかしからぬものなりしならむ。あまたいひよりたるそのうちにて、渡の右に出づるものはなかりしならむ。娘の身にとりてこよなき頁繰と思ひしならむ。袈裟の身にとりてよろこばしき事と思ひしならむ。双袈裟の縁にゆくや、長く夫たのめといひしならむ。袈裟の身にとりてよろこばしき事と思ひくあれと教へしならむ。よく夫につかへよと告げしならむ。さるを今盛遠にせまられ、遂に今夜あはせんとちぎりしはいかに、娘袈裟をして身を汚さしめんとするはいかに、不義の媒をなさむとするはいかに。思ふに、はじめにもいひしが如く、盛遠にせまられ、せんすべなさにさる事をいひしならむ。一時盛遠を賺しならむ。何事も後の事は考へざりしならむ。また考ふるいとまもなかりしならむ。衣川は盛遠を見おくり、志ばしなかめてありしか、ふたゝび居間にかへりきて、うちすわりたるのみ。更にことばも出てず。やう〳〵われにかへりておもひめぐらすに、盛遠のたのみ、きいれざらんには、遂にかれのために殺されなむ。さりとて袈裟を彼にあはせなば渡か怨はいかばかりならむ。わか命はもとより、をしからず、されどわれ命をすつるやうならんには、袈裟の命もあやうからむ。渡の命もあやうからむ。とやせん、かくやせんと思ひまどふ母のくるしさ、そもいかならむ。

袈裟はかくとも知らねば、庭におり立ちて、菊などながめ居たりしに、母よりの文ありときゝて、いとよろこばしげに、●縁にのぼり、さてうちいただきて、ひらき見るに、

このほど風の心地に候ふ。うち臥すまでの事はなければ、披露まではことゞとしく候ふ。しのびておはしませ。申し合すべき事はべり。寡なる身にはかなき事のみはべり。かへす〳〵忍びて、だゝ一人おはしませ。

とあり。こは心ぼそき御文のさまかなとて、二たび三たびよみかくしぬ。よむたび毎にいとゞ胸のゝ騒ぎければ、女の童一人具して、かりそめに出づるやうにて、母のもとへといそぎぬ。

母は涙にむせびつゝ臥し居たりしが、たゞ袈裟の事のみ心にかゝり、今、ごろは、文見てあるならむ。文見ていかばかりおどろきてあるならむ。たづねきたりなば、いかにいひて心をあかさむ。思へばかなしき事なりと、たゞ泣きに泣き居たり、とかくするほどに、あわたゞしう入りきたるものあり。うち見れば袈裟なりけり。顔を見るよりいよゝ思ひやまさりたらむ、恋ばしもものいはず。袈裟はなに事もきらざりけれど、必ずやふかき子細のある事ならんと思ひけれは、枕にさしよりて、御文拝見いたしぬ、風のこゝちにわたらせ給ふよし、恋ひぬとゝて、御見舞もいたさず、その罪ゆゑし給はれといふ。母は涙をはらひて、人は皆子を生み、その子生ひ立てば、この世にては心安くはぐくまれ、またなき跡は吊はるゝものとこそきゝはべれ。さるを御身のために、わが身はところされんとす。敵を知らずして、はかなくも生ひ立てける事よと、涙もせきあへず泣きければ、袈裟、そはまた何事をの給ふにかあらん、御子とては妾より外には誰も候はず。さては、御命のあらんかぎりは、一日片時もたち離れまつらんとも覚え候はねど、母君の御ばからひとして、渡かもとへ遣され候ひしかば、

この三とせがほとは、附き添ひ奉ることも候はず。いと心苦しき事にはべれど、さりとて、母君の御事を忘れまつりし事とてはべらず。かつ夫渡もひとへに重き御事に思ひまゐらせて候へば、無らん御跡まても、心のおよばんほどは、御孝養仕らんとこそ思ひはべれ。さるを不孝のよしの給ふは、いかにぞやとかきくどく。こをきゝたる母の心はいかならむ。たゞ袈裟の顔をうちまもりて、はら〳〵と涙を落すのみ。袈裟は泣きながら母の答をもとめぬ。母はなにとも答へず。袈裟はいよ〳〵あやしみて、母上よ、この袈裟を子とはおぼさずや、この身にあやまちあらば、あらためはべらむ。また御身にくるしき事にてもおはせんには、ともかくもはからひまをさむ。とにもかくにも御心のほどあかし給へといふ。母も今は默しあるべきにあらず、とは思ひたれど、またなにとて答へむ。忽ちたちて、手箱より小刀を取り出し、これを以て、この母を殺し給へといふ。袈裟うちおどろきて、母上にはものにや狂ひ給へる。こは何事ぞといへば、母堪へずやありけむ、物に狂へるにもあらず、またそなたをにくむにもあらず、まことは、思ひの外の事こそ起りたれとて、盛遠が來りしこと、

約束せしことども數々に語りぬ。そをきゝたる袈裟のおとろきまたいかならむ。なにこともえいはで、そのまゝたふれ伏しぬ。母は娘の背をなでつゝ、世の中のならひ、娘をもちたる人の親は、常に夫をもちたる上は、操正しくして一生を過すべし。たとひいかなる事ありとも夫をかさぬべきものにあらじとこそ教訓すれ、さるを甲斐なき命をのびんとて、約束したりつるは、われながらはつかしきかぎりにこそ。さはいへ、盛遠は一たびいひ出しいこどなれば、いかにいふとも、きいいるべしともおぼえず、いかになさばよからむといふ。袈裟はあきれまどひて、なに事もいはず。志ばし心のうちにおもふやう、渡左衛門に從ひてより以來、今年にてはや三年になりぬ。その間相互にわく方もなかりしに、母の心を破らじとて、盛遠に靡きなば、日ごろの契も僞とやいはれむ。盛遠にそむきなば、母の愛目はいかばかりならむ。明日明々日ともいふ事ならんには、またなすすべもあらむを、今夜の事としいへば、さることもかなはず、實にうき世の中なるかな、と思ふ心は千萬無量、その心を誰か知る。母は知らむ。否、母といへども、その心の底はいかでか知らむ。母は、そなたの悲しさ

はよく知れり。されど今は猶豫すべきにあらず。他に思案はなきものにかといふ。袈裟答へず。母、さ默したりとて、かなふべきにあらず、よき思案なからんには、よし、この母の命を彼に授けん、さな泣きそといふ。袈裟、

母上の御命をかれにまかせんと思はば、なにとてかかく歎き申すべき。母上きこしめせ、古しへより親のためにはさらぬ孝養をもするは、子たるものゝ道とこそきゝはべれ。かゝる上は御命に代りたてまつらむ。この身を盛遠にまかせはべらむ。結の神もあはれとおぼしめせとて泣き出しぬ。

母はきくより、よくこそうけ引きくれたれ。これにてはじめて心おちあたり。道なき事をすいめたるこの母を、さこそうらめしく思ふらめ。されど他にのがるべきすべもあらねば何事もゆるしてよとうちわぶる。母の心はいかにつらからむ。袈裟思ひさためたる上は、どかく案じ給ふべかからず、こも母上の御ためなりと思へば、いと心安き事なりと、口にはかひ〳〵しう いひけれども、心のうちはいかゝあらん。さて袈裟は貞節の女なり。かりそめにも他人に身をまかせん、などいふべきものならざるは知れり。そをいひたるは母の爲のみ、母のためなるは、夫も知りたらむ。よし、一時、夫は知らざるも、遂にはその心のあるところを知りたるならむ。また袈裟は、貞婦二夫に見えざることわりを知れり。さては盛遠に身を委ねんといひたるは、たゞ口にいひしのみ。まことさる心を起したるにあらざるべし。たゞにあらざるのみならず、たゞひゝかなるうきめにあふも、夫をすてゝ他人に從はんの心はなかりしなてその罪のがるべきにあらずと思ひしならむ。されど母に答へし時は、夫に對しあらずと思ひしならむ。かくと渡の知り給はんには、その怒はいかゝあらんと思ひしならむ。何事もおばしのうちなり。おばしゆるさせ給へと、心のうちにはいくそたび、いくたび手を合しいならむ。

その日も暮方近うなりぬ。庭の芝生に露おきぬ、やゝ枯れかゝりたる尾花のかたり、いとあはれに蟲など鳴きいでぬ。袈裟は椽の方に出でゝ、さびしき空を眺め居たり。常ならましかば、月を待つともいはむ。雁かねをきくとも思はむ。歌を案じ、文を考ふとも見えむ。今はさる風流心あるにあらず、さるたのしみあるにあらず、今おばしあらば、盛遠たづねきたらむ、たづねきたらむには、なにとて彼にいらへむ。夫ある身といひてことわらむか、彼の怒はいかゝあらむ。彼の怒はおそれず、たゞその怒のために、母上の御身に事あらんにはいか

ゞせむ。彼のたづね來らざるさきに自害せんか、母上の御なげきいかばかりならむ。御なげきはよし、たゞ彼怒りに怒りて母上にあたなさば、こはまたいかにせむ。はしり行きて、夫に告げんか、わが身の操はたつべけれど、母上のためには中々にあやうからむ。彼の來るを待ちてさし殺さんか、彼は豪力のきこえあり、うち損じなば、母上の御身のあやうきのみならず、夫渡の身もいかゞあらむ、はや日もくれはてぬ。月もさしのぼりぬ。あはれ、あなすべなやと思ひまどふ心のうちやいかならむ。

俄に屏さむき風、まかきのあたりふくと見えしが、雲さへ出でゝ月の影すこしくろうなりぬ。虫の鳴音もとまりぬ。あやしと思ふほどもなく、枝折戸の方に物音す、さては、と思ひけれは、袈裟はあはたゝしくうちのかたへかけいりぬ。枝折戸たゝくものあり。母も娘もうつし心なし。枝折戸叩く音やゝつようなりぬ。猶母も娘も出でざりしに、いよ〳〵つようちたゝきぬ。をゝいといらへて、母出てゆかんとす。袈裟おばしといひて、母をとゞむ。母もたゆたひたりしに、いよ〳〵うちたゝきぬ、をゝ、をゝといらふるのみ猶はげしくうち叩けば、

母は涙ながらすがる娘をうちはなちて出て行きぬ。盛遠どのよな、待ちわびたりといふも老の功なるべし、娘もさきほどより御待ちまをしはべり、いざ給へ、こなたへといふ聲きゝ居たる、袈裟のかなしさ、おそろしさは、いかにたゝ讀者の推量にまかせむ。

盛遠入り來りぬ。袈裟涙をはらひて、志らぬさまにて出て迎へぬ。盛遠いかにとゝちよかりけむ、うちゑみて、座につきぬ。盛遠のこゝちよきほど、袈裟にはこゝちあしかりなむ、たゞ目禮なしたるのみ。母は娘のこと心にはかゝりたれど、一たびちぎりし事なれば、今更とかういふべきにもあらざりければ、心を殘してその座を退きぬ。今はその座にあるものとては、盛遠と袈裟とのみ。盛遠は袈裟の顏をうちながめて、つく〳〵そを愛らしと思ひしならむ。袈裟は盛遠の顏をうちながめて、つく〳〵にくちしと思ひしならむ。盛遠袈裟の手を取りて臥所にいりぬ。袈裟は手を取られて從ひ行きぬ。これを聞き、彼を見るにつけても、夫渡が事のみ思はれて、いみじう悲しと思ひけれど、はや籠中の鳥、またいかにともすべからざりしならむ。

それ夫婦は五倫の一なり、人としては最も重ぜざるべからざるものなり。さてはいにしへより夫は婦をいつくしみ、婦は夫をたふとび、その間いとむつましうするをもて、夫婦の道とはなしたるなり。萬葉集に、石見のや高角山の木の間よりわがふる袖を妹見つらんか」又、山こしの風を時じみぬる夜おちず家なる妹をかけて志ぬびつ」とあり。こは夫の婦を思ひてよめる歌なり。古今集に、風吹けばおきつしら波龍田山夜半にや君かひとり越ゆらむ」又、君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」とあり。こは婦の夫をおのびてよめる歌なり。かくあるべきは、夫婦の道なるを、盛遠なにものぞや。夫ある女を慈ひ志たひ、水もらさぬ夫婦の中をさえぎり、禽獸の情欲をたくましうせんとするなど、血氣のいたすところとはいへ、實ににくむべきかぎりならずや。夜もいたくふけぬ。鄙の人々もしづまりぬ。盛遠年ころのいぶせさなどいひて、さまくにくどきぬ。袈裟ことばすくなにあひしらふほどに、曉方にやなりぬらむ。鶏なきわたりぬ。鶏の鳴く聲をうれたく思ひしは、夫と共にねたりし夜の事のみ、いま鳴く聲は袈裟のためには無上のよろこび、忽ち起きあかりて、暇を乞ひぬ。盛遠けしきをかへていひけるは、會はずは逢はぬにてあるべし。弓矢とる身と生れて、かひなく女に暇とらすべきいはれなし。會はで思ひしは思ひは敷ならず、いかなる目に合ふとても、暇とらせんとは思はじ。そなたの心はいかにとて、太刀ひきぬきて傍に立ちたり。盛遠猶ことばをつきて、思ひ請けし事なれば、わが命はもとより惜からず。和御前の不祥、盛遠か不祥、渡か不祥、三の不祥か一度にくべき宿習にてこそありつらめ。覺悟してこたへせよといふ。袈裟しばしうち案じ居たりしが、心をさためていひけるは、暇をこひまつるは女のならひ、御身の志のほどを知らんとなり。何事もこの世ならぬ事に候へば、おろそかには思ひまゐらせず、おもへばこも前世のちぎりにこそはべらめ。いざわか思ふ心を知らせまつらむ、志ばしきこしめせ。妾、渡に相馴れてより今年にて、三年になりぬ。をり〳〵につけて心ならぬ事のみはべりければ、人まれす走り失せなばやと思ひし事もたび〳〵なりき。されども母の御のそむきがたさに、今まではうちこらへて候ひしなり。和殿なことにあさからず思召されんには、こころよく從ひまつらむ。たゝ左衛門尉この世にありて

は後のさはりともなりなむ、思ひきりてかれを殺し給へといふ。盛遠いたくよろこびて、さる心にて候ふよな、さて彼を殺さん謀はと問へば、袈裟、妾、家にかへりて、左衛門が髪を洗はせ酒に醉はせて、高殿に臥さすべし。御身、ぬれたる髪をさくりて殺し給へといふ。盛遠いよ〳〵よろこびて、さてはその支度せん。よきにはからひ候へとて、女を出しやりぬ、袈裟は虎口をのがれたり、されど全くのがれしには、あらず、ふたゝび彼の手にかゝりて死なんといふこゝとは、この時はやゝ思ひ極めたりしなり。夫渡には家にかへりてまたかふ事もあらむ。されど母衣川にはふたたびあふ瀬はなからむ。さては盛遠の手をはなれてこの家をいづるはうれしけれど、ふたゝびこの家を見ることは得ざるべし、ふたゝびこの家を見ることを得ざるは、やがてふたゝび母を見ることを得ざるなり。うれしきか、いかでか、うれしからむ。あはれ、その涙は草葉の露よりもおほく、その思ひは、まかきにすだく蟲の聲よりも、志げかりしならむ。

袈裟は、さらぬさまにて家にかへりぬ。夫渡にあひていひけるは、母のいたづきとて忍びて呼び給ひしほどに、昨日まかりてはべりしに、この曉かたより心地いと

ようならせ給ひたり。いと嬉しけれは、今より酒宴うちひらきて、よろこびのあそびなしはべらむ。酒肴を儲けてよきほどに請じまつらむ。妾が部屋にいらせ給へといふ。渡、そはまたよろこばしきことなるかな、庭前の菊も今をさかりとさきみだれたり。そを見つゝ共に酌まんといふもいとうれしげなり。かくて酒肴をいとなみて夕つかたより酒宴をひらきぬ、さしつさゝれつ杯の數もいたくつもりぬ。渡はすこし醉ひたるやうなれど、袈裟は醉はず。醉はぬもことわり、今夜かぎりの命にしあれば。さてはじめより夫にさとられじと、始終心をもちかたれど、女のかなしさ、思はず涙をうちもらしつ、こともありしなるべし。渡、なにかものおもはしき事にてもあるにかといふ。袈裟、ものおもはしき事なにかはべらむ、たゞ人の命はかなきものとこそうけたまはれ。今はかくむつましう酒酌みかはしてあれど、こはいつまでかあらむ。もしもはかなき事のありて、和殿にわかれ申さんとともあらむには、いかに志はべらむと、その行末の案じられて、といふ。そはよしなき物案じなり、かくては興もさめぬべし。いざ飲み給へとて杯さしぬ。うれしといひてうけたりし、その杯や袈

裳かの身にとりては、永きわかれの杯なりしならむ。渡いたく醉ひぬ。袈裟かき抱きて帳臺の奥に臥さしめぬ。ひそかに夫のたぶさをみだして女の髪にけづりなしぬ。今夜かぎりの見をさめなればさこそ悲しく思ひけめ。夫の顏にふりそぐ涙の玉數しれず。かくて宵のほどは幽なる燈火をかき立て、思ひ定めて盛遠に殺されぬる有樣など、こまゝと書き認めぬ。更にたちて佛壇に火を供へ、志ばし讀經などすめり。夜もやう〳〵深けわたりぬ。遠寺の鐘などいとものすごうひびきぬ。盛遠のおそひきたらむも、はやほどもあらざるべし。いでその用意せんとて、長やかなる髪をたぶさたけにきりて、髻になし、そを水にてうち濡しぬ。さて、樣に出でゝ、母の家の方へ向ひ手を合はせて、さきだつ不孝をゆるさせ給へといふ、母は家にありていかなる夢か見つらむ。そは知ること能はねどさだめてねぐるしうおぼえしならむ。さてまたかへりきて、夫の枕もとにさしよりて、うちみだれたる夫の寢髪を猶けづらむと、例の如くつげの小櫛をかいさぐりしに、我髪はやはや男の髪なり、櫛はさらなり。幷ひとつだになし。われながら心まどひしたりけりとて。ひとりつぶやくもはかなし。あはれ、こ

のさまはいかに。なに事もしらさでこいちようぬぶり給ふことどかな。妾はこよひ盛遠のためにころされはべり。和殿の御顏を見るもこれがかぎりにて候ふ。わがなきあとはさこそ御歎きもあるならめ。何事もこれまでなりと、

御あきらめ候へとて、かげながらいとまごひしてたち出でぬ。かくて夫の烏帽子を、わが枕元におき、帳臺の端つかたに臥して、十念唱へつゝ、今やく〳〵とまつところに、盛遠、子の刻ばかりに、忍びやかにねらひ寄りぬ。婆婆はこいぞと思ひしかば、いよ〳〵心を一つにして、彌陀の本願を念じてありぬ。盛遠ぬれたる髪を搜り合せて、唯一刀のもとに首をうち搔き、そを直垂の袖につゝみて、庭の上に出でたり。をりしも月あかうてありわたるに、雁かね一つつら二つら鳴きゆきぬ。その影を見て、その聲をきいて、盛遠はいかに思ひしならむ。心なき盛遠といへども、またいさゝかはあはれと思ひしならむ。

盛遠うれしさかぎりなく、家にかへりて、曉方までふし居たりしに、郎等一人馳せきたりて告ぐるやう、不思議のことこそ候へ。何者の所爲やらん、今夜渡左衛門殿の女房の御首を切りまゐりてはべるほどに、左衛門殿は口惜き事なりとて、門戸をとぢて臥し沈み給へりとぞうけ給はりはべる。御吊には御わたり候はずやと、いふをきゝたる盛遠のおどろきはいかにぞや。あなあはれ、さて、は夫の命にかはりけるにこそとて、人なき方にゆきて、かの首をとり出して見れば、まことに袈裟の首なりけり。さすがの盛遠も泣きたふれぬ。さばしありて起きあがり、つく〳〵と諸法の無常を觀じ、さていひけるは、生ある者は、必ず死すればこそ、三世の佛も炎の烟を示し給ふらめ。會ふ事ありて、別るればこそ、上界の天人も退没の雲には悲むらめ。まして下界をや。凡夫をや。夫婦の契、前後の怨、世の習なり。人の癖なり。されば、こはさるべき善知識なり。歎くべきにあらず。今より道心を起して、ともかくもなさむと、郎等あまた相具して、渡かがり出て行きぬ。さて門にいたりしに、かたくとざして音もせず。門をうち叩きて、盛遠參りたりといはすれば、戸を開ぢながら、内より答へけるは、御渡のことこよなきよろこびに候ふ。但し面目なき事のはべれば、向後は人々に見參せじといふ願を發せり。御かへりあるべしといふ。盛遠かさねていひけるは、女房の御首切りて候ふ奴を聞き出して、かしこへうち向ひつゝ、搦め捕りてまゐりつるほどに、おそなはりたり。いそぎ門を開き給へといひければ、なげきの中にもうれしくて、門をひらきて入れたり。さて輿に通りしに、左衛門尉は、頭もなき女房のむくろをかき抱きて泣き居たり。それと見るより

盛遠はしりより、御敵具して參りたり。まつ御首御覽ぜよとて、懐より女房の首をとりいだし、みづから腰刀をぬきて、そを左衛門尉の前におき、こは盛遠の所爲なり。和殿の頸を撥かんとて、かゝる事をし出したり。あまりに心うければ自害せんとは思ひたれど、同じくば、御邊の手にかゝりて死なんとて參れり。とく〳〵きり給ひて、御うらみをはらし候へといふ。こをきゝて渡、さては我命にかわりけるよと思ふにも、いとゞ胸のみうちふさがりて物もおぼえず。盛遠涙をうちはらひて、御歎きはさる事ながら、今はすべなし。はやくこの身をきり給へとて。さきなる刀をさし出しぬ。渡、刀はわれももてり。人の刀に依るべからず。たゞ、かほどに思はん人の頭をきりたりとていかにせむ。また自害し給ひたりとてそのかひもなからむ。今は何事も前世の宿緣と思ひなし、御邊も我も無き人の後世を弔はんとて、渡みづから刀をぬきてまづ罰をきりぬ。盛遠こを見て渡をふしをがみ、こもまた髮をきりぬ。盛遠はきはめて心まどへる男子なり。かれが心より、遂に世にもまれなる節婦をころしたり。その罪のがるべからず。その報ひけざるべからず。されどいまはそのあやまちを悔い、渡につゞきて髮をきりたるなと、佛といふ者の心はまらぬど、少かゆるすべきところはあらむか。

渡のかなしさはいかに。盛遠のくるしさはいかに。そは前にまるしたるにて、大かたは知らるゝならむ。さて母のなげきはいかに。おのれはそをうつすべき筆をもたざるなり。たゞ母は娘の居室にいり。かの手箱なる一通のかきおきを見出でたり。とる手もおそしと、うちひらき見るに、

さらぬだにも。女は罪ふかしと承りはべるに、うき身ゆゑに、あまたの人の失ひぬべければ、我身ひとつを失ひ候ひぬ。ひとり殘り留りておはしまして、歎き思召さん事こそいたはしくはべれ。何事も然るべき事と申しながら、さきだちまゐらせぬる悲しさよ。相撰へて後の世よく弔ひて給ひてよ。佛になりはべりなば母御前をも渡をも必ず迎へ奉るべし。よろづこまかに申したくはべれど、落つる涙に水莖のあと見えわかず。

露深き淺茅が原にまよふ身の
いとゞやみ路にいるぞかなしき

限りとて書く水茎の跡よりも
ぬるゝたもとぞまづ消えぬべき

と、涙にかきくれて、心まどひしけるよとおぼしくて、そこはかともなく書きみだしたり。母は一字よみては泣き、二字讀みては歎きけるが、遂によみはてい、悶焦れけるありさまは、またなににかたとへん。深き淵の底、猛き炎の中なりとも、共に入らなんとこそ思ひしに、こは何とまつる事やらん。老いて甲斐なき露の身を葎の宿に止めおき、いかにせよといふ事ならん。あはれ、昨日をかぎりと知りたりせば、飽までの顔を見なましものを。かくもしてまし、こもしてましものをと、かき口説けど、かへらぬ旅のならひ、たえて答のなきをいかにかせむ。せめての事にもとて母、

闇路にもともに迷はで蓬生に
ひとり露けき身をいかにせむ

とよみて、遂に尼になりたりとなむ。さて遠藤盛遠といへるは、頼朝の時、世にきこえたる、文覺上人これなり。こゝに上人が袈裟御前を去のびてよみたる歌一首をしるして、この篇を終らむ。

君ゆゑにうき世をそむく袈をば
苔のしたにもさこそ見るらめ

二　鶴ヶ岡　靜御前の事蹟

常なきを習ひの世中なれど、悲しきことは、又今更のやうなるものなりけり。

源義經、梶原景時が讒言によりて、兄頼朝の怒を受け、申しことゞ達らで、忍び歩きしこそ悲しけれ、その悲しき中、この苦しき中にも、つきそひて、離れざりしは、その妾靜なり。靜はもと都の白拍子なりき。一年、旱打ちつゞき、後白河法皇、神泉苑に御幸ありて、雨乞ひありける時、白拍子、百人を召して、舞はせられたり。その時、靜もありけるが、舞ひ了りて、雨俄に降り出しけり。法皇その技の堪能なるを愛でたまひ、いたく悅びたまひて日本一の、宣旨を下したまひぬ。時に義經も御前にありて、其手風の、かしこきと其容貌のうつくしきとに見めでゝ、さて契は結びけるなり。其後は、暫しも相はなれず。影の形に從ふが如く、水も、漏るまじき中とはなりぬ。されば、かばかりの事、出て來たりとて、何かあらん。武庫山おろしはげしき日も、大物の浦濤、かしこき夜も、暫しも君のもとをば、去らじと、誓ひける靜が、心の中ぞ貴きや。

馬の蹄の至らん限り、船の舳の止る極み、義經を探して、取つて出せ、目の前に首打ちくれんなど、頼朝の怒、はげしきまゝに、武士ども、汗を流して打ち向ふ。

今は、義經、都近くに忍び居るべくもあらず。竊に遁れて、大和國、吉野山、ふかくぞ落行きける。附き從ふものは、辨慶以下、親しき郎等、さてはかの靜のみなりけり。

辨慶、畏つて、義經に申しけるは、今は、御運の開かんことも、いかにか侍らん。思へば、かの都より、附き添へまつりし、靜の前こそ、いといとはしく侍れ。かゝる人を、この深山幽谷に迷はしむること、いと罪深くや侍らん。且これより、今幾志ほの難行をか、かさねたまはんずらん。御思慮あるべき事なりと申す。義經、暫し打ち案じ居られしが、辨慶が申すこと理に叶ひておぼゆ。今は、是までの縁なり。とく都へ返しつかはせといはる。辨慶以下、つゝしみて、靜にこのよしを傳へぬ。

靜きゝて、火にも水にも、君の御爲には、厭はじ。命は、素より、君に捧げて、

これまで、御供仕りしに、いかなれば、かゝる仰事は、有らん。君の御本心とも、覺えずとて、泣く。辨慶、片岡等徐に靜が事のよしを說き、こゝにて、別れまゐらするは、必竟君の御爲なり。御身君に仕へて、忠臣たり、貞女たらば、この理、辨へ知るべし。徒に繼はり居らんは、敢に見出さるゝもとなり、などと諭す。靜、君の御爲と、聞ては、私の情を挾むべくもあらず。唯伏目になりて、涙くみたるぞあはれなる。

義經、靜の手を執りて、とある木蔭に坐を占め、御身と馴れそめしより、暫しも離れじと思ひしに思はざることより、かゝるうきめを見することこそ悲しけれ。今は、相共に快く日月の光を仰くこと能はざる身とはなりぬ。おもへばこの年月の間、御身の誠を盡されしと、いつの世にか忘れん。今相別るとも、いかで、再び都の月にうかるゝ時なからん。その間、御身は、母磯禪師と、共に都にあれよ。これよりさき、荒鷲の住む山も超ゆべく。鰐の鰭ふる浦にも出づべし。しからんとき、女をつれたらんには、たゝ心の煩ひとこそなれ、この事能く〳〵悟りて、强ひて都にかへられよ。

私の愛にひかるゝべき、時にあらずと、かへす〳〵いひふくめらる。

靜、おつる涙を袖にて、まぎらかしつゝ、仰せいとかしこし。妾、いかでか、君の命に背き侍らん。されども、見そめまつりしより、嬉しきも、悲しきも同じ心に、過し來て、命は常に君に捧げ侍りつるを、今これより、別れまゐらせて、誰と共にか、都住し侍るべき。あはれ、妾が心のほどくみたまひて、思しかへしたまひてよ。若し率ゐ行きたまふこと、御煩どもならば、こゝにて、とゞもかくもなしたまはれよ。御手にかゝりて死んこそ今はこの上もなきねぎ事に侍れとて泣く。義經も、さばかりなる、靜が心をくみ見ては、何のいらへんことばもなく、たゞ膝にひきよせて、志ばし物もいはず、うつぶしゐたり。

辨慶、このさまを見て。あはれ、めゝしき、御擧動かな。君の御心ともおぼえず。又靜どのゝ、いひぶりとも思はれず。まことに、君を思ひたまふとならば、いかで、鎌倉殿に參りて事のさま、明に申し開きて、再び本の安御代と、なさんとをば、務めたまはざる難に臨みて死ぬばかりのことを、貞婦の操とおもひたまふか。常の技量にも似合はず、いで〳〵都へかへり、折を得て、鎌倉殿に

見參し、この事しとげさへたまへ。一旦の悲哀に沈みて、迷ひたまふべからず
と、懇に說き聞かす。
義經懷より鏡を取り出し、これこそ、おのれが、朝夕に貌を寫しつるものなれ。
今はのかたみに、とらすべし、見んたびごとに、義經とおもへとて、渡さる。
命こそ盡きせざりけれ、今は再び見奉ることも、叶ふまじとおもへば、取る手
もふるはれながら、

見るとてもうれしくもなきますかゞみ
こひしきひとのかげをとめねば

と、をろ〳〵にいひて請けとる。袖ははやう涙に朽ち果てけるなり義經更に枕
をとりいだして、身をはなさで、これを見たまへとて、

いそげども行もやられず草まくら
しつかになれしこゝつならひに

いかに堪へがたかりけん。財寶あまたとりそへて賜ひにけり。
靜は、おつる涙を呑みこみつゝ、御心いとかたじけなし。今は謹みて、命に從

ひまつるべし。重ねて逢ひまつるまで、かはらせたまふな。御道恙なくおはしませよ、とのみいひて、暫しはもだへたりしが、又さめ〳〵と泣き出でぬ。義經、更に初音といふ、秘藏の皷をとらす。常ならば、離別の曲をも、謠

ふべきを、忍ひの旅忍ひの道、草木のさやぎも、心にかゝれば、何かはせん。折しも、冬の真盛りなり滿山の雪は時ならぬ花を匂はせ、けしきある鳥のかゝ。こゑも、いとあはれなり花の朝を待ち、雪の夕を樂しむといふことは常の時の心なり。生別死別の際に臨みては、花も花ならず、雪も雪ならず、人よく見よといひし吉野の山も、今はたゞ歎きの森とぞなりぬる。

辨慶、日もやう〳〵傾きぬ。盡せぬ御名殘も、今は是までと思しめせ。徒にかゝる所に長居せんは、山の神のおそれもあり。衆徒の聞き出す事もやあらん。とく落ちさせたまへといふ。義經、侍どもを召出して、汝等心をつくして、靜を都なる母のもとにおくるべし。つゝしみて、な怠りそと、いひ含めて、附き從はす。靜なく〳〵退く。義經さらば心つよくあれよ。かへりて、母によくつかへよといひて、やがて二道に別れぬ。靜は、しばし立ちどまりて、後影をふしおがむ。義經も、またふりかへり〳〵して、打ちまねく、峯にのぼり、谷にくだり、すかたの見ゆるほどは、互に、ふりかへり〳〵せしが、はてはやう〳〵遠ざかり、行きて爪立てども、見えず、をめけども、聞えずたゝ山彦の答ふる聲のみぞ殘れる。

日は西に傾きぬ。雪はいよ〳〵降しきりぬ。猿の聲遠近に聞えて、あはれを語ら、人もなく、こゆれどこゆれど、山また山なり。

利に迷ふほど、おそろしきことはなし。靜につきそひたる、侍ども、互にさゝやきけるは、靜殿を、おくらんは、さる事なれど、鎌倉殿の侍に縛められて、かなしきめに逢はんこと、必定なり。我君の都かへりし給ふこと、いつの世とも、はかりがたし。さらば、こゝより、靜をすて、この財寶をもて、人しらぬ里に落ち行かんと、臆病未練の者ども、義をも忘れて、靜にいふやうは、こゝなる、枯木のもとに、敷皮しき參らせん。しばし御息つがせたまへかゝる山路に、行き暮るゝこともあらば、いかにとも術なからん。この麓に、觀音の立せたまふ所あり。別當も侯へば、行きて宿乞はん。しばしまたせたまへといふ。靜は、圖られたりとは、いかでかしらん。げにさる事とおもへば、いふがまゝに、腰打ちかけぬ。さて侍ともは皆下りぬ。

日は暮れぬ月かすかに見ゆ、雪は降りやみたれど、いやが上につもりて、道も

見えわかぬまでになりぬ。靜は、まてども、まてども、侍どもの、上り來さるを、いとあやしく、審かしくおもへども、尋ねんよしもなければ、今一時〳〵と待ちけるに、夜はます〳〵、更けゆきて、たゝ下折れの音のみ打しきる。あゝら、かの男どもは、妾をすてけるなり。財寶に目くらみて、われをまどはしつるなりと、腹たちてくやしかれど、せんやうもなく、やうやうに、枯木のもとを立ちいでぬ。

白拍子といへば、その品こそいやしけれ。都にありしころは、車ならでは、歩くことも稀なりし、かよわき身の、山といへば、愛宕、鞍馬の外は、かしこきものも、なきと思ひしものゝ、かゝる山路に暮れまどひて、しらぬ道をたどりゆく、あはれとも、いとあはれなりまことや大物の浦波かしこかりしも武庫山おろしはげしかりしも思ふ人に附き纏ひしころは、何とも思はざりしを、今は其人にも放たれ、剩へ供にとて遣されし侍どもにさへすてられて、山路に行きくるゝ身、いかなる罪の報にかあらん、いとかなしく命も縮むやうなれど、君の御身の上を思ひて、せめてながらへけるなり。

耳に聞ゆるものは、杉の枯葉をわたる風、目にさへぎるものは、梢に照す月の影、谷かげに音するものあるを聞きつけて、たどり行けば、雪の底をくぐる水の流なり。戀しき人もかゝる道にや行きくれたまふらんと思はず泣かれけるに答ふるものあるを強ひてたどればこだまのひゞきなりけり。今は涙も氷り、聲も枯れて、再び本の道に攀ぢ上り見れば、我ふみわけしあとより外は、人の足あとだになし。

月の光の清きに、かたみの鏡、をもひ出て見れば、涙にくれておのが姿さへ見えわかず。木葉、岩角につもりたる雪、をりゝことに吹きたてられては、目の前も見えず、はては、きたる笠も風に奪はれふみたるわらじも雪にとられて足は皆ふみやぶり流るゝ血は紅をそゝぎて峯の白雪そめぬところもなし裾はつらゝに閉ぢられ袖は涙にこほり手かゞまり息盡きて今は一足だにもえゆかず、とある岩かげに倒れてとよひはあけぬ。

あけゆく、おそしと、猶行けども、道は例の埋れて、とるすれば、谷底にも轉び落ちんやうなり。人の足跡あるを見ては、君の御跡にやと慕ひ行けば、やが

て吹きまく雪に、かきけされぬ。辛うじて、大道に出でぬとおもへば、あらぬかたなり。あはれ死なんとは、たびく思ひしかど、君の愁なりし御志にそむくをいかにせんと、思ひかへして、やうくに行く。

むかひの丘に火かすかに見ゆ。いかなる里ならん。炭賣る翁もかよはざれば、竈の火にても、あらじ。夏ならねば、螢などにもあらざるべし。たどりこそて行けば、あなうれしや、座王權現の塔婆の火なり。生きかへりたる、心ちして、近けば、寺あり、僧居り、堂あり、人多く集れり。こゝは、いづこかとふに、吉野の御嶽といふに、うれしさは。いよゝ限りなし、まして、けふは、權現の縁日などかたるに、靜の悅びは飛びたつばかりなり。近づきて、拜みまゐらす。内陣外陣の裝きらかに。猿樂の舞、白柏子の舞などもあるに、むかしの事思ひ出でんやは。靜は、念珠を爪ぐりて、たゞひたすらにふしをがむ。義經夢にだにもこれを聞かれなばいかにあはれと思されん。磯禪師そらみゝにだにしらばいかに悲しとなげかん。

若大衆とも、このさまを見て、あな美しの女の姿や。かたちこそやつれつれ。いかなる人にかあらんなどいひさやぐ。靜は餘念なく拜み了りて、石段を下りんとするに、大衆ども。あはれにも、ものしたまふかな。年さへわかきに、たゞひとり登りたまふこそ心得ぬ。御名きかせたまへなどいふ中に、老僧出來て、

げにたゞ人とも覺え申さず、權現の御前にて御法樂候へかしといふ。靜かしこまつて、妾は近きほとりのものにて、させる藝能あるものにても候はずといふに、老僧、さて〳〵何事をのたまふにか。この權現は、靈驗無双にわたらせたまふものを、おもしろからぬ事なりとも、わが身に知るほどの事を、盡せば、必そのよろこびを重ねたまふらん。これ私にいふにあらず。權現の託宣に候といひ。靜、きゝてあなおそろしや、今は何をか包み申さん。妾は、この世中に名をしられたるものに侍る。神は正直の頭に宿りたまふといへば、かくて隱し居らんも、いとかしこし。法樂の舞つかまつらん、見しりたる人はよもあらじとて、用意の衣着かへて、堂に立ちあがる。素より名人の事とて、一節だに、怠ることなし。見る人皆なみだおとしぬ。舞ひやう〳〵酣なるころ、靜、

ありのすさびの、　にくきだに、　ありきのあとは、　戀しきに、　ありてはなれし、　おもかげを、　いつの世にかは、　忘るべき。」　別れのことに、かなしきは、　親のわかれ、　子のわかれ、　すぐれてげに、　悲しきは、夫婦の別れなりけり。」

といひもあへず、衣うちかつぎて、ふしぬ。人々これをきゝて、いかなる人ならん。夫を戀ふるものとぞ思はるゝ。聞かばやといふ。老僧、徐にこれを離とかおもひつる音にきこえし靜の前よといふに、太衆どもかしこまる。さらば、判官殿を、慕ひ申すとこそおぼゆれ。あはれなる事かなといひつゝ、坊に誘ひ行きぬ。かくてその日は、こゝにとゞまりぬ。

翌朝、老僧來て、靜を馬にのせ、人さへつきそはせて、都におくりつかはしぬ。迎へとりたる母禪師が心たゞおもひやるべし。

忍ぶことも、猶もれやすき、世なるに、山僧おごそかに送りこしかば、靜が、都にかへれりといふこと、誰知らぬものなきに至りぬ。北條時政、時に、六波羅にありけるが、直に人をして、このよし、鎌倉に告げぬ。頼朝、即ち令して、母禪師と共に、鎌倉に引致せしむ。荒武者どもに、護送せられて、行く二人が心、いかにかなしかりけん。

靜は、名高き白柏子なり。いで〳〵見んと、頼朝の館には、和田、畠山をはじめ、千葉、梶原の徒、ことごとく寄り集りて、今か〳〵と待つに、はやつきぬ